３　活動記録

(1)　第１回シンポジウム

フライヤー(案内チラシ)、当日配布資料、当日投影資料、アンケート集計、議事録、当日スナップ

新市庁舎の【活用】を考えるシンポジウム実行委員会

新市庁舎の【活用】を考えるシンポジウム

～横浜市新市庁舎は街を活性化できるか？～

【日　　時】平成 27 年 8 月 28 日 (金)　18：30 ～ 21：00
【場　　所】横浜市開港記念会館　講堂
【主　　催】横浜新市庁舎の活用を考えるシンポジウム実行委員会
【参 加 費】無料（申込不要）

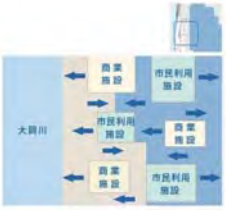
【タイムテーブル】

18:30-18:40　趣旨説明
18:40-19:00　新市庁舎の現状と今後の進め方（横浜市新市庁舎整備担当 / 都市デザイン室）
19:00-19:40　ゲストによる公共空間、水辺空間の賑いづくりの事例紹介
・富山グランドプラザ　…山下裕子氏（ＮＰＯ法人ＧＰネットワーク理事）
・水都大阪　…泉 英明氏 (一般社団法人　水都大阪パートナーズプロデューサー)
19:40-19:50　休憩
19:50-20:50　パネルディスカッション「新市庁舎の【活用】を考える　～横浜市新市庁舎は街を活性化できるか？～」
山下裕子氏、泉英明氏、本多初穂氏 (馬車道商店街)、宮島真希子氏 (NPO 法人横浜コミュニティデザイン・ラボ)　　モデレーター：国吉直行氏 (横浜市立大学)
20:50-21:00　クロージング

新市庁舎の【活用】を考えるシンポジウム

～横浜市新市庁舎は街を活性化できるか？～

趣旨：



「横浜市新市庁舎デザインコンセプトブック」より

2020 年のオープンに向けて、横浜市新市庁舎の施工事業者募集が始まりました。いよいよ本格的にスタートします。新しい市庁舎の敷地である北仲通地区は、横浜らしい水辺に面した場所であり、みなとみらい 21 地区と関内地区、野毛地区などの結節点でもあります。

この場所に建設される新市庁舎の特に足元の部分には、大岡川沿いの水辺空間との関係性を考えながら商業や市民利用施設などを配置する、とされています。さらに新しくまちの玄関となり、「祝祭性・おもてなし」の場ともなる「屋根付き広場」が設けられる予定です。これらの空間が活き活きと使われた時、新市庁舎は、横浜のチャレンジ性をお見せする場、国内外のお客様をお迎えするハレの舞台や、私たち横浜市民が活動し、交流する場となることが出来るでしょう。

新しい市庁舎の低層部がそのような横浜を象徴する場、横浜にしかできない先進的な開かれた場となるためには、今この時点で関心を持つ市民や様々な活動団体、企業などが、アイデアを出し合いながら、「真に街に開かれた空間」の様々な活用やマネージメントについて、横浜市と一緒に議論を始めるべきである、と考えます。今回企画するシンポジウムを、新しい市庁舎の【活用】について、官民が手を携えて考える場づくりの第一歩としたいと考えています。
ぜひご参加ください。

横浜市新市庁舎整備ＨＰ：http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/kanri/newtyosya/

ゲスト：

山下　裕子　氏

広場ニスト／全国まちなか広場研究会／ NPO 法人 GP ネットワーク理事

2007 年富山市まちなか賑わい広場グランドプラザ運営事務所。2010 年（株）まちづくりとやまグランドプラザ担当。現在、NPO 法人 GP ネットワーク理事、（株）ハイマート久留米にて、ひと・ネットワーククリエイター。
著書に「にぎわいの場　富山グランドプラザーー稼働率 100%の公共空間のつくり方」（学芸出版社）

泉　英明　氏

有限会社ハートビートプラン代表取締役／ NPO 法人もうひとつの旅クラブ理事／
（一社）水都大阪パートナーズプロデューサー

高松、下関の中心市街地再生、モノづくりのまち高井田住工共生まちづくり、着地型観光事業「OSAKA 旅めがね」、水辺公共空間のリノベーション「北浜テラス」、水辺や船の楽しみ方を創造し、世界に発信する「水都大阪」事業推進などに関わる。

パネリスト：

山下裕子氏、泉英明氏、本多初穂氏 (馬車道商店街)、宮島真希子氏 (NPO 法人横浜コミュニティデザイン・ラボ)
モデレーター：国吉直行氏 (横浜市立大学)

【主　　催】横浜新市庁舎の活用を考えるシンポジウム実行委員会
（横浜商工会議所、関内まちづくり振興会、馬車道商店街協同組合、横濱まちづくり倶楽部、水辺荘、横浜市）
事務局　NPO 法人横浜コミュニティデザイン・ラボ　info@yokohamalab.jp

新市庁舎の【活用】を考えるシンポジウム
～横浜市新市庁舎は街を活性化できるか？～

【日　時】 平成27年8月28日（金）18:30～21:00

【場　所】 横浜市開港記念会館 講堂

【主　催】 横浜新市庁舎の活用を考えるシンポジウム実行委員会

（横浜商工会議所都市政策委員会、関内まちづくり振興会、馬車道商店街協同組合、
野毛地区街づくり会、横濱まちづくり倶楽部、よこはま市民メセナ協会、水辺荘、横浜市）

【タイムテーブル】

18:30～18:40　趣旨説明
18:40～19:00　新市庁舎の現状と今後の進め方（横浜市新市庁舎整備担当／都市デザイン室）
19:00～19:40　ゲストによる公共空間、水辺空間の賑い作りの事例紹介
・富山グランドプラザ・・・山下 裕子氏（NPO法人GPネットワーク理事）
・水都大阪・・・泉 英明氏（一般社団法人水都大阪パートナーズプロデューサー）
19:40～19:50　休憩
19:50～20:50　パネルディスカッション
「新市庁舎の【活用】を考える　～横浜市新市庁舎は街を活性化できるか？～」
山下裕子氏、泉英明氏、
本多初穂氏（馬車道商店街）、
宮島真希子氏（NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボ）
モデレーター：国吉直行氏（横浜市立大学）
20:50～21:00　クロージング

※　9月27日（日）の18時30分より横浜市開港記念会館講堂にて２回目のシンポジウムの開催を予定しています。
２回目のシンポジウムでは「屋根付き広場の活用」「水辺空間の活用」「市民利用施設・商業スペースのアイディア」等のテーマを設け、今回のシンポジウムを踏まえ、より議論を深めて参りたいと思っております。ぜひ、ご参加ください。

【パネリストプロフィール】（敬称略）

山下 裕子（やましたゆうこ）

広場ニスト／全国まちなか広場研究会／NPO法人GPネットワーク理事
2007年富山市まちなか賑わい広場グランドプラザ運営事務所、2010年株式会社まちづくりとやまグランドプラザ担当。現在、NPO法人GPネットワーク理事、株式会社ハイマート久留米にて、ひと・ネットワーククリエーター。著書に、「にぎわいの場 富山グランドプラザ――稼働率100%の公共空間の作り方」（学芸出版社）

泉 英明（いずみひであき）

有限会社ハートビートプラン代表取締役／NPO法人もうひとつの旅クラブ理事
一般社団法人水都大阪パートナーズプロデューサー
高松、下関の中心市街地再生、モノづくりのまち高井田住工共生まちづくり、着地型観光事業「OSAKA旅めがね」、水辺公共空間のリノベーション「北浜テラス」、水辺や船の楽しみ方を創造し、世界に発信する「水都大阪」事業推進などに関わる。

本多 初穂（ほんだはつほ）

馬車道商店街協働組合理事
舞台関係の仕事を経て、1999年 神奈川案内広告株式会社（勝烈庵のグループ会社）入社。2001年より勝烈庵グループ取締役。2012年より代表取締役社長（現職）

宮島 真希子（みやじままきこ）

NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボ理事/NPO法人シャーロックホームズ理事
横浜市出身。前職の神奈川新聞社には記者として22年在籍。退職後、地域情報化・当事者による発信支援を軸に活動。先のNPO法人のほか、対話の場づくりを担う人材を育成するNPO法人「アイデア創発コミュニティ推進機構」の副理事も務める。青山学院大学学校教育法履修証明プログラム修了認定ワークショップデザイナー。

【モデレータープロフィール】（敬称略）

国吉 直行（くによしなおゆき）

横浜市立大学まちづくりコース特別契約教授／横浜市都市美対策審議会専門委員
早稲田大学理工学部建築学科卒業。1971年横浜市入庁。入庁後一貫して横浜市の都市デザイン行政を担当（都市デザイン室長、上席調査役エグゼクティブアーバンデザイナー等）。2006年以降は横浜市及び横浜市立大学で活動。2011年横浜市を退職。現在、横浜市立大学まちづくりコース特別契約教授（都市デザイン担当）。

新市庁舎の【活用】を考えるシンポジウム
アンケート

本日はご参加いただき、誠にありがとうございました。
皆様のご意見を今後の参考とさせていただきます。
アンケートへのご協力をお願いいたします。

１．本シンポジウムについて、どのようにして知りましたか。

２．新市庁舎の低層部（１階～３階部分）について必要だと思うもの、低層部を活用してどのような活動を行いたいか、どのような活動が行われることを期待するか、等、新市庁舎低層部の活用方法について、ご意見がございましたらご記入ください。
（100字以内でお願いいたします）

３．９月27日（日）の18時30分より２回目のシンポジウムの開催を予定しています。
２回目のシンポジウムでは、屋根付き広場の活用、水辺空間の活用、市民利用施設・商業スペースのアイディア、等のテーマを計画していますが、上記のテーマもしくは、それ以外のテーマでも結構ですので、ご意見やアイディアがございましたらご記入ください。
（100字以内でお願いいたします。

４.ご自身について、お伺いします。（記入は任意です）
お名前　　（　　）
メールアドレス　（　　）※次回のご案内をお送りします。

※いただいた個人情報は、次回シンポジウムのご案内をお送りする目的以外には使用いたしません。

なお、アンケートは後日FAXまたはメールでお送りいただいても結構です。
（宛先）FAX : 020-4666-6061　MAIL : info@yokohamalab.jp

～ご協力ありがとうございました～

新市庁舎整備 について

1　これまでの経緯

昭和34年	9月	現市庁舎しゅん工
平成３年	６月	「横浜市市庁舎整備審議会」設置
平成７年	１月	「横浜市市庁舎整備審議会」答申　　建設候補地として次の３地区を選定 「港町（現庁舎）地区」、「北仲通地区」、「みなとみらい21高島地区」
平成19年	12月	「新市庁舎整備構想素案」公表　　整備候補地を次の２地区に絞り込み 「港町（現庁舎）地区」、「北仲通南地区」
平成20年	３月	北仲通南地区の土地を取得
平成24年	５月	市会に「新市庁舎に関する調査特別委員会」設置
平成25年	３月	「新市庁舎整備基本構想」策定　　整備予定地を「北仲通南地区」とする
平成26年	３月	「新市庁舎整備基本計画」策定
	９月	市会で「市の事務所の位置に関する条例」一部改正議案可決 「横浜市市庁舎移転新築工事技術提案等評価委員会条例」制定議案可決
	12月	「新市庁舎整備計画概要」公表
平成27年	５月	市会で「市庁舎移転新築工事」に係る補正予算議案可決
	６月	「新市庁舎移転新築工事」入札公告

2　新市庁舎の整備場所

地　区	北仲通南地区	敷地面積	約 13,500 ㎡
位　置	中区本町６丁目 50 番地の 10	現　況	更地
		主な都市計画制限等	用途地域：商業地域 容積率の最高限度：1,080% 高さの最高限度：190m 北仲通南地区第二種市街地再開発事業 北仲通南地区再開発地区計画
周　辺 環　境	馬車道駅(みなとみらい線)から徒歩１分 桜木町駅(JR、市営地下鉄)から徒歩5分	ガイドライン	北仲通地区まちづくりガイドライン 関内地区都市景観形成ガイドライン

3　建物の概要

・構　　造　：　鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造
・階　　数　：　概ね地上 32 階、地下２階
・高　　さ　：　約 160m
・延床面積　：　約 140,500 ㎡

（㎡）

		市庁舎の現状 （平成 25 年 10 月） ※民間ビル含む	基本計画 （平成 26 年３月）	今回の計画 （平成 27 年５月）
専用部	行政部門	約 59,300	62,600	59,500
	市会部門	約 3,750	9,000	9,000
	商業機能	－	4,000	4,000
共用部		－	53,300	52,000
駐車場		－	17,900	16,000
合計		－	146,800	140,500

4　建物計画（新市庁舎整備計画概要）　《資料１参照》

新市庁舎整備基本構想(平成 25 年３月)で定めた「新市庁舎整備の基本理念」及び、新市庁舎整備基本計画(平成 26 年３月)で定めた「新市庁舎の整備基本方針」を踏まえて、26 年度には、建物計画について具体的な検討を進め、工事の発注に向けた設計要件を整理しました。

■新市庁舎整備の基本理念■

① 的確な情報や行政サービスを提供し、豊かな市民力を活かす開かれた市庁舎
② 市民に永く愛され、国際都市横浜にふさわしい、ホスピタリティあふれる市庁舎
③ 様々な危機に対処できる、危機管理の中心的役割を果たす市庁舎
④ 環境に最大限配慮した低炭素型の市庁舎
⑤ 財政負担の軽減や将来の変化への柔軟な対応を図り、長期間有効に使い続けられる市庁舎

5　設計・建設費と事業者の公募

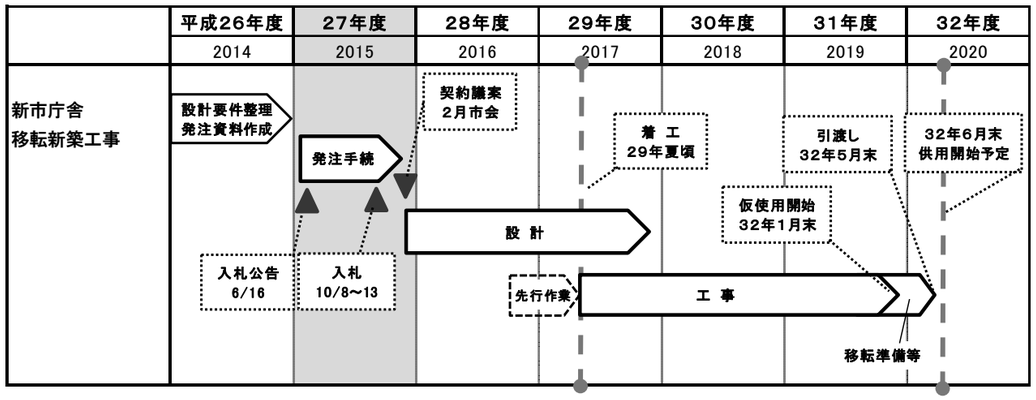
基本構想及び基本計画策定時は、民間事業者へのヒアリングによる建設単価(面積約 16 万㎡の庁舎を想定)に新市庁舎の延床面積を単純に乗じて設計・建設費を試算していましたが、26 年度は、ＣＭ(コンストラクション・マネジメント)※ 事業者を導入して、建物計画の概略的な設計資料をもとに積算を行い、27 年秋時点(入札予定時点)での設計・建設費を算出しました。（下表）

このうち、別途発注予定の低層部内装等工事(約 30 億円)を除く 719 億円を上限額として、設計と工事を一括して行う事業者を公募(入札公告)し、技術提案と価格を総合的に評価して契約相手を決めます。

※ＣＭ（コンストラクション・マネジメント）：
技術的な中立性を保ちつつ、発注者（本市）側に立って、発注・設計・施工の各段階において、工事発注方式の検討や設計の検討、工程管理、品質管理、コスト管理などの各種マネジメントを行うこと

項　目	金　額	項　目	金　額
建築工事	４３８．５億円	その他工事	１４．５億円
電気設備工事	６６．０億円	消費税（８％）	５３．７億円
給排水衛生工事	２５．５億円	**建設費（合計）**	**７２４．０億円**
空調換気工事	８３．０億円	**設計費等（税込）**	**２５．０億円**
昇降機工事	４２．８億円	**設計・建設費（合計）**	**７４９．０億円**

6　今後のスケジュール



◆新市庁舎整備計画概要　　1　計画検討の視点

新市庁舎整備基本計画 （平成26. 3）

基本理念	整備基本方針
①的確な情報や行政サービスを提供し、豊かな市民力を活かす開かれた市庁舎	◆市民への情報提供・相談・案内機能等の充実 ◆市民協働・交流空間の整備 ◆開かれた議会の実現
②市民に永く愛され、国際都市横浜にふさわしい、ホスピタリティあふれる市庁舎	◆市民に親しまれ、来庁者が横浜らしさを感じる空間の整備 ◆周辺環境や都市景観との調和 ◆おもてなしの場の実現
③様々な危機に対処できる、危機管理の中心的役割を果たす市庁舎	◆大地震等が発生しても業務継続が可能な構造体や耐震性の確保 ◆災害対策本部機能の充実 ◆セキュリティの確保
④環境に最大限配慮した低炭素型の市庁舎	◆先進的な環境設備・機能導入によるエネルギーコストの削減と環境負荷の低減 ◆自然エネルギーや再生可能資源の有効活用と緑化推進
⑤財政負担の軽減や将来の変化への柔軟な対応を図り、長期間有効に使い続けられる市庁舎	◆長期間有効に使い続けられる市庁舎の実現 ◆将来の変化への柔軟な対応と効果的・効率的な業務遂行が可能な執務室

⇒ 建物として必要な項目を精査・検討

建物に求める内容検討

【 行政サービス・ 開かれた市庁舎】
- 低層部に情報や行政サービスを確実に提供する場を創出
- 多様化する課題に対して市民が積極的に参加し、交流を活性化する場
- 伝統ある横浜市会の雰囲気を大切にしつつセキュリティにも配慮し傍聴スペースの拡充等による開かれた議会

【 ホスピタリティ 】
- 市民が親しみを持ち、来訪者が横浜らしさを感じる施設
- まちのシンボルとなり、市民が誇れ、周辺環境や都市景観に調和した外観デザイン
- 賑わいを創出し、市民や来街者を迎え入れ自然に人が集う場

【 危機管理機能】
- 大地震に対する建物強度の確保、及び耐震性能の確保、免震、制振技術の採用、非構造部材や建築設備の耐震性能確保
- 災害対策本部としての役割を果たすべく、災害時のスペース確保や設備の整備による業務継続性の確保
- 行政情報、個人情報保護に配慮した施設

【 低炭素建築】
- エネルギーコストの削減と環境負荷を低減する、先進的な設備技術の採用
- 創エネルギーとして、太陽光発電等の採用
- 自然風・ 採光の取込み等、多様な環境配慮・ 省エネルギー技術の採用
- 緑化の推進、環境配慮材の利用等地球環境に対する配慮

【 長寿命建築・ 管理修繕コスト 】
- 建物の長寿命化に配慮した、設計、建材、構法の採用
- 将来の施設利用の変化に対応できる柔軟性の確保
- しゅん工後のCO_2排出量に配慮した運営・ 設備更新計画の検討
- 業務効率の向上が図れる快適で機能的な執務環境

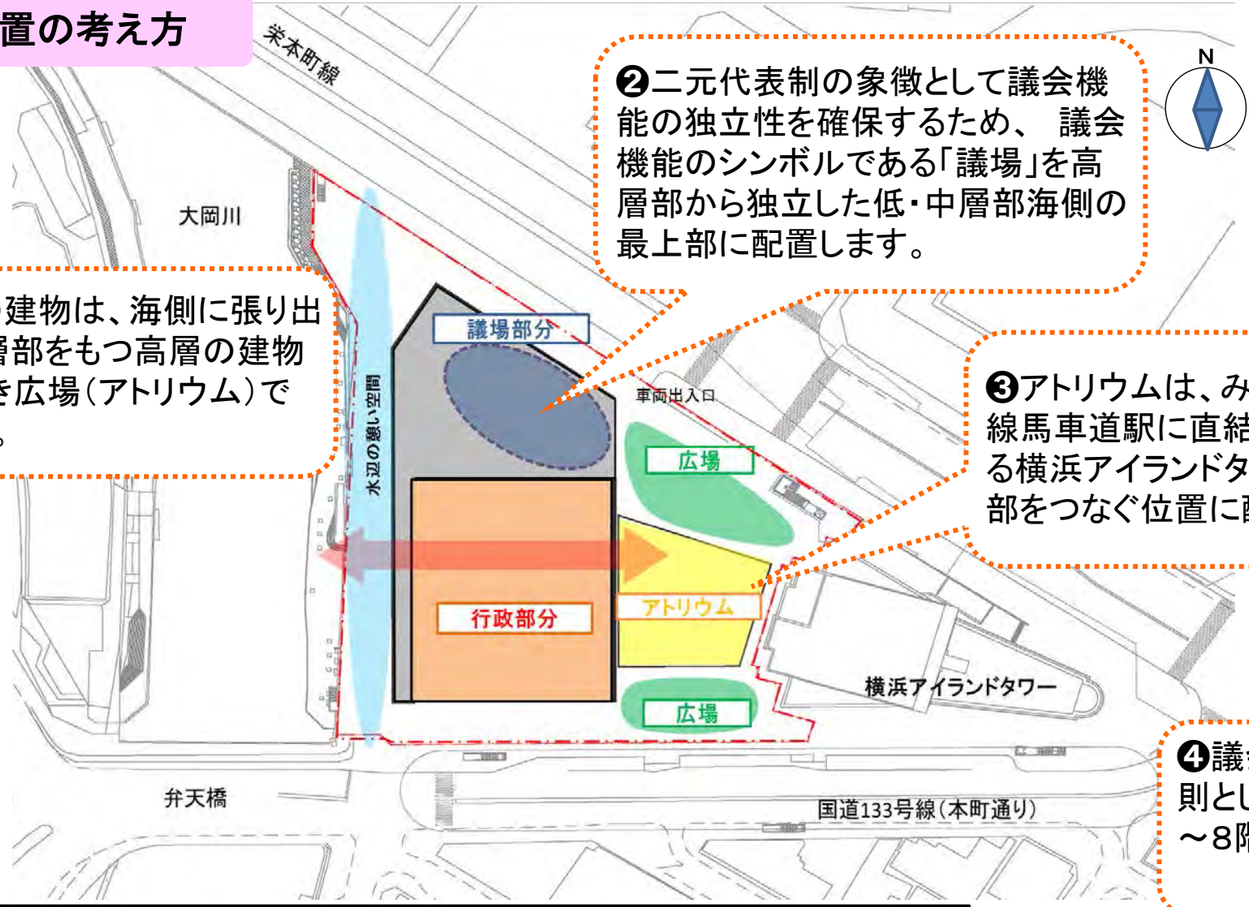
⇒ 特に施設計画上、重要な項目を抽出

抽出した建物の計画項目

- 地上部の建物は、海側に張り出した低・中層部を持つ高層の建物と、開放的な屋根付き広場（アトリウム）で構成します。
- 二元代表制の象徴として議会機能の独立性を確保するため、シンボルである「議場」を低・中層部海側の最上部に配置します。
- みなとみらい線馬車道駅に直結するアトリウムは、大きな吹き抜け空間として市民や来街者の「祝祭性・おもてなし」の場とします。
- 低層部（1階～3階）には、市民利用機能や店舗を、アトリウムや水辺の憩い空間(大岡川沿い)との関係性を考えながら配置します。
- 議会機能や行政機能へのエントランス(出入口)は3階に設け、待合機能を持つグランドロビーをアトリウムに面して設けます。
- 主要な機械室は、津波による浸水の可能性を考慮して、4階以上に配置します。
- 議会機能は原則として3階及び5～8階に配置し、利用しやすい動線計画、ゆとりをもったスペースの確保、傍聴席の拡充・新設などに配慮します。
- 行政機能は8階以上に配置し、将来の組織改編などに柔軟に対応できるよう計画します。
- 大地震発生時においても事業継続が可能な高い耐震性能を確保します。
- 環境関係技術開発の動向等を見極め、環境未来都市にふさわしい庁舎とします。

※図面は、発注要件を整理するために作成したイメージ図です。

建物配置の考え方



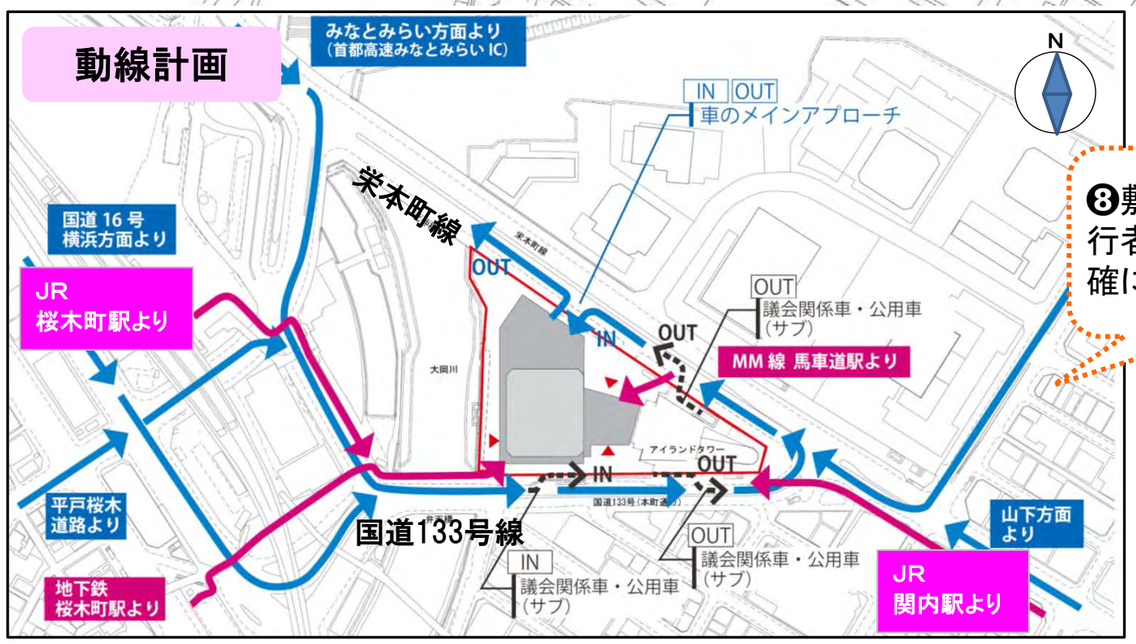
❶地上部の建物は、海側に張り出した低・中層部をもつ高層の建物と、屋根付き広場（アトリウム）で構成します。

❷二元代表制の象徴として議会機能の独立性を確保するため、 議会機能のシンボルである「議場」を高層部から独立した低・中層部海側の最上部に配置します。

❸アトリウムは、みなとみらい線馬車道駅に直結し、隣接する横浜アイランドタワーと高層部をつなぐ位置に配置します。

❹議会機能は、原則として3階及び5～8階に配置します。

動線計画

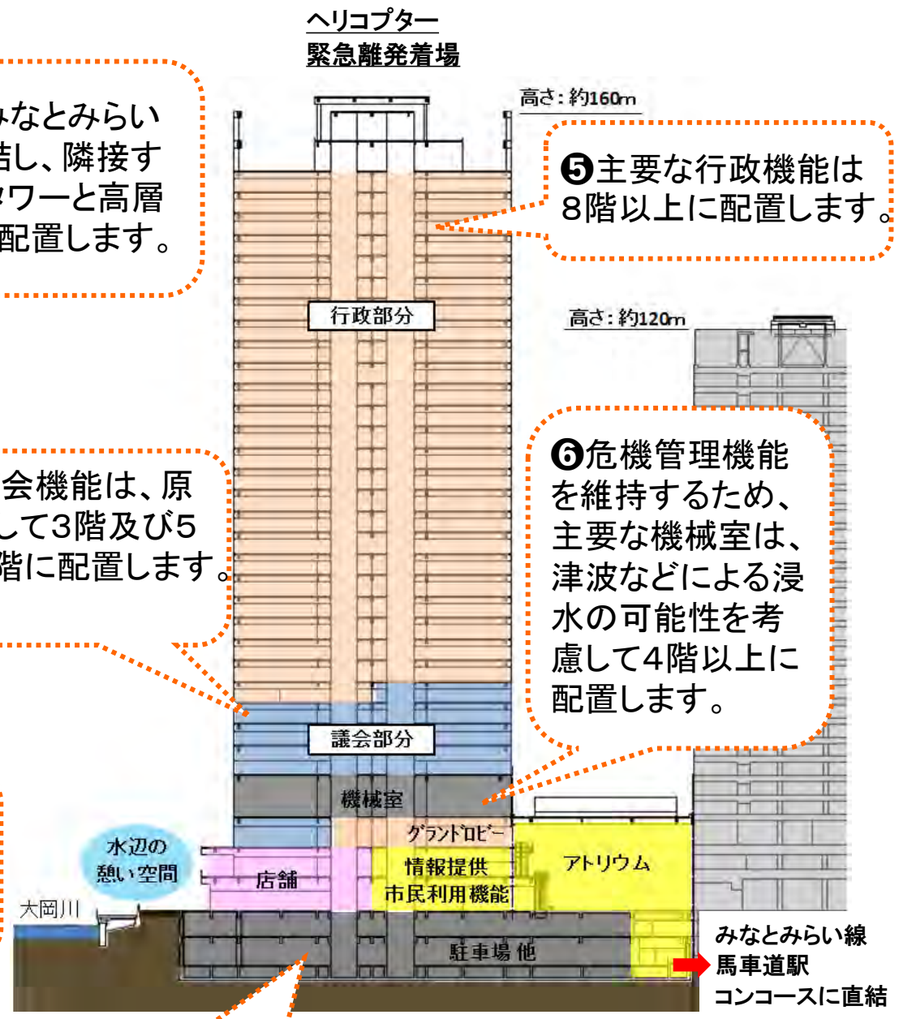


❽敷地内における歩行者及び車動線を明確に分離します。

周辺からの動線

← 歩行者動線

← 車動線



❺主要な行政機能は8階以上に配置します。

❻危機管理機能を維持するため、主要な機械室は、津波などによる浸水の可能性を考慮して4階以上に配置します。

❼地下1、2階には、約400台分の駐車場や駐輪場を設けます。

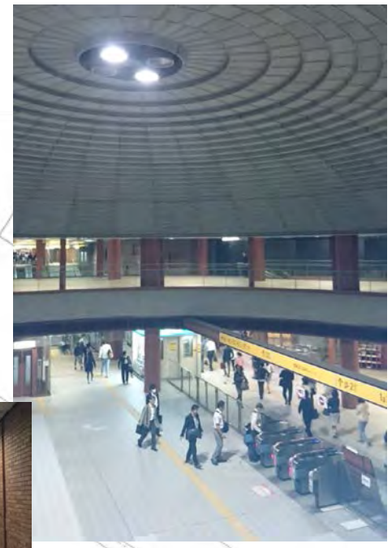
断面イメージ図

◆新市庁舎整備計画概要　　3　建物計画　【１階平面】

②大岡川沿いには、水際線プロムナードの一環として、幅6mを基本とした水辺の憩い空間を整備します。

【水際線プロムナードイメージ】
写真：長崎水辺の森公園

【アトリウムにおけるイベント展開イメージ】
写真：ゲートシティ大崎



【みなとみらい線馬車道駅】

【馬車道駅市庁舎接続部コンコース】

1階平面図

※図面は、発注要件を整理するために作成したイメージ図です。

③大岡川沿いの水辺の憩い空間と屋根付き広場（アトリウム）をつなぐ回遊空間を計画します。

④低層部（1階～3階）には、市民利用機能（総合案内、市民協働スペース、情報提供・相談スペースなど）や店舗（飲食・物販・サービス施設等）を、アトリウムや水辺の憩い空間との関係性を考えながら配置します。

①みなとみらい線馬車道駅コンコースと直結し、駅から街への玄関口としての役割を担うアトリウムは、大きな吹き抜け空間とし、市民や来街者が気軽に集い、親しみ憩えるような「祝祭性・おもてなし」の場とするとともに、エスカレーターやエレベーターなどで駅からの動線を強化します。

⑤道路沿いには、壁面後退により、ゆとりある歩行者空間や広場を創出します。

⑥弁天橋方面から、アトリウムへ続く屋内通路を設置し、展示スペースを設けるなど開放的な空間を整備します。

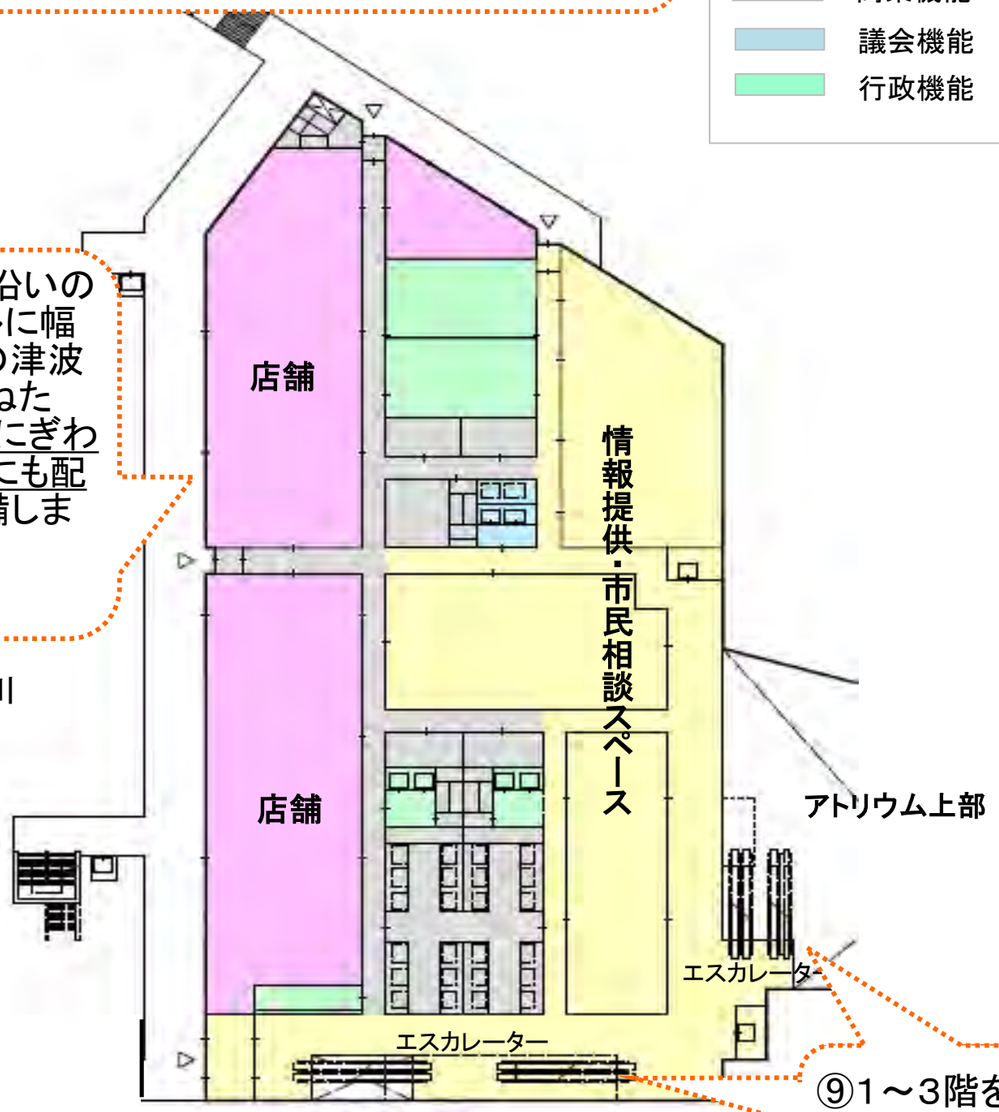
◆新市庁舎整備計画概要　　３　建物計画　【２～３階平面】

※図面は、発注要件を整理するために作成したイメージ図です。

⑦低層部は市民利用などを考慮して、余裕を持った空間構成とし、内装の木質化を効果的に行うなどグレード感を重視します。

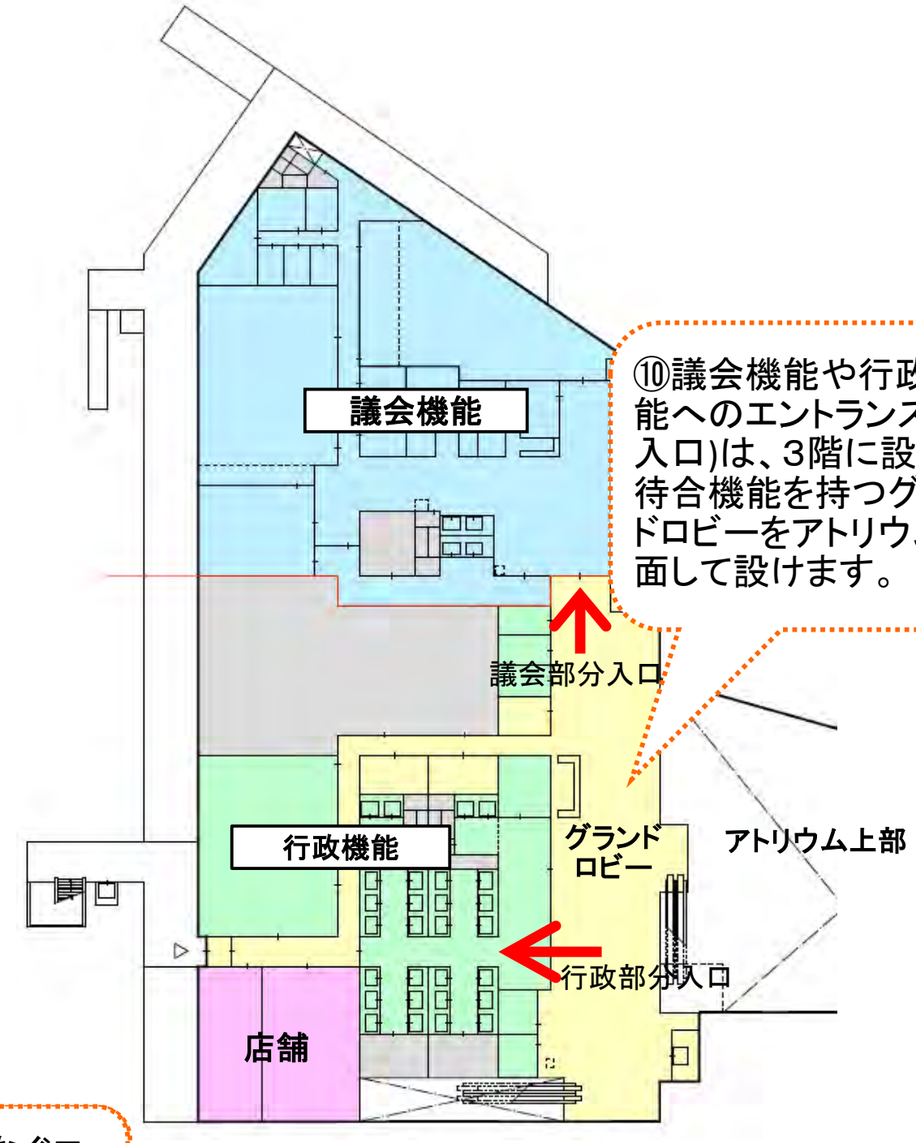
凡例
- 市民利用機能
- 商業機能
- 議会機能
- 行政機能

⑧大岡川沿いの2階レベルに幅員約6mの津波避難を兼ねたデッキを、にぎわいの創出にも配慮して整備します。



2階平面図

⑨1～3階をつなぐエスカレーターを設置します。



3階平面図

⑩議会機能や行政機能へのエントランス(出入口)は、3階に設け、待合機能を持つグランドロビーをアトリウムに面して設けます。

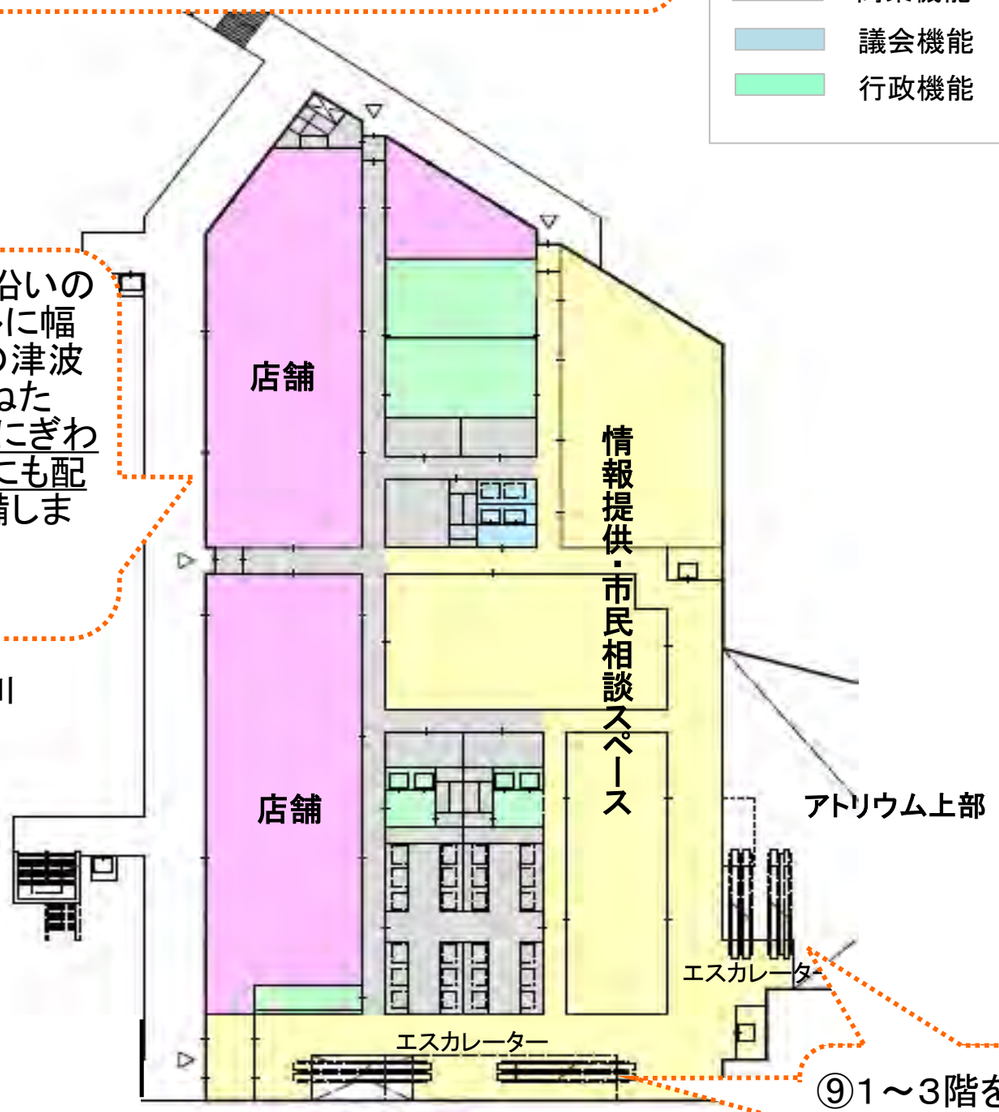
◆新市庁舎整備計画概要　　３　建物計画　【２～３階平面】

※図面は、発注要件を整理するために作成したイメージ図です。

⑦低層部は市民利用などを考慮して、余裕を持った空間構成とし、内装の木質化を効果的に行うなどグレード感を重視します。

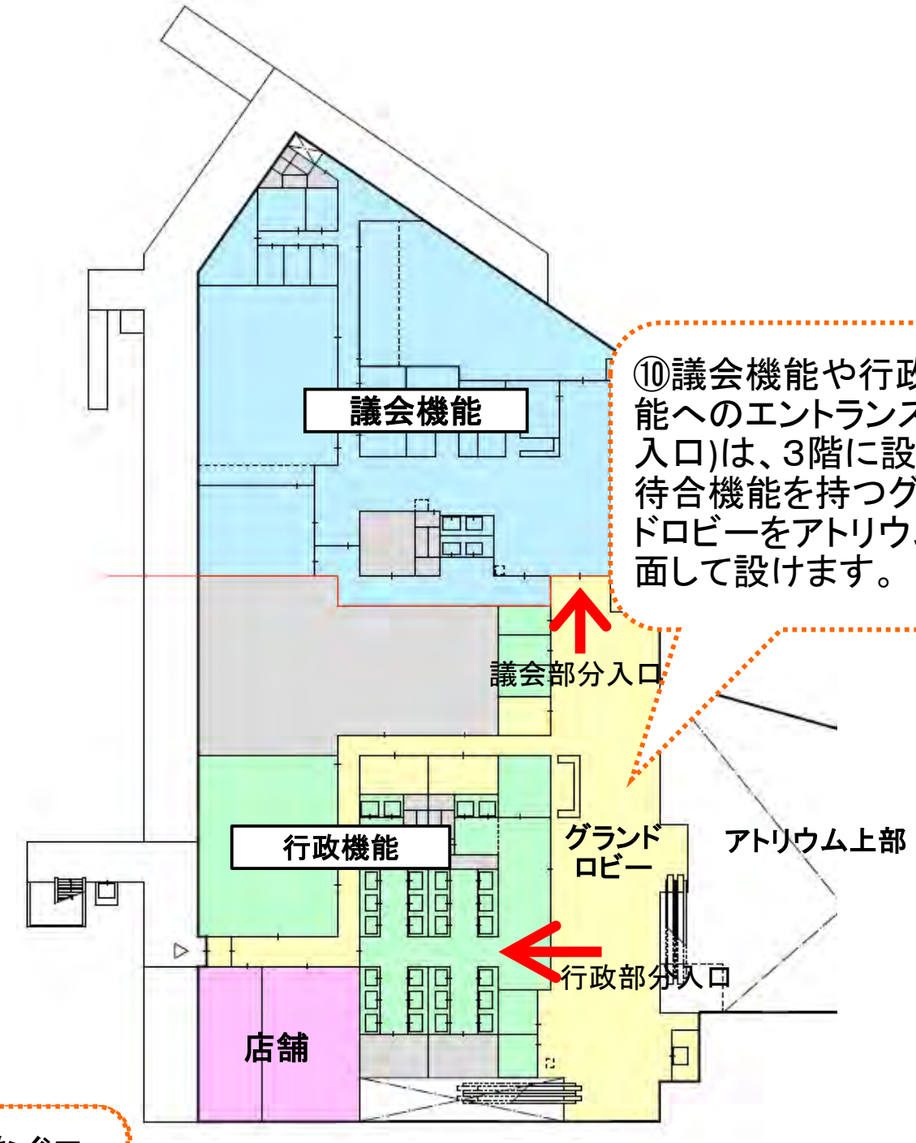
凡例
- 市民利用機能
- 商業機能
- 議会機能
- 行政機能

⑧大岡川沿いの2階レベルに幅員約6mの津波避難を兼ねたデッキを、にぎわいの創出にも配慮して整備します。



2階平面図

⑨1～3階をつなぐエスカレーターを設置します。



3階平面図

⑩議会機能や行政機能へのエントランス(出入口)は、3階に設け、待合機能を持つグランドロビーをアトリウムに面して設けます。

◆新市庁舎整備計画概要　　1　計画検討の視点

新市庁舎整備基本計画 （平成26. 3）

基本理念	整備基本方針
①的確な情報や行政サービスを提供し、豊かな市民力を活かす開かれた市庁舎	◆市民への情報提供・相談・案内機能等の充実 ◆市民協働・交流空間の整備 ◆開かれた議会の実現
②市民に永く愛され、国際都市横浜にふさわしい、ホスピタリティあふれる市庁舎	◆市民に親しまれ、来庁者が横浜らしさを感じる空間の整備 ◆周辺環境や都市景観との調和 ◆おもてなしの場の実現
③様々な危機に対処できる、危機管理の中心的役割を果たす市庁舎	◆大地震等が発生しても業務継続が可能な構造体や耐震性の確保 ◆災害対策本部機能の充実 ◆セキュリティの確保
④環境に最大限配慮した低炭素型の市庁舎	◆先進的な環境設備・機能導入によるエネルギーコストの削減と環境負荷の低減 ◆自然エネルギーや再生可能資源の有効活用と緑化推進
⑤財政負担の軽減や将来の変化への柔軟な対応を図り、長期間有効に使い続けられる市庁舎	◆長期間有効に使い続けられる市庁舎の実現 ◆将来の変化への柔軟な対応と効果的・効率的な業務遂行が可能な執務室

⇒ 建物として必要な項目を精査・検討

建物に求める内容検討

【 行政サービス・ 開かれた市庁舎】
- 低層部に情報や行政サービスを確実に提供する場を創出
- 多様化する課題に対して市民が積極的に参加し、交流を活性化する場
- 伝統ある横浜市会の雰囲気を大切にしつつセキュリティにも配慮し傍聴スペースの拡充等による開かれた議会

【 ホスピタリティ 】
- 市民が親しみを持ち、来訪者が横浜らしさを感じる施設
- まちのシンボルとなり、市民が誇れ、周辺環境や都市景観に調和した外観デザイン
- 賑わいを創出し、市民や来街者を迎え入れ自然に人が集う場

【 危機管理機能】
- 大地震に対する建物強度の確保、及び耐震性能の確保、免震、制振技術の採用、非構造部材や建築設備の耐震性能確保
- 災害対策本部としての役割を果たすべく、災害時のスペース確保や設備の整備による業務継続性の確保
- 行政情報、個人情報保護に配慮した施設

【 低炭素建築】
- エネルギーコストの削減と環境負荷を低減する、先進的な設備技術の採用
- 創エネルギーとして、太陽光発電等の採用
- 自然風・ 採光の取込み等、多様な環境配慮・ 省エネルギー技術の採用
- 緑化の推進、環境配慮材の利用等地球環境に対する配慮

【 長寿命建築・ 管理修繕コスト 】
- 建物の長寿命化に配慮した、設計、建材、構法の採用
- 将来の施設利用の変化に対応できる柔軟性の確保
- しゅん工後のCO_2排出量に配慮した運営・ 設備更新計画の検討
- 業務効率の向上が図れる快適で機能的な執務環境

⇒ 特に施設計画上、重要な項目を抽出

抽出した建物の計画項目

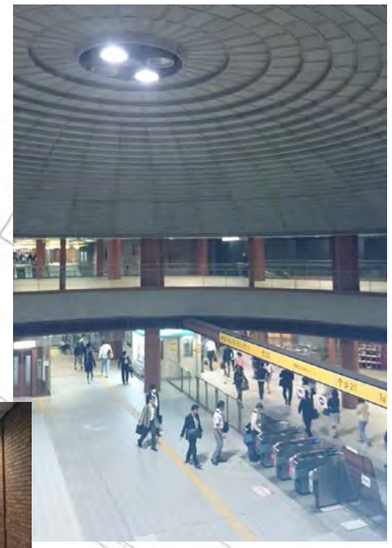
- 地上部の建物は、海側に張り出した低・中層部を持つ高層の建物と、開放的な屋根付き広場（アトリウム）で構成します。
- 二元代表制の象徴として議会機能の独立性を確保するため、シンボルである「議場」を低・中層部海側の最上部に配置します。
- みなとみらい線馬車道駅に直結するアトリウムは、大きな吹き抜け空間として市民や来街者の「祝祭性・おもてなし」の場とします。
- 低層部（1階～3階）には、市民利用機能や店舗を、アトリウムや水辺の憩い空間(大岡川沿い)との関係性を考えながら配置します。
- 議会機能や行政機能へのエントランス(出入口)は3階に設け、待合機能を持つグランドロビーをアトリウムに面して設けます。
- 主要な機械室は、津波による浸水の可能性を考慮して、4階以上に配置します。
- 議会機能は原則として3階及び5～8階に配置し、利用しやすい動線計画、ゆとりをもったスペースの確保、傍聴席の拡充・新設などに配慮します。
- 行政機能は8階以上に配置し、将来の組織改編などに柔軟に対応できるよう計画します。
- 大地震発生時においても事業継続が可能な高い耐震性能を確保します。
- 環境関係技術開発の動向等を見極め、環境未来都市にふさわしい庁舎とします。

◆新市庁舎整備計画概要　　3　建物計画　【１階平面】

②大岡川沿いには、水際線プロムナードの一環として、幅6mを基本とした水辺の憩い空間を整備します。

【水際線プロムナードイメージ】
写真：長崎水辺の森公園

【アトリウムにおけるイベント展開イメージ】
写真：ゲートシティ大崎



【みなとみらい線馬車道駅】

【馬車道駅市庁舎接続部コンコース】

1階平面図

※図面は、発注要件を整理するために作成したイメージ図です。

③大岡川沿いの水辺の憩い空間と屋根付き広場（アトリウム）をつなぐ回遊空間を計画します。

④低層部（1階～3階）には、市民利用機能（総合案内、市民協働スペース、情報提供・相談スペースなど）や店舗（飲食・物販・サービス施設等）を、アトリウムや水辺の憩い空間との関係性を考えながら配置します。

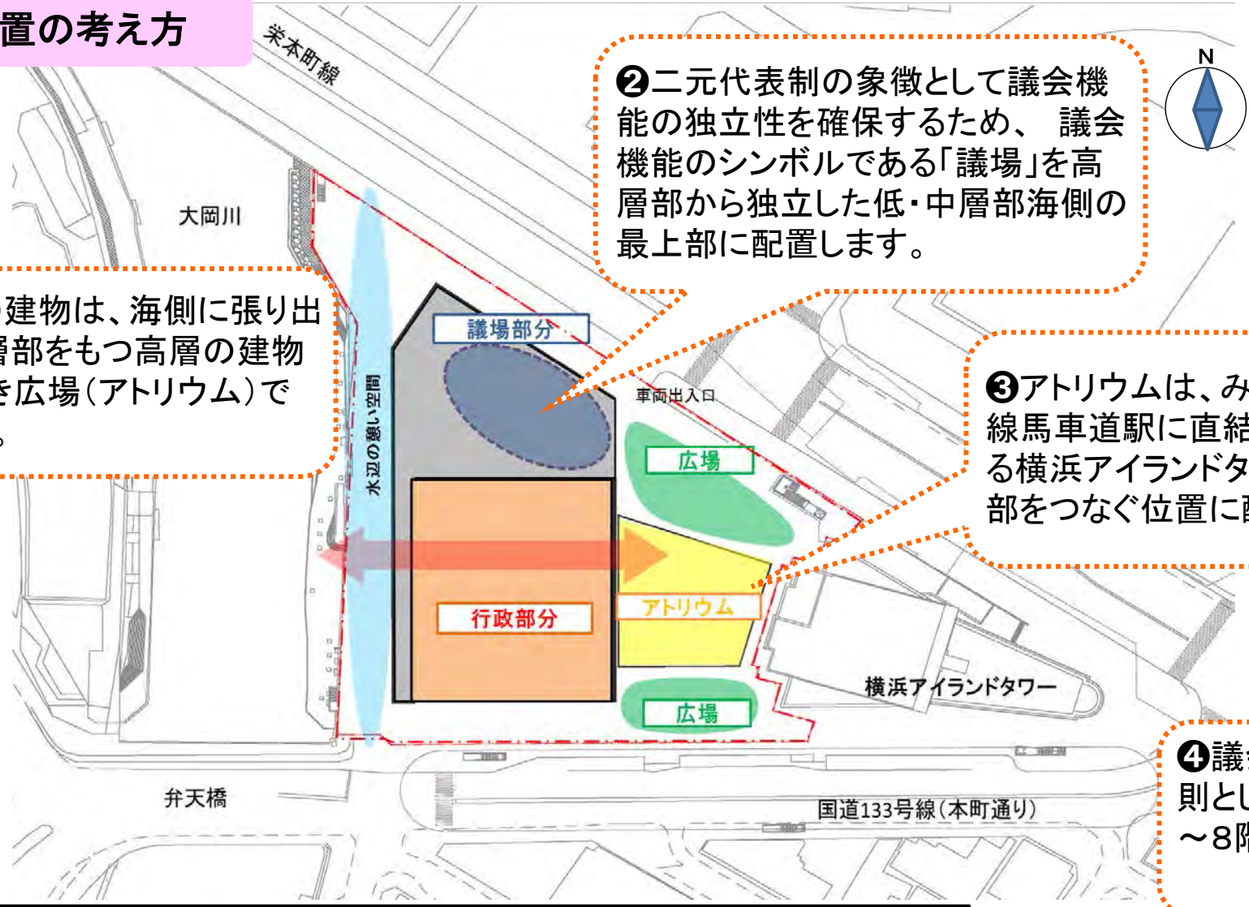
①みなとみらい線馬車道駅コンコースと直結し、駅から街への玄関口としての役割を担うアトリウムは、大きな吹き抜け空間とし、市民や来街者が気軽に集い、親しみ憩えるような「祝祭性・おもてなし」の場とするとともに、エスカレーターやエレベーターなどで駅からの動線を強化します。

⑤道路沿いには、壁面後退により、ゆとりある歩行者空間や広場を創出します。

⑥弁天橋方面から、アトリウムへ続く屋内通路を設置し、展示スペースを設けるなど開放的な空間を整備します。

※図面は、発注要件を整理するために作成したイメージ図です。

建物配置の考え方



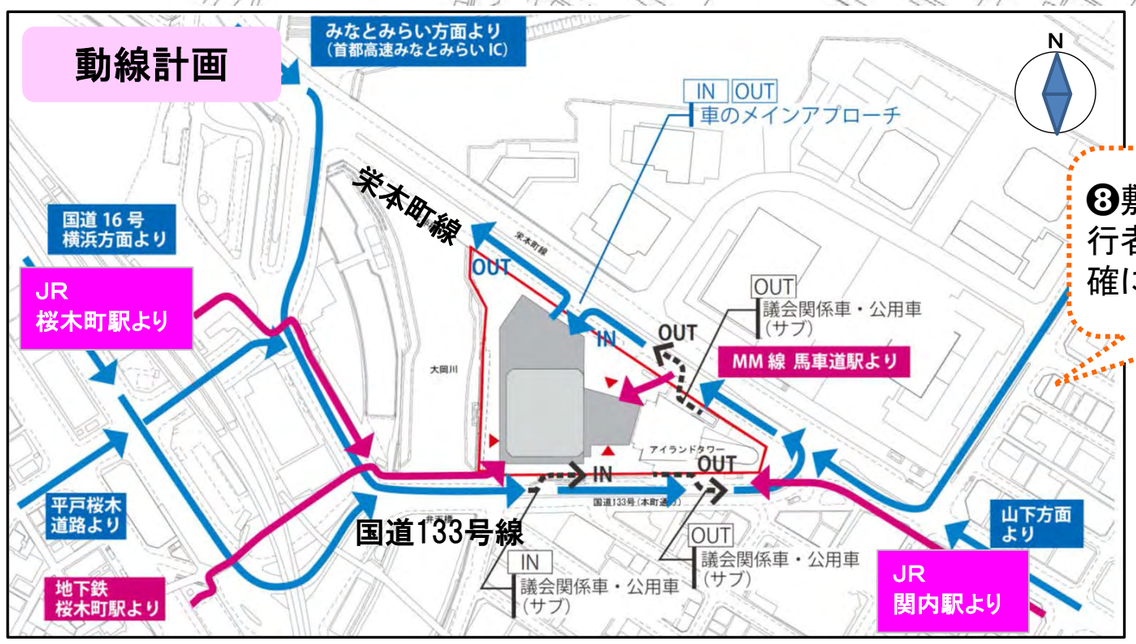
❶地上部の建物は、海側に張り出した低・中層部をもつ高層の建物と、屋根付き広場（アトリウム）で構成します。

❷二元代表制の象徴として議会機能の独立性を確保するため、 議会機能のシンボルである「議場」を高層部から独立した低・中層部海側の最上部に配置します。

❸アトリウムは、みなとみらい線馬車道駅に直結し、隣接する横浜アイランドタワーと高層部をつなぐ位置に配置します。

❹議会機能は、原則として3階及び5～8階に配置します。

動線計画

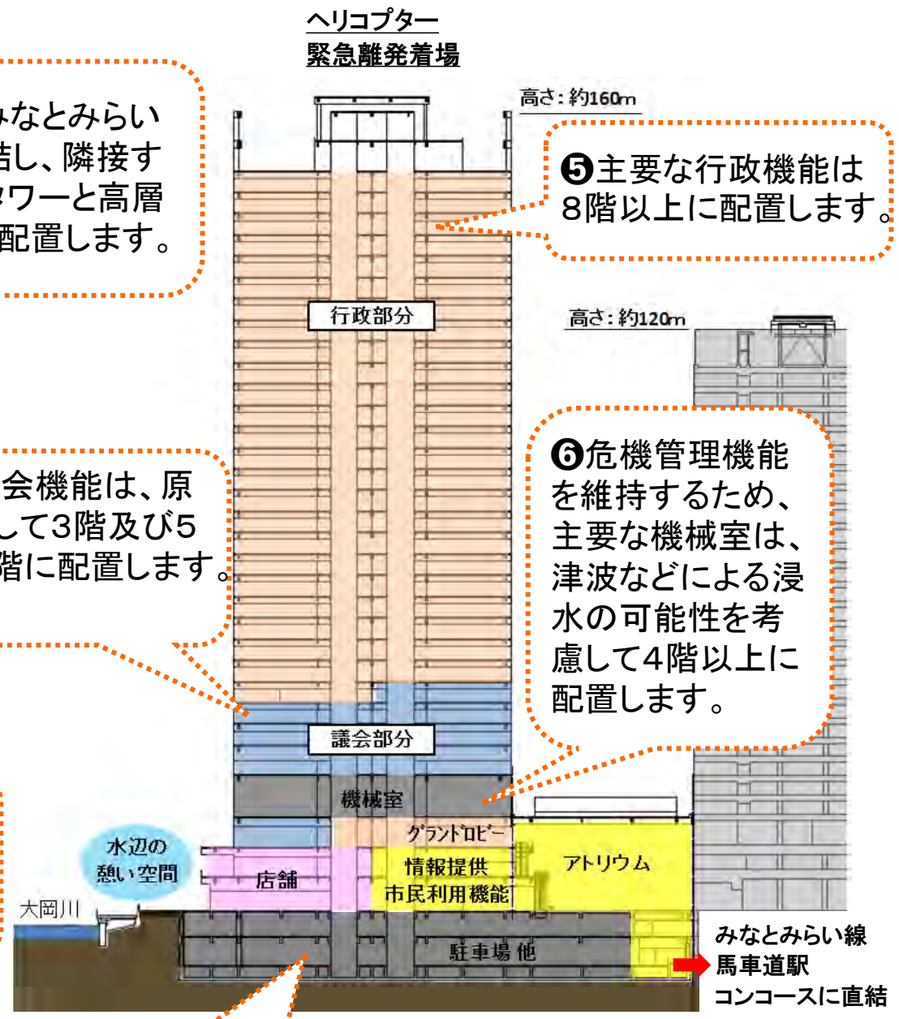


❽敷地内における歩行者及び車動線を明確に分離します。

周辺からの動線

← 歩行者動線

← 車動線



❺主要な行政機能は8階以上に配置します。

❻危機管理機能を維持するため、主要な機械室は、津波などによる浸水の可能性を考慮して4階以上に配置します。

❼地下1、2階には、約400台分の駐車場や駐輪場を設けます。

断面イメージ図

「まちなか広場とは、人の居場所。」みる、みられ、みせて、横につながる

全国まちなか広場研究会 理事、NPO法人GPネットワーク 理事
（株）ハイマート久留米　ひと・ネットワーククリエイター　山下　裕子

「虚はすべてを容れるが故に万能であり虚においてのみ運動が可能になる。」（「茶の本」より抜粋）という岡倉天心の言葉がある。「まちなか広場」とは、広い空間であり、それ自体は空っぽの「虚」である。そして、そこが人の居場所になれば「みる⇄みられる」の関係性がうまれ、「みせる」よろこびがうまれる場所となる。これが、「まちなか広場」の基幹的な機能であると筆者は考えている。「みる」とは、漢字で表記するだけでも「見る。観る。視る。診る。看る。」等があるように多様であり、それぞれに意味がある。「（人を）みる」ことは、人が「人間」として在るための根源であるところの「他者と自己」が居てはじめて成立する行為でもある。人間同士が「ある場所」で空間と時間を共有することは尊く、その共有という行為そのものが、人が生きていくうえの不可欠な要素であると考える。また、空間と時間の共有は、人々が「ある場所」に出向いてこそ成立する事象でもある。

先日、ある地方都市の駅で面白い体験をした。駅に到着しスマートフォンでSNS（Social Networking Service）をチェックしていたところ、自分がこれから乗る予定の電車に友人が乗っており、入れ違いで降りてくることを偶然知ったのである。すぐに我々は連絡を取り合い、ホームでわずか30秒であったが一年ぶりの再会を果たした。このようにSNSなどにより世界中どこからでもほぼリアルタイムで家族・友人・知人の近況を知ることができるようになった現代だが、各自が積極的に発信作業を続けるからこそ成立しており、その前提としてパソコンやタブレット・スマートフォン等の道具やネット環境等が整っている必要がある。しかし、まちなか広場とは、そうした前提となる道具やネット環境を必要とせずに空間と時間を共有できる場所であり、計画・整備・管理・運営の仕方次第によっては、多世代の市民にとって出かけていける都市のなかの「居場所」となりえる場所である。そのようなまちなか広場は、都市の交流拠点として必要不可欠だと考える。

筆者は、富山市まちなか賑わい広場（愛称グランドプラザ）を開業時から7年間見続けた知見から各都市の広場整備の相談に応じる活動を通じて、また2013年に立ち上げた「全国まちなか広場研究会」の活動を通して、単なる広い空間整備だけでは日常的に市民が憩える「人の居場所」には成り得ない現状を目の当たりにした。それでは、あと何が必要なのだろうか。この稿では、その「何か」を読み解いてみたい。

「まちなか広場」に出かけていける環境とは？　公共交通×公共広場

いま、私たちが想い描く日常的なにぎわいとはどのような場面だろうか。子どもたちが笑顔で遊び、それを眺めながら日向ぼっこをしている高齢者たちの姿が日常的に見受けられる光景もその一つではないだろうか。実は、日常的にまちなか広場に出かけ余暇を過ごせる市民の大多数は子ども・学生・高齢者らであり、交通弱者と呼ばれる自家用の交通手段がないため公共交通機関に頼らざるを得ない世代なのである。

そこで、「公共交通」という言葉のなかに「歩きたくなる動線の整備」や、「いつの間にかそれなりの距離を歩けてしまうリズムある景観の整備」を内包することを提案したい。そう考えたのは、筆者が富山市在住時に市役所が“歩いて暮らせるまちづくり“を目指していることを知り、勤務地が中心市街地に移るのを機に（マニュアル車を運転するほどの車好きだったのだが）車の所有を辞め、自ら公共交通の利用者となった経験のためである。この時の経験から駅・電停・バス停までの動線や景観、停留所の快適性、乗換時のスムーズ性、そして、時刻表を確認せずに停留所に向かう心境に成り得る運行間隔（20分以内に一本は運行）が、公共交通を快適に活用するためには不可欠であることを実感した。また、各々の拠点から拠点への移動は当然であるが歩行であることをあらためて体感したためである。

地方都市の中心市街地の多くは、公共交通の起点とな

るターミナル駅の近隣もしくは周辺であることが多いため子どもや学生をはじめとする車が自由に使えない人も、また足腰に少し不自由を感じるようになった高齢者もアクセスしやすいエリアである。そこに魅力ある空間としてまちなか広場が整備されれば、多世代の市民が目的をもたなくとも、買物をしなくとも公共交通を活用して「出かける」機会を自らもちやすくなるのではないだろうか。

様々な行き来によって、いきいきとした場所になる

人が出かけ滞在し憩うことで人の姿が定着し、まちなか広場が「人の居場所」になるようである。そこで、憩うための必須アイテムとして、次の５点を提案したい。①（拠り所となり安心感につながる）背もたれ付き椅子＆（均しい距離感を成立させる）正円テーブルの（見た目でここは人の居場所と認知させるため）15セット以上の配置、②（真夏に日陰をつくる）大型植栽やパラソル、③（寒気に日向ぼっこができる）陽射しの確保、④（安心して憩える風向きを踏まえたうえでの）都市軸線上での配置、⑤誰もが座っていて良い雰囲気。この５点を考察すると、人も動物であり人と自然が行き交う屋外空間のなかでまちなか広場をとらえるべきと再認識する。

また、気温差も重要であり同じ気温でも昨日にくらべて暖かくなったと感じられれば外出するが、寒くなったと感じられれば外出を控える。都市において自然の風を感じられる場所でもあるまちなか広場では、その日の天候や陽射し風の強さや前日との気温差を感じながら広場を見守り配置を考慮できる豊かな感性を持つスタッフの存在と、その感性を表現できる柔軟性に富んだ手順手法（マニュアル）も不可欠である。

振り返ってみるとグランドプラザ開業時の心得のひとつは、毎日毎日繰り返し椅子やテーブルの模様替えをすることであった。決まった型で整然と並べ続けるのではなく、そこで起こってほしい場面を想像しながら近づけたり遠ざけたり様々に配置し、配置後も観察し試し続け、数年をかけて幾重かの配置パターンを解明できたように思う。古来、日本の庭園や茶室は数年に渡ってその場所の太陽・月の動き、草木の成長や四季のうつろいを観察し手をかけ続けたと聞く。その結果、数百年後のいまも見事な時をすごせる人の居場所として愛され継承されているのであり、まちなか広場も同じようにとらえるべきではないだろうか。

また、まちなか広場を「人の居場所」にするためにも隣接する施設は、広場に何らかのアクティビティや活動のにじみを創出する業種業態を入居させることが望ましいと考える。そこで、家賃の支払能力だけで入居者を決めるのではなく、広場へのにじみ要素（開口部における視線透過性の高い外観、往来が発生する運営形態（テイクアウト商品有無等）、出店プログラム（手芸ショップであれば編物教室の広場開催）等）も入居者募集時の項目として挙げてはどうだろうか。また、開業時には、広場スタッフ自らが憩う人の姿を徹底して創出する姿勢も大事である。まちなか広場を居心地の良い雰囲気にするためにも、スタッフ自らお洒落をして憩おい広場を楽しんでほしい。森や草原に獣道がひらかれていくように、自らが佇むことで人が居る場面をつくり、アクティビティの種となり水をやり続けることも開業時の大切な運営業務として捉えられたらと思う。雪国である富山市民に限らず農耕民族である日本人にとって、他者からみられる場所であるオープンスペースで憩うことはかなり抵抗のある行為のようだ。しかし、都市として富山市が素晴らしく変わりはじめた15年をそこで暮らし、まちなか広場が「人の居場所」になっていくプロセスに関わって感じたことは「ヒトもマチも前向きにかわっていける」ということである。

望ましい出会いの機会とは

日々の出会いについて考えてみたい。私たちは幼少期から無意識のうちに、保育園・幼稚園・小学校・・・会社、PTA、自治会等の何らかの組織に所属し法や制度に守られている。一方、もし震災の避難時やＩターン移住後の就職活動の最中、無職での単身暮らしをはじめる等それらの所属から一時的に離脱してしまう事態に直面した場合は、どのような状況になるのだろうか。学校や会社といった通い先があれば新しい組織に所属するためすぐにその状況から免れることが可能であるが、就学前の子どもを育てる母親や無職と呼ばれる高齢者等が何らかの事態によって所属を持てない場合はどうであろうか。

避難時等には様々な団体が活発にボランティア活動等を実施されるが、その様な活動に自ら積極性をもって参加すること以外の解決策はないものだろうか。積極性を持つ筆者でさえそのような状況時に、縁も所縁もない初対面の人に「はじめまして」と自ら話しかけ行動を起こせるとは思えず、不安が先立つのが正直なところである。

ところが、その地域に暮らす市民にとってアクセスしやすい場所である中心市街地に、常に誰にでもひらかれた広場を整備しそこが居心地の良い「人の居場所」になればどうだろうか。筆者は、グランドプラザに開業時から７年間勤務しそのプロセスを目の当たりにしたのだが、

例え大きなイベントを開催しなくても多くの人が日常的に訪れるようになり、人と人とが出会い交流が育まれるのである。

グランドプラザでは、24時間年中無休で居心地が良いためか自ずと多種多様なアクティビティがうまれ育まれている（例えば、それは、出勤前のブレイクタイム、編み物・スケッチ、帰宅前の一服、待ち合わせ、酔いさまし、夜明け前の缶コーヒー、等々）。そして、地域の中心市街地が活性化すれば、このような小さな経済活動をはじめとする様々なアクティビティが活発となり朝昼晩の明快な線引きもなくなり入り混じる。

まちなか広場では、同じような時間帯に立ち寄り憩う人同士が知り合いになってたわいもない会話をはじめたり、感じよく飲み交わしたり、お互いの存在を認知しながらもただ眺め合っていたりと様々な関係性がうまれ育まれる。そして、世間には、おしゃべりをするのが好きな人もいれば面倒な人もいて、さらにはその時の気分もあるが、まちなか広場とは誰でもがその時の気分や状況に応じて居心地良く憩えるような場所であって欲しいと願っている。

ネットワーク型のサードプレイスが育まれる「まちなか広場」

サードプレイスとは、「創造的な交流がうまれるアンカーとなる場所」（The Great Good Place “Ray Oldenburg 1989より抜粋）とある。まちなか広場は、「場所」としてもサードプレイスに成り得るが、地域の自治を機能させてきた人と人とが横につながることで育まれるネットワーク型のサードプレイスを育む場所でもあるように思う。

グランドプラザの立地は、都市軸上（JR富山駅⇄市役所⇄神社）であり、尚且つ中心市街地で駐車台数が最も多く広く停め易くしかも一番安価な駐車場と、まち一番の目的地である市内唯一の百貨店の間である。大きさは、幅21 m×奥行き65 m×高さ19 m。人が何か出来事を起こしたくなる空間の最小サイズであり、一人でもくつろぎ憩うことのできる最大サイズではないかと感じている。また、約1,400㎡の広場に面して、アクティビティがにじむ業態である茶処5店舗と食事処1店舗があるのも特徴である。さらに、2009年12月には市内環状線LRTセントラムが開業し「グランドプラザ前駅」徒歩10秒という公共交通での好アクセスまで整備された。また、富山市は、田舎過ぎず大都会過ぎず顔馴染みと時々すれ違える密度感である約42万人（合併前約30万人）の中核都市であるという人口サイズも好適であったように思う。

そのような富山市の中心市街地に、大きな余白空間であるまちなか広場を誕生させたことで市民共有のリビングルームとしても活用されている。自分の日常を広い空間である広場で過ごす市民が増えたことで心と時間にゆとりを持てるようになり、個々の視野やネットワークが広がったように感じる。また、広場そのものがイベントの開催地となるのみならず、中心市街地内の他の場所で開催されるイベントのPR活動拠点にもなり様々な活用がなされることで主催者同士・参加者同士・主催者と参加者等の「横のつながり」もうまれている。例えば2010年、2014年とサッカーワールドカップのパブリックビューイングが広場で開催され両年とも約2,000人を集客した。開催には数百万円の予算が必要と聞くが、この予算を2010年は一社での確保が可能であったが、2014年は一社での確保が厳しい状況であった。しかし、「あの感動を再び！」と願う様々な立場の人々（テレビ局・スポーツ用品店・日本代表ファンのバー店主等）が各々、広場の運営事務所を訪ねて来られ、横のつながりの接点として事務所が存在したことで開催を熱望する声が結果として集積したのだ。そこで広場スタッフは、すこしお節介をして事務所を提供し熱望する関係者が一同に会する作戦会議の場を設定した。そのような経緯を経てイベントが成就したのだが、当日は、関係者同士のつながりの深さや開催までの語り尽くせない物語のためか鳥肌が立つほどの一体感と熱狂のなか開催され、無事に閉幕した。

人との縁やつながり、個々の特技や好み、そして自慢のコレクション等の情報は、引継ぎ書面には現れないのが現状である。しかし、地域の真ん中に整備され、そこに暮らす市民同士が「みる⇄みられる」関係となり、ひとに「みせる」よろこび（ハレ）の場となったまちなか広場では、「○○が好き」という同じ気持ちによって集まり横につながってイベント（祭り）を開催している事例が多く見受けられる。そして、「好き」という気持ちでの集まりだからこそ継続され恒例となり、開催後の打ち上げは単なる宴ではなく反省会であり次への作戦会議となり、未来への思考の呼び水となる。グランドプラザのホームページ（grandplaza.jp）をご覧いただければ一目瞭然だが、今年度もすでに相当先までの予約が多数掲載されている。

どうやら「横のつながり」をうみ育む、ささやかであるが大切な情報は生身の人間に蓄積されるようである。地域の大切な基盤である「横のつながり」をうみ育て伝承するための場所としても、まちなか広場の運営は重要なのではないだろうか。

オリジナル条例のススメ

「富山市まちなか賑わい広場条例」の存在も秀逸である。富山市役所は、再開発事業の敷地内にあった市道三本を集約し道路指定を解除し、その空間のために条例を制定しているのだが、内容は、地域に暮らす「みんなの居場所」となるようあえてほとんど何も禁止事項の無いものとなっている。この条例が土台、後ろ盾となって市民自らが自由に活発に活用しながら共通の作法を育める環境を整え、運営そのものを実験と捉え開業を迎えたのである。

逆に、禁止事項がほとんどないため取り締りもできず、「不祥事が起きるのでは？」と尋ねられるが、市民の暮らしに馴染むまでは色々なトラブルも起き、現在でもそれなりに多少の出来事はあるが中心市街地に立地している以上それはある程度当然であると考えている。

それでも奇跡的に約７年半の間、割と安全に運営を続けることができているのは、まちなか広場に人が居て人の目がある状況を維持することで、様々な事象が時間をかけ人の目によって自然淘汰されているためではないかと考えている。年間 100 件以上のイベントの開催で多種多様なアクティビティが数年の時を経て地域の文化に寄り添い受入れられはじめ、ますます「みんなの居場所」として愛され大切にされているように思うのである。

全国まちなか広場研究会の発足

富山市が国の中心市街地活性化基本計画の第一号認定を受けた年でもある 2007 年から視察依頼は年間数百件を越え、ここ数年は広場そのものを目的とする視察も増加し、「まちなか広場」への関心が高まりつつあることを実感していた。一方で、広場に関する文献や運営手法等の情報の少なさに驚いてもいた。そこで志を同じくする仲間とともに「全国まちなか広場研究会」（machinakahiroba.com）を立ち上げ、第１回研究会を 2013 年９月に富山市で、昨年９月には第２回研究会が長岡市役所併設の広場であるアオーレ長岡で開催した。本研究会の目的は、『まちなか広場の価値に関する研究を行い、広場の整備と管理運営の望ましいあり方が普遍化されることに寄与することを目的とし、「公共広場」×「公共交通」の連携による価値の創造が都市における基幹事業と位置付けられることを目指し』ている（設立趣旨書抜粋）。参加者は、都市計画、行政学、建築、交通、マーケティング等多様な専門性を有し、その立場は研究者、行政職員、コンサルタント、学生、市民であり、まちなか広場に新たな可能性を感じている者同士のしなやかな寄り合いの場となっている。

研究会自身もお互いを大らかに包み込む広場的な在り方を目指しており、まだまだ実験段階であるのが実情である。初年度は全国の広場事例発表をメインとし、昨年度は分科会を設けテーマ毎にグループ討議を試みた。分科会は結論を求めるものではなく参加者が各々の立場や事業状況を背景に、法や制度、憩い施設でありながら集客施設でもある故の課題、広場に配置される椅子のデザインや運用の在り方にいたるまで生々しい意見を出し合いながらもお互いの立場を尊重し、さらなる展開を視野に見据える仲間づくりの場であったように感じている。

そして、まちなか広場への探究心はふくらむばかりで、すでに今年度の方向性を探りはじめている（第３回は 2015 年 11 月６日姫路市にて開催）。こうした異なる分野同士の横のつながりや、形式を定めない自由で活発な議論や発表の場が、我が国の「まちなか広場」の新しい在り方の模索を推進し、リアルないきいきとしたプラットフォーム形成につながることを願っている。

おわりに

先日、ある地方都市でその地域に暮らす若者 15 名と約４km の道のりを歩くまちなか散歩を実施した。終了後の参加者の感想の多くは、日々の日常では用事のあるポイントだけを車で行き来するもしくは自転車で巡るため中心市街地をこれほど歩いたのは初めてというものであった。我々人間の動体視力は自らの足で移動する歩行速度に適したものであり、歩行より速い速度ではみえなくなるものが増える。自分の足で楽しみながらゆっくり歩く散歩を通して、知っていたつもりのまちなかにたくさんの出会いや新鮮な発見が多数あったようだ。

京都には「哲学の道」と呼ばれる道がある。歩くことでリズムがうまれ、脳にも身体にも運動がはじまり新陳代謝や思考が活発になるのだと思う。また、出かけることによって人や出来事、四季のうつろいと出会い、それらは様々な発見をもたらす。日々の食事にも季節の彩を添える我々日本人の感性を今一度取り戻すためにも、歩くことは不可欠なのではないだろうか。そして、歩くことの中心に「まちなか広場」が存在することで、活発になった思考や新たな出会いから多種多様な人同士がつながり、お互いを巻き込みリレーショナルな営みが発動され、さらに磨かれた自己の感性によっていま必要とされるイノベーションが力強く起こっていくことを願っている。

（やました　ゆうこ）

オリジナル条例のススメ

「富山市まちなか賑わい広場条例」の存在も秀逸である。富山市役所は、再開発事業の敷地内にあった市道三本を集約し道路指定を解除し、その空間のために条例を制定しているのだが、内容は、地域に暮らす「みんなの居場所」となるようあえてほとんど何も禁止事項の無いものとなっている。この条例が土台、後ろ盾となって市民自らが自由に活発に活用しながら共通の作法を育める環境を整え、運営そのものを実験と捉え開業を迎えたのである。

逆に、禁止事項がほとんどないため取り締りもできず、「不祥事が起きるのでは？」と尋ねられるが、市民の暮らしに馴染むまでは色々なトラブルも起き、現在でもそれなりに多少の出来事はあるが中心市街地に立地している以上それはある程度当然であると考えている。

それでも奇跡的に約７年半の間、割と安全に運営を続けることができているのは、まちなか広場に人が居て人の目がある状況を維持することで、様々な事象が時間をかけ人の目によって自然淘汰されているためではないかと考えている。年間 100 件以上のイベントの開催で多種多様なアクティビティが数年の時を経て地域の文化に寄り添い受入れられはじめ、ますます「みんなの居場所」として愛され大切にされているように思うのである。

全国まちなか広場研究会の発足

富山市が国の中心市街地活性化基本計画の第一号認定を受けた年でもある 2007 年から視察依頼は年間数百件を越え、ここ数年は広場そのものを目的とする視察も増加し、「まちなか広場」への関心が高まりつつあることを実感していた。一方で、広場に関する文献や運営手法等の情報の少なさに驚いてもいた。そこで志を同じくする仲間とともに「全国まちなか広場研究会」（machinakahiroba.com）を立ち上げ、第１回研究会を 2013 年９月に富山市で、昨年９月には第２回研究会が長岡市役所併設の広場であるアオーレ長岡で開催した。本研究会の目的は、『まちなか広場の価値に関する研究を行い、広場の整備と管理運営の望ましいあり方が普遍化されることに寄与することを目的とし、「公共広場」×「公共交通」の連携による価値の創造が都市における基幹事業と位置付けられることを目指し』ている（設立趣旨書抜粋）。参加者は、都市計画、行政学、建築、交通、マーケティング等多様な専門性を有し、その立場は研究者、行政職員、コンサルタント、学生、市民であり、まちなか広場に新たな可能性を感じている者同士のしなやかな寄り合いの場となっている。

研究会自身もお互いを大らかに包み込む広場的な在り方を目指しており、まだまだ実験段階であるのが実情である。初年度は全国の広場事例発表をメインとし、昨年度は分科会を設けテーマ毎にグループ討議を試みた。分科会は結論を求めるものではなく参加者が各々の立場や事業状況を背景に、法や制度、憩い施設でありながら集客施設でもある故の課題、広場に配置される椅子のデザインや運用の在り方にいたるまで生々しい意見を出し合いながらもお互いの立場を尊重し、さらなる展開を視野に見据える仲間づくりの場であったように感じている。

そして、まちなか広場への探究心はふくらむばかりで、すでに今年度の方向性を探りはじめている（第３回は 2015 年 11 月６日姫路市にて開催）。こうした異なる分野同士の横のつながりや、形式を定めない自由で活発な議論や発表の場が、我が国の「まちなか広場」の新しい在り方の模索を推進し、リアルないきいきとしたプラットフォーム形成につながることを願っている。

おわりに

先日、ある地方都市でその地域に暮らす若者 15 名と約４km の道のりを歩くまちなか散歩を実施した。終了後の参加者の感想の多くは、日々の日常では用事のあるポイントだけを車で行き来するもしくは自転車で巡るため中心市街地をこれほど歩いたのは初めてというものであった。我々人間の動体視力は自らの足で移動する歩行速度に適したものであり、歩行より速い速度ではみえなくなるものが増える。自分の足で楽しみながらゆっくり歩く散歩を通して、知っていたつもりのまちなかにたくさんの出会いや新鮮な発見が多数あったようだ。

京都には「哲学の道」と呼ばれる道がある。歩くことでリズムがうまれ、脳にも身体にも運動がはじまり新陳代謝や思考が活発になるのだと思う。また、出かけることによって人や出来事、四季のうつろいと出会い、それらは様々な発見をもたらす。日々の食事にも季節の彩を添える我々日本人の感性を今一度取り戻すためにも、歩くことは不可欠なのではないだろうか。そして、歩くことの中心に「まちなか広場」が存在することで、活発になった思考や新たな出会いから多種多様な人同士がつながり、お互いを巻き込みリレーショナルな営みが発動され、さらに磨かれた自己の感性によっていま必要とされるイノベーションが力強く起こっていくことを願っている。

（やました　ゆうこ）

「まちなか広場とは、人の居場所。」みる、みられ、みせて、横につながる

全国まちなか広場研究会 理事、NPO法人GPネットワーク 理事
（株）ハイマート久留米　ひと・ネットワーククリエイター　山下　裕子

「虚はすべてを容れるが故に万能であり虚においてのみ運動が可能になる。」（「茶の本」より抜粋）という岡倉天心の言葉がある。「まちなか広場」とは、広い空間であり、それ自体は空っぽの「虚」である。そして、そこが人の居場所になれば「みる⇄みられる」の関係性がうまれ、「みせる」よろこびがうまれる場所となる。これが、「まちなか広場」の基幹的な機能であると筆者は考えている。「みる」とは、漢字で表記するだけでも「見る。観る。視る。診る。看る。」等があるように多様であり、それぞれに意味がある。「（人を）みる」ことは、人が「人間」として在るための根源であるところの「他者と自己」が居てはじめて成立する行為でもある。人間同士が「ある場所」で空間と時間を共有することは尊く、その共有という行為そのものが、人が生きていくうえの不可欠な要素であると考える。また、空間と時間の共有は、人々が「ある場所」に出向いてこそ成立する事象でもある。

先日、ある地方都市の駅で面白い体験をした。駅に到着しスマートフォンでSNS（Social Networking Service）をチェックしていたところ、自分がこれから乗る予定の電車に友人が乗っており、入れ違いで降りてくることを偶然知ったのである。すぐに我々は連絡を取り合い、ホームでわずか30秒であったが一年ぶりの再会を果たした。このようにSNSなどにより世界中どこからでもほぼリアルタイムで家族・友人・知人の近況を知ることができるようになった現代だが、各自が積極的に発信作業を続けるからこそ成立しており、その前提としてパソコンやタブレット・スマートフォン等の道具やネット環境等が整っている必要がある。しかし、まちなか広場とは、そうした前提となる道具やネット環境を必要とせずに空間と時間を共有できる場所であり、計画・整備・管理・運営の仕方次第によっては、多世代の市民にとって出かけていける都市のなかの「居場所」となりえる場所である。そのようなまちなか広場は、都市の交流拠点として必要不可欠だと考える。

筆者は、富山市まちなか賑わい広場（愛称グランドプラザ）を開業時から7年間見続けた知見から各都市の広場整備の相談に応じる活動を通じて、また2013年に立ち上げた「全国まちなか広場研究会」の活動を通して、単なる広い空間整備だけでは日常的に市民が憩える「人の居場所」には成り得ない現状を目の当たりにした。それでは、あと何が必要なのだろうか。この稿では、その「何か」を読み解いてみたい。

「まちなか広場」に出かけていける環境とは？　公共交通×公共広場

いま、私たちが想い描く日常的なにぎわいとはどのような場面だろうか。子どもたちが笑顔で遊び、それを眺めながら日向ぼっこをしている高齢者たちの姿が日常的に見受けられる光景もその一つではないだろうか。実は、日常的にまちなか広場に出かけ余暇を過ごせる市民の大多数は子ども・学生・高齢者らであり、交通弱者と呼ばれる自家用の交通手段がないため公共交通機関に頼らざるを得ない世代なのである。

そこで、「公共交通」という言葉のなかに「歩きたくなる動線の整備」や、「いつの間にかそれなりの距離を歩けてしまうリズムある景観の整備」を内包することを提案したい。そう考えたのは、筆者が富山市在住時に市役所が“歩いて暮らせるまちづくり“を目指していることを知り、勤務地が中心市街地に移るのを機に（マニュアル車を運転するほどの車好きだったのだが）車の所有を辞め、自ら公共交通の利用者となった経験のためである。この時の経験から駅・電停・バス停までの動線や景観、停留所の快適性、乗換時のスムーズ性、そして、時刻表を確認せずに停留所に向かう心境に成り得る運行間隔（20分以内に一本は運行）が、公共交通を快適に活用するためには不可欠であることを実感した。また、各々の拠点から拠点への移動は当然であるが歩行であることをあらためて体感したためである。

地方都市の中心市街地の多くは、公共交通の起点とな

例え大きなイベントを開催しなくても多くの人が日常的に訪れるようになり、人と人とが出会い交流が育まれるのである。

グランドプラザでは、24時間年中無休で居心地が良いためか自ずと多種多様なアクティビティがうまれ育まれている（例えば、それは、出勤前のブレイクタイム、編み物・スケッチ、帰宅前の一服、待ち合わせ、酔いさまし、夜明け前の缶コーヒー、等々）。そして、地域の中心市街地が活性化すれば、このような小さな経済活動をはじめとする様々なアクティビティが活発となり朝昼晩の明快な線引きもなくなり入り混じる。

まちなか広場では、同じような時間帯に立ち寄り憩う人同士が知り合いになってたわいもない会話をはじめたり、感じよく飲み交わしたり、お互いの存在を認知しながらもただ眺め合っていたりと様々な関係性がうまれ育まれる。そして、世間には、おしゃべりをするのが好きな人もいれば面倒な人もいて、さらにはその時の気分もあるが、まちなか広場とは誰でもがその時の気分や状況に応じて居心地良く憩えるような場所であって欲しいと願っている。

ネットワーク型のサードプレイスが育まれる「まちなか広場」

サードプレイスとは、「創造的な交流がうまれるアンカーとなる場所」（The Great Good Place “Ray Oldenburg 1989より抜粋）とある。まちなか広場は、「場所」としてもサードプレイスに成り得るが、地域の自治を機能させてきた人と人とが横につながることで育まれるネットワーク型のサードプレイスを育む場所でもあるように思う。

グランドプラザの立地は、都市軸上（JR富山駅⇄市役所⇄神社）であり、尚且つ中心市街地で駐車台数が最も多く広く停め易くしかも一番安価な駐車場と、まち一番の目的地である市内唯一の百貨店の間である。大きさは、幅21 m×奥行き65 m×高さ19 m。人が何か出来事を起こしたくなる空間の最小サイズであり、一人でもくつろぎ憩うことのできる最大サイズではないかと感じている。また、約1,400㎡の広場に面して、アクティビティがにじむ業態である茶処5店舗と食事処1店舗があるのも特徴である。さらに、2009年12月には市内環状線LRTセントラムが開業し「グランドプラザ前駅」徒歩10秒という公共交通での好アクセスまで整備された。また、富山市は、田舎過ぎず大都会過ぎず顔馴染みと時々すれ違える密度感である約42万人（合併前約30万人）の中核都市であるという人口サイズも好適であったように思う。

そのような富山市の中心市街地に、大きな余白空間であるまちなか広場を誕生させたことで市民共有のリビングルームとしても活用されている。自分の日常を広い空間である広場で過ごす市民が増えたことで心と時間にゆとりを持てるようになり、個々の視野やネットワークが広がったように感じる。また、広場そのものがイベントの開催地となるのみならず、中心市街地内の他の場所で開催されるイベントのPR活動拠点にもなり様々な活用がなされることで主催者同士・参加者同士・主催者と参加者等の「横のつながり」もうまれている。例えば2010年、2014年とサッカーワールドカップのパブリックビューイングが広場で開催され両年とも約2,000人を集客した。開催には数百万円の予算が必要と聞くが、この予算を2010年は一社での確保が可能であったが、2014年は一社での確保が厳しい状況であった。しかし、「あの感動を再び！」と願う様々な立場の人々（テレビ局・スポーツ用品店・日本代表ファンのバー店主等）が各々、広場の運営事務所を訪ねて来られ、横のつながりの接点として事務所が存在したことで開催を熱望する声が結果として集積したのだ。そこで広場スタッフは、すこしお節介をして事務所を提供し熱望する関係者が一同に会する作戦会議の場を設定した。そのような経緯を経てイベントが成就したのだが、当日は、関係者同士のつながりの深さや開催までの語り尽くせない物語のためか鳥肌が立つほどの一体感と熱狂のなか開催され、無事に閉幕した。

人との縁やつながり、個々の特技や好み、そして自慢のコレクション等の情報は、引継ぎ書面には現れないのが現状である。しかし、地域の真ん中に整備され、そこに暮らす市民同士が「みる⇄みられる」関係となり、ひとに「みせる」よろこび（ハレ）の場となったまちなか広場では、「○○が好き」という同じ気持ちによって集まり横につながってイベント（祭り）を開催している事例が多く見受けられる。そして、「好き」という気持ちでの集まりだからこそ継続され恒例となり、開催後の打ち上げは単なる宴ではなく反省会であり次への作戦会議となり、未来への思考の呼び水となる。グランドプラザのホームページ（grandplaza.jp）をご覧いただければ一目瞭然だが、今年度もすでに相当先までの予約が多数掲載されている。

どうやら「横のつながり」をうみ育む、ささやかであるが大切な情報は生身の人間に蓄積されるようである。地域の大切な基盤である「横のつながり」をうみ育て伝承するための場所としても、まちなか広場の運営は重要なのではないだろうか。

るターミナル駅の近隣もしくは周辺であることが多いため子どもや学生をはじめとする車が自由に使えない人も、また足腰に少し不自由を感じるようになった高齢者もアクセスしやすいエリアである。そこに魅力ある空間としてまちなか広場が整備されれば、多世代の市民が目的をもたなくとも、買物をしなくとも公共交通を活用して「出かける」機会を自らもちやすくなるのではないだろうか。

様々な行き来によって、いきいきとした場所になる

人が出かけ滞在し憩うことで人の姿が定着し、まちなか広場が「人の居場所」になるようである。そこで、憩うための必須アイテムとして、次の５点を提案したい。①（拠り所となり安心感につながる）背もたれ付き椅子＆（均しい距離感を成立させる）正円テーブルの（見た目でここは人の居場所と認知させるため）15セット以上の配置、②（真夏に日陰をつくる）大型植栽やパラソル、③（寒気に日向ぼっこができる）陽射しの確保、④（安心して憩える風向きを踏まえたうえでの）都市軸線上での配置、⑤誰もが座っていて良い雰囲気。この５点を考察すると、人も動物であり人と自然が行き交う屋外空間のなかでまちなか広場をとらえるべきと再認識する。

また、気温差も重要であり同じ気温でも昨日にくらべて暖かくなったと感じられれば外出するが、寒くなったと感じられれば外出を控える。都市において自然の風を感じられる場所でもあるまちなか広場では、その日の天候や陽射し風の強さや前日との気温差を感じながら広場を見守り配置を考慮できる豊かな感性を持つスタッフの存在と、その感性を表現できる柔軟性に富んだ手順手法（マニュアル）も不可欠である。

振り返ってみるとグランドプラザ開業時の心得のひとつは、毎日毎日繰り返し椅子やテーブルの模様替えをすることであった。決まった型で整然と並べ続けるのではなく、そこで起こってほしい場面を想像しながら近づけたり遠ざけたり様々に配置し、配置後も観察し試し続け、数年をかけて幾重かの配置パターンを解明できたように思う。古来、日本の庭園や茶室は数年に渡ってその場所の太陽・月の動き、草木の成長や四季のうつろいを観察し手をかけ続けたと聞く。その結果、数百年後のいまも見事な時をすごせる人の居場所として愛され継承されているのであり、まちなか広場も同じようにとらえるべきではないだろうか。

また、まちなか広場を「人の居場所」にするためにも隣接する施設は、広場に何らかのアクティビティや活動のにじみを創出する業種業態を入居させることが望ましいと考える。そこで、家賃の支払能力だけで入居者を決めるのではなく、広場へのにじみ要素（開口部における視線透過性の高い外観、往来が発生する運営形態（テイクアウト商品有無等）、出店プログラム（手芸ショップであれば編物教室の広場開催）等）も入居者募集時の項目として挙げてはどうだろうか。また、開業時には、広場スタッフ自らが憩う人の姿を徹底して創出する姿勢も大事である。まちなか広場を居心地の良い雰囲気にするためにも、スタッフ自らお洒落をして憩おい広場を楽しんでほしい。森や草原に獣道がひらかれていくように、自らが佇むことで人が居る場面をつくり、アクティビティの種となり水をやり続けることも開業時の大切な運営業務として捉えられたらと思う。雪国である富山市民に限らず農耕民族である日本人にとって、他者からみられる場所であるオープンスペースで憩うことはかなり抵抗のある行為のようだ。しかし、都市として富山市が素晴らしく変わりはじめた15年をそこで暮らし、まちなか広場が「人の居場所」になっていくプロセスに関わって感じたことは「ヒトもマチも前向きにかわっていける」ということである。

望ましい出会いの機会とは

日々の出会いについて考えてみたい。私たちは幼少期から無意識のうちに、保育園・幼稚園・小学校・・・会社、PTA、自治会等の何らかの組織に所属し法や制度に守られている。一方、もし震災の避難時やＩターン移住後の就職活動の最中、無職での単身暮らしをはじめる等それらの所属から一時的に離脱してしまう事態に直面した場合は、どのような状況になるのだろうか。学校や会社といった通い先があれば新しい組織に所属するためすぐにその状況から免れることが可能であるが、就学前の子どもを育てる母親や無職と呼ばれる高齢者等が何らかの事態によって所属を持てない場合はどうであろうか。

避難時等には様々な団体が活発にボランティア活動等を実施されるが、その様な活動に自ら積極性をもって参加すること以外の解決策はないものだろうか。積極性を持つ筆者でさえそのような状況時に、縁も所縁もない初対面の人に「はじめまして」と自ら話しかけ行動を起こせるとは思えず、不安が先立つのが正直なところである。

ところが、その地域に暮らす市民にとってアクセスしやすい場所である中心市街地に、常に誰にでもひらかれた広場を整備しそこが居心地の良い「人の居場所」になればどうだろうか。筆者は、グランドプラザに開業時から７年間勤務しそのプロセスを目の当たりにしたのだが、

にぎわいの場 富山グランドプラザ

山下裕子 著

稼働率100%の公共空間のつくり方

学芸出版社／四六判・208頁・定価 2000円＋税

おすすめの１冊

乾 久美子
建築家、東京藝術大学准教授

富山グランドプラザはまちづくり関係者には、言わずと知れた存在だ。富山市の総曲輪商店街の中心に位置するガラスの半屋外空間。まず、建築デザインが美しい。頭上にはほとんどガラスのみでできた屋根。しかしながら、いわゆるアトリウムのような密閉空間ではないので、空気のよどみが感じられない。人が行き交い、晴れの日には光りが降り注ぎ、雲の流れを感じ、雪が降ればつもっていく様子が感じられる。富山市のように冬の屋外活動が極端に限定されるような場所では、本当に望まれていた空間であることが、ぱっと見ただけでわかる。

しかし空間が美しいからといって自動的に人が集まってくるほど、日本は貧しくない。日常的にエンタテイメントがあふれるこの国で、広場などつくっても見向きもされないケースが多い。だからグランドプラザは、広場というものが日常の生活にしっかりと根付かせることができるのかという重いテーマを背負って運営されている。しかも日本全国の期待を背負って。その中心にいるのが著者の山下さんだ。

この本には、グランドプラザの誕生秘話から立ち上げ時の苦労話、日常的な工夫に至るまで、都市における広場づくりのノウハウがいっぱいにつまっている。原稿を書いている途中の山下さんに会ったとき、言いたいことが有りすぎてまとまらないと悩んでいたのを思い出すが、本を読んでいてその悩みを理解した。本の中での話題は施設の運営論、組織論、広場論、公と民の協働論と多岐に渡るのだが、彼女の中ではこうしたものが肉体レベルで有機的に結びついてしまっているので、すべてが「あたりまえ」なのだ。だから、どのような言葉で説明してよいのか分からなかったのだろう。それらをなんとか整理し言語化するという苦労の跡が感じられた。しかし、読みすすめていく内に彼女のペースにまきこまれて、「そうそう、広場って、こういうもんだよなあ」と納得させられる感じなのだ。つまり、山下節が本にも出ているわけです（笑）。

山下さんの魅力はなんといっても、まちを愛する気持ちと、人に対する寛容さである。美しい言葉で言うと母性愛そのものの人、悪い言葉で言うと若くしておばちゃん？（大変申し訳ありません）といった感じで、あらゆる立場の人から信頼される才能にあふれている。しかし、それなりに気苦労もしていることが字間から感じられて、なかなかぐっと来る。ちなみに、私個人が山下さんから学んだのは赤の他人の信頼の仕方で、特に、昼間からお酒を飲みにくるようなおじさん達との関係の築き方は、彼女の胆力がよく現れていて本当に感心をしている。

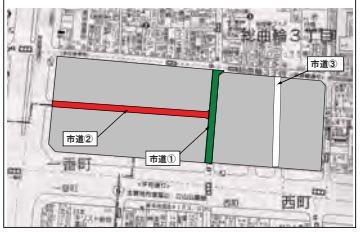
あと、本を読んで驚くべきことのもうひとつのポイントは、彼女のブレのなさである。都市とは何か。都市の中で市民はどう振る舞うべきか。こうしたことに対しての考え方が、どのようなイベントを行ったとしても一貫しているのだ。彼女にとってみれば「あたりまえ」。しかし、そのあたりまえを本能的に知り、具体的な行動に結びつけることができる人はそういない。人、建築、都市、社会に興味が広く行き渡っていないと、こういう人にはならないのだから。

この本によって第二、第三の山下さんが生まれることを祈ります。

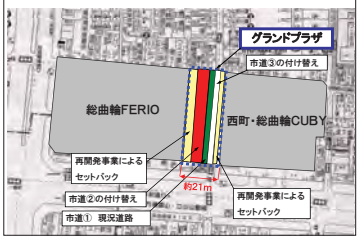
賑わいと交流がうまれる「まちなか広場」

全国まちなか広場研究会／（株）ハイマート久留米／NPO法人GPネットワーク　山下裕子

都市空地を「広場」に変える　～　建設経緯　と　立地　～



都市空地を「広場」に変える　～　建設経緯　と　立地　～



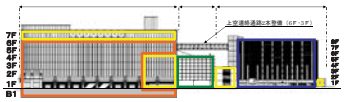
「都市空地」↓「広場」

2地区の再開発との位置関係

総曲輪通り南地区
市街地再開発事業

グランド
プラザ

西町・総曲輪地区
市街地再開発事業



身の丈に合った，再開発事業
腹巻型／路面型

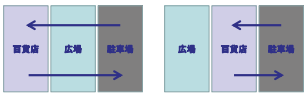
百貨店
専門店
屋根付き広場
駐車場

地のりの　集客力！を活かす。

まず「通路」であり、「広場」である。

「広場」は、空っぽな「空間」。

広場自体に、「集客力」は、ナシ。



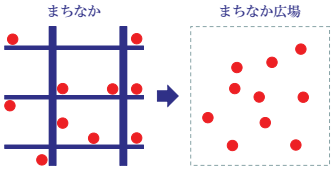
人間の基礎

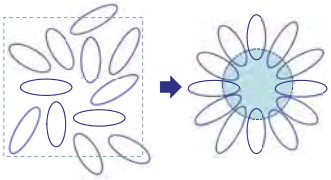
対面×歩行

公共
交通
×
公共
広場

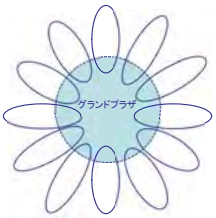
待ち合いの場所

待ち合せの場所



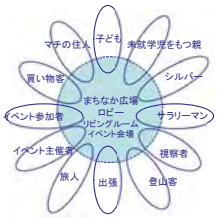


～ 365枚の市民のハナが咲く ～

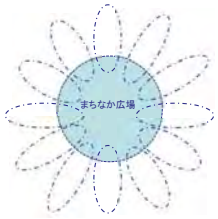


～ 365枚のピアノのハナが咲く ～

～ 365枚のヒトのハナが咲く ～



～ モヤモヤ アイマイ なまま集まり漂う ～



ひらかれた

空気・空間・間柄

成功の秘訣！？　～ 事務所スタッフの姿勢 ～

× グランドプラザ管理事務所

○ グランドプラザ運営事務所として
「住民」にかかわる

◎ グランドプラザ等の運営事務所
まちづくり(中心市街地全体)に関わる

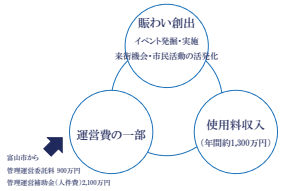
↓

グランドプラザ等の見守り役へ
主体的に活動する住民への助言・サポート

オリジナル条例の制定

（富山市まちなか賑わい広場条例）

道路指定の解除＆使用料金の徴収



公共事業として「広場」を整備・管理運営すれば

賑わいづくりを行政が「継続的」に支援できる。

うれしいヒトと出会う場所。

楽しいコトと出会う場所。

明快な！

マネジメントコンセプト

広場の必須アイテム

カフェテーブル椅子
&
くつろげる雰囲気
&
心地良い日陰

屋根が在る

風が吹く

広場 とは 中心市街地のなかで突然現れる
ぽっかりと空いた「大空間」
↓
市民が日常的を過ごす場所が 広くなる
↓
思考 や 気持ち も 広がる！

「自由」な「広場」

「自由」な「広場」

24時間OPEN
24時間様々なアクティビティ
24時間ヒトの目 → 安全

「空間」があるから
「時間」を、シェア
人と対面できる。一緒に居る。

※写真・資料 提供、富山市役所

横につながる場所，広場

サードプレイス

家族と仕事の領域を超えた個々の
定期的で自発的で、インフォーマルな
お楽しみの集いのために場を提供する
さまざまな公共の場所の総称

ネットワークでつくる
自分の居場所、拠り所
サードプレイス

※写真・資料 提供、筑波銀ネットワーク

「平日」が「大切」

日常の重要性

すべての備品の稼動が可能

モノが動く → 生き物になる

空気も、水も、血も、情報も、お金も 動かす。 動かし続ける。

↓

いつも新鮮な風を起こす、起こし続ける。

気分を大切にする、その日の風を大切にする。

座りやすく、居心地の良い → ヒトのいる景色

↑ ↓

賑わいのある景色 ← ヒトを惹きつける

成功の秘訣！？ ～ まちなかに子どもの居場所をつくる ～

母親と子どもの行動範囲内に
まちなか広場がある

→ 毎日、違う光景 → 楽しい場所

→ 子どもが居る → シルバー世代が眺める

→ 多世代の「でかける機会」を創出

都市とは、小さな子どもが歩いていくと、
将来一生をかけてやろうとするものを教えてくれる
何かに出会う、そんなところだ。

ルイス・カーン

本物を魅せる。本物に出会う。

エンジンは，住民

自由はその字の如く
「自」が主になって居る。
抑制も牽制（けんせい）も何もない
「自ら」又は「自ずから」出て来るので
他から手の出しようがないとの義である。
自由には元来政治的意義は少しもない。
天地自然の原理そのものが
他から何等の指図もなく、制裁もなく
自から出るままの働き
これを自由と云うのである。

出典：『鈴木大拙の世界』より抜粋

成功の秘訣！？　～ まちなかの、ハレの場 ～

発表したくなる、ハレの場

最年少利用者は高校生！最遠方利用者は石垣島！

おめかしして　でかけたくなる、ハレの場

成功の秘訣！？　～ 1年前からの予約を定着化 ～

1年前から、予約をして

1年前から、ワクワクしている人が

まちなかに、多数出現！

その地域の「いま」（現状）を

映し出す「鏡」（メディア）のような　場所

2015.8.28 横浜

水辺から見る都市づくり

有限会社ハートビートプラン　泉 英明

都市の魅力⇒風景

物理的空間＋人間の活動

大阪都心部の水辺

大阪の地盤沈下、従前の水辺

行政のシンボル拠点整備

八軒家浜（2006年）
道頓堀川　とんぼりリバーウォーク（1998年頃）
2008年以降
2005年以降

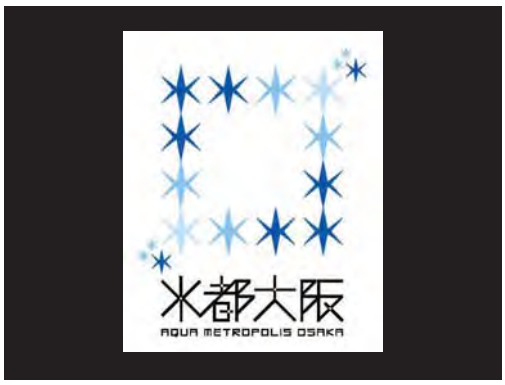
行政のシンボル拠点整備

道頓堀川　湊町リバープレイス（1998年）
尻無川　大阪ドーム南公園の場所
道頓堀川　湊町リバープレイス（2009年）
尻無川　大阪ドーム南公園（2006年）

市民・民間サイドの活動

市民・民間サイドの活動

市民・観光ガイドの活動


水都大阪
AQUA METROPOLIS OSAKA

大阪の地盤沈下、従前の水辺

水都大阪2009

水辺のまちあそび
やってみたいを叶えよう！

会場やＷＳの様子（2011･2012）

水都大阪フェス
かんじるプログラム・めぐるプログラム

水都大阪フェス
たのしむプログラム

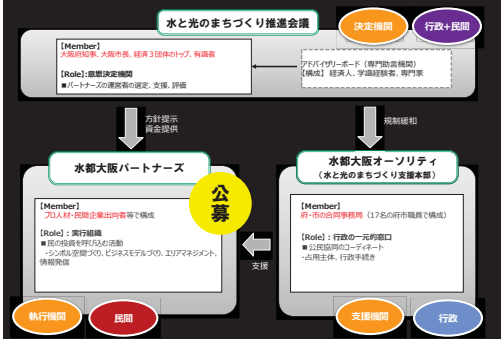
レポーター・サポーター育成
つなぐプログラム

フェスから日常へ

水辺の公共空間を使う担い手増（使っていいんだ！）
多様な使いこなしのアイディア・ノウハウ
イベント期間限定⇒普段使い・恒常的な利用へ
派遣年限担当者・単年度予算の限界

常設民間主体による推進、水辺エリア全体の運営へ
市民参加に加え、民間投資誘導＆世界発信
許認可窓口や新たな仕組みのワンストップサービス化

府・市・経済界のオール大阪で進める水都大阪の推進体制（2013～）

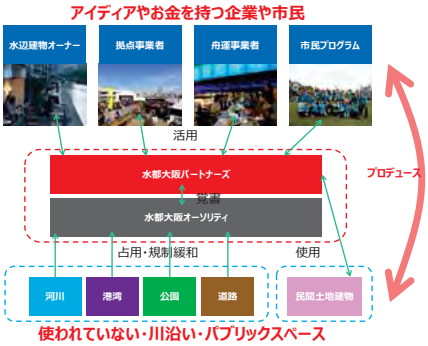


水都大阪パートナーズ始動　2013～

水都大阪パートナーズの役割

①プロデュース
②ファシリテート
③プロモーション

①プロデュース



②ファシリテート

関心度に応じた参加の多様性を確保

水都大阪というイベントを通じて
自ら水辺を日常的に使いこなす
人々が生まれている

③プロモーション

広報活動

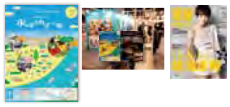
・水辺拠点と連携したプロモーションの強化と魅力案内
冊子、WEB、SNSを組合せたメディアミックスによる
情報発信

フリーペーパー

サイトアクセス
約82万セッション

観光強化・インバウンド集客

・大阪観光局との連携
・海外雑誌にアプローチ
・姉妹都市連携イベント・P.R.
・多言語WEBサイト、予約システム



コミュニケーション活動

他都市との交流・ビジネスマッチング・視察受入・提案受入

全国都市水辺関係者会議

視察・現地案内

水都大阪パートナーズ始動　2013～

日常の風景へ

水辺１７拠点の川の駅化（水陸両用アクセス）

水都の川沿いの１７拠点の「個性ある川の駅」化

中之島公園/オープンテラス

役所南 土佐堀川沿いの公園を活用したレストラン/グリーンマーケット

中之島GATE/中之島漁港

常設のフィッシャーマンズマーケット、海と川を結ぶ都心周縁のリゾート

中之島漁港　⇒常設へ

イベント→常設の段階的プロセス
インフラ投資・回収の事業モデル

安全航行・水面活用の仕組み

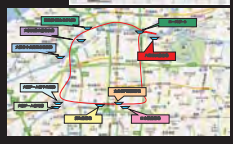
大阪水上安全協会

NPO法人大阪水上安全協会
（航行安全、公共船着場統括管理）

船舶の事故防止対策などを推進し、河川運行の安全に寄与することを目的に設立。

◆設　立　　：平成16年8月5日
　　（昭和61年3月　大阪水上安全協会として発足）
◆会　長：久ノ坪　宏司（大阪水上バス株式会社　取締役社長）
◆加盟数：46社・団体（会員数54）
◆事　業：①河川における安全意識の普及に関すること
　　②河川における事故防止対策推進
　　③河川水上交通の振興に関すること
　　④前各事業を達成するために必要な調査研究等の事業

各船着場利用予約状況
10ヶ所の公共船着場統括管理



多様なクルーズの統合発信の仕組み

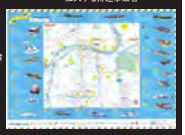
大阪シティクルーズ

大阪シティクルーズ推進協議会
（舟運・観光・メディア等）

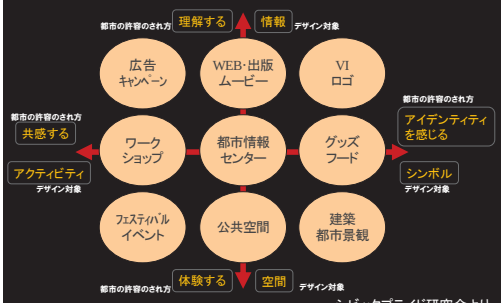
大阪の魅力を発掘、再発見して、その価値を高めることを目的に大阪の舟運事業者だけでなく、水都大阪の再生を願う市民や企業、行政が手を携えて設立。

◆設　立：平成19年10月25日
◆会　長：久ノ坪　宏司（大阪水上バス株式会社　取締役社長）
◆会員数：50社（団体）
◆事　業：①水都大阪再生に資する資源の発掘、再発見等のまちづくり活動
　　②水都大阪再生に関する調査研究
　　③大阪シティクルーズの企画推進

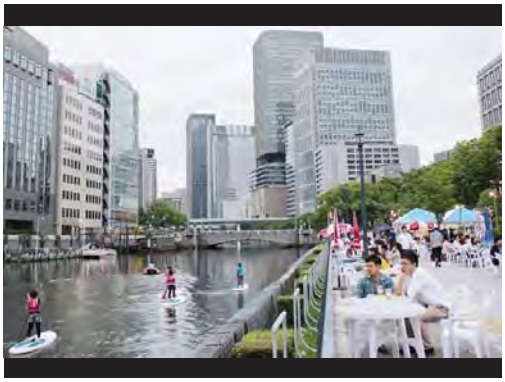
クルーズ商品一覧マップ
加入する舟運事業者



都市が意思表示する／コミュニケーションポイント



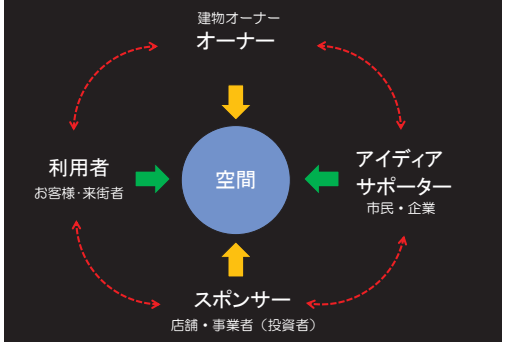
シビックプライド研究会より



期待されること

- 日常アクティビティでシーンをつくり世界に発信
- 都市横浜の意思表示
- 市民・企業＆来街者、多様な関わり方
- 海と川＆陸の結節点・周辺の個性エリア連結
- 商業＆市民活動のバランスのとれたマネジメント

都市空間のつくり方



新市庁舎整備について

平成27年8月
横浜市 新市庁舎整備担当

1

これまでの主な検討経緯

昭和34 年	９月	現庁舎しゅん工
平成 元年	４月	横浜市市庁舎整備基金設置
平成 ３年	６月	市長が「横浜市市庁舎整備審議会」に「21 世紀にふさわしい市庁舎のあり方、条件など市庁舎整備の基本的構想に関する重要な事項」について諮問
平成 ７年	１月	「横浜市市庁舎整備審議会」答申
平成19年	12月	「新市庁舎整備構想素案」を公表
平成20年	３月	北仲通南地区の土地取得
平成24年	５月	市会に「新市庁舎に関する調査特別委員会」が設置される
平成25年	３月	「新市庁舎整備基本構想」を策定
平成26年	３月	「新市庁舎整備基本計画」を策定
	９月	「市の事務所の位置に関する条例」の一部改正
平成27年	５月	市会で「市庁舎移転新築工事」に係る予算議案可決
	６月	「新市庁舎移転新築工事」入札公告

2

新市庁舎整備の必要性

○現庁舎の課題

○築50年以上の経過による施設や設備の老朽化

○庁舎の分散化による市民サービスの低下、
業務の非効率化

○危機管理機能強化の必要性

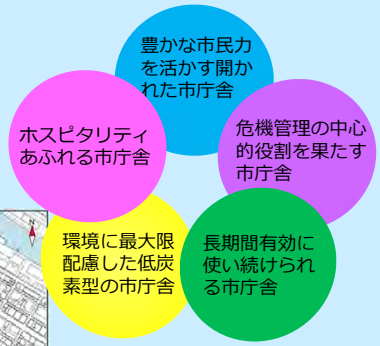
市役所分散化の現状　（約20か所）

◆職員数（平成25年5月現在）
現　庁　舎　　約1,600人
民間ビル等　　約4,400人

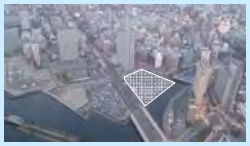
◆民間ビル賃借料：年間20億円以上

移転整備

○新市庁舎の整備



《新市庁舎整備の基本理念》



整備予定地：北仲通南地区（中区本町６丁目）

3

整備予定地

4

整備予定地

◆場　　所：中区本町６丁目50番地の10（北仲通南地区）

◆敷地面積：約13,500㎡

◆周辺環境：みなとみらい線馬車道駅から徒歩１分（直結）

ＪＲ、市営地下鉄桜木町駅から徒歩５分

◆主な都市計画制限等

・用途地域：商業地域

・容積率の最高限度：1,080%

・高さの最高限度：190m

・北仲通南地区第二種市街地再開発

・北仲通南地区再開発地区計画

5

新市庁舎整備計画概要

◆建物の概要

・構　　造　：　鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造

・階　　数　：　概ね地上32階、地下２階

・高　　さ　：　約160m

・延床面積　：　約140,500㎡

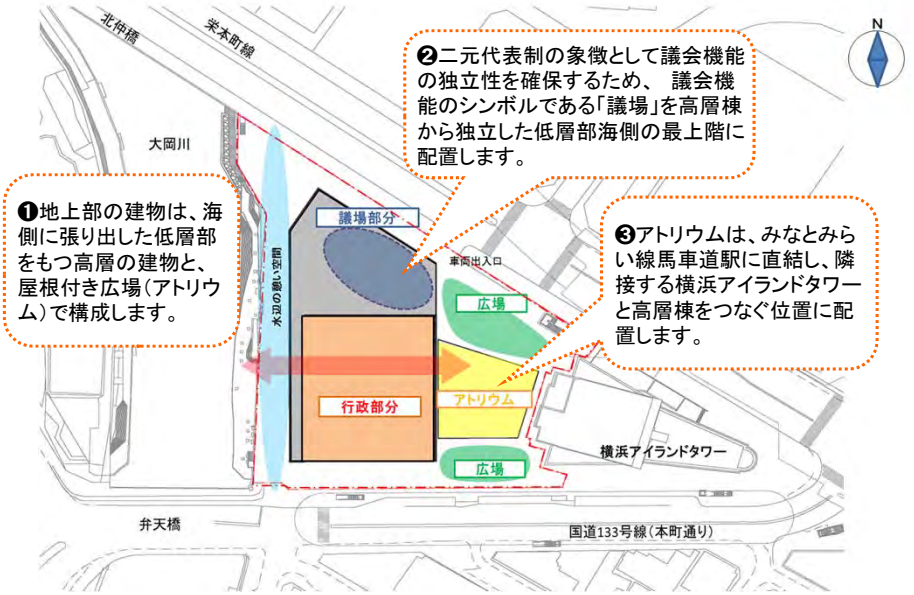
		面積（㎡）
専用部	行政部門	５９，５００
	市会部門	９，０００
	商業機能	４，０００
共用部		５２，０００
駐車場（約400台）		１６，０００
合計		１４０，５００

◆設計・建設費　：　約749 億円

※別途発注予定の低層部内装等工事(約30億円)を除く719億円を上限額として、設計・施工事業者を公募(入札公告)

6

新市庁舎整備計画概要（建物配置の考え方）※イメージ

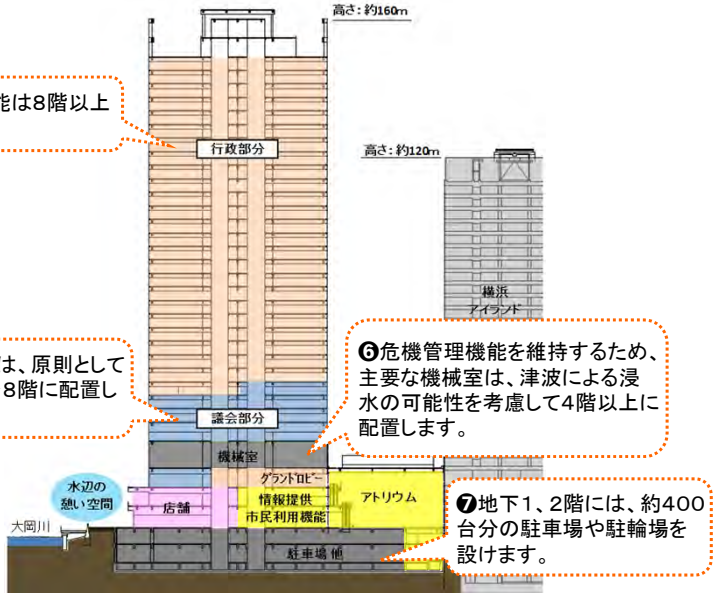


❶地上部の建物は、海側に張り出した低層部をもつ高層の建物と、屋根付き広場（アトリウム）で構成します。

❷二元代表制の象徴として議会機能の独立性を確保するため、 議会機能のシンボルである「議場」を高層棟から独立した低層部海側の最上階に配置します。

❸アトリウムは、みなとみらい線馬車道駅に直結し、隣接する横浜アイランドタワーと高層棟をつなぐ位置に配置します。

新市庁舎整備計画概要（断面図）※イメージ



❺主要な行政機能は8階以上に配置します。

❹議会機能は、原則として3階及び5～8階に配置します。

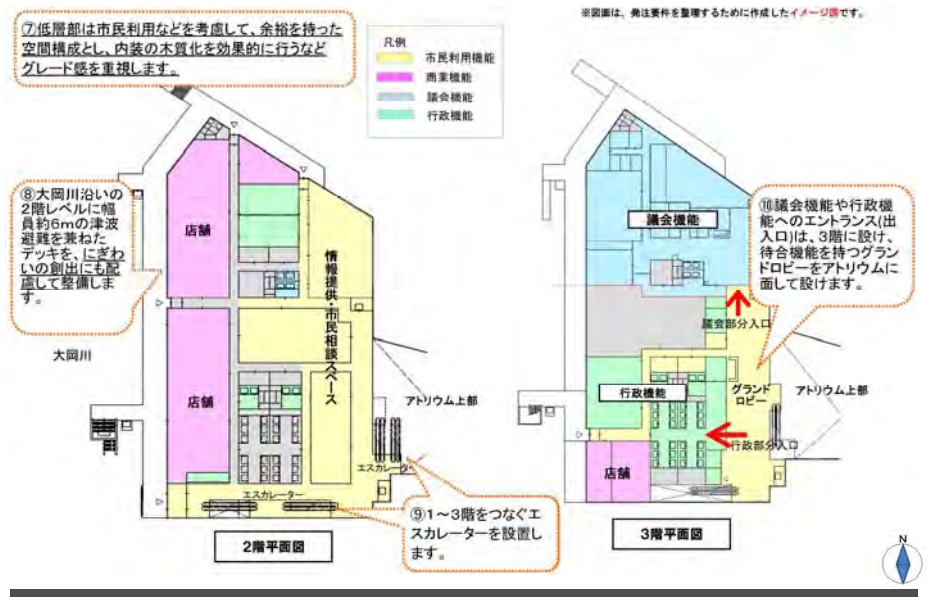
❻危機管理機能を維持するため、主要な機械室は、津波による浸水の可能性を考慮して4階以上に配置します。

❼地下1、2階には、約400台分の駐車場や駐輪場を設けます。

新市庁舎整備計画概要（１階平面図）※イメージ

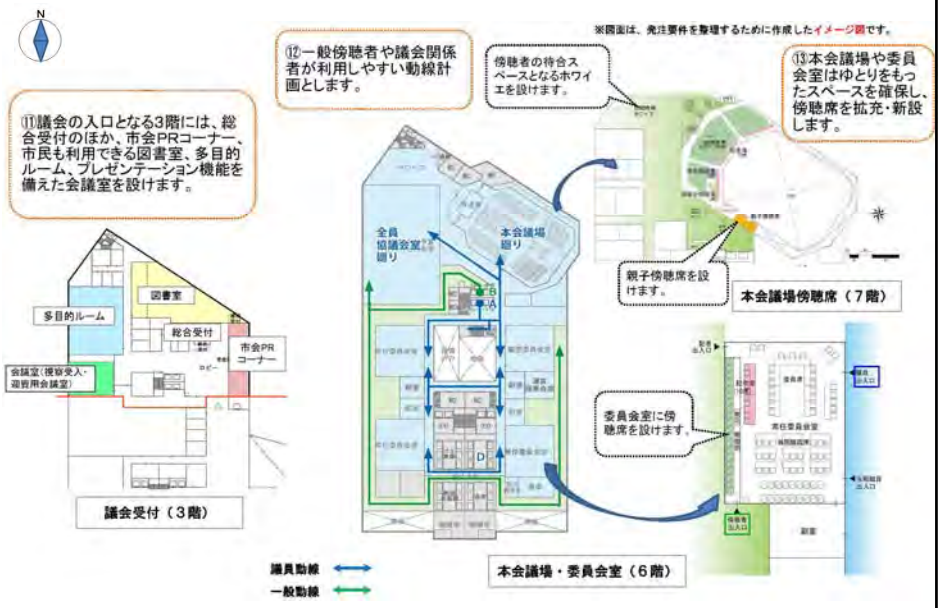
9

新市庁舎整備計画概要（２・３階平面図）※イメージ



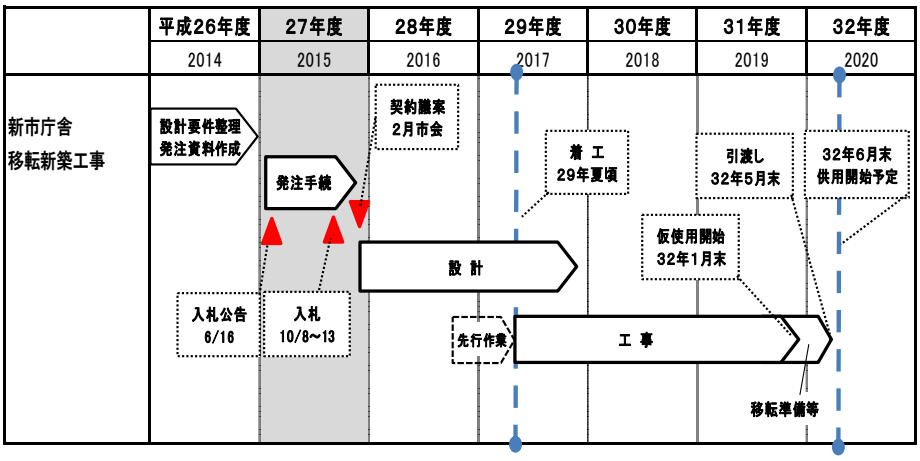
10

新市庁舎整備計画概要（議会機能）※イメージ



11

今後のスケジュール



12

横浜市新市庁舎デザインコンセプトブック

YOKOHAMA
NEW CITY HALL
DESIGN CONCEPT BOOK

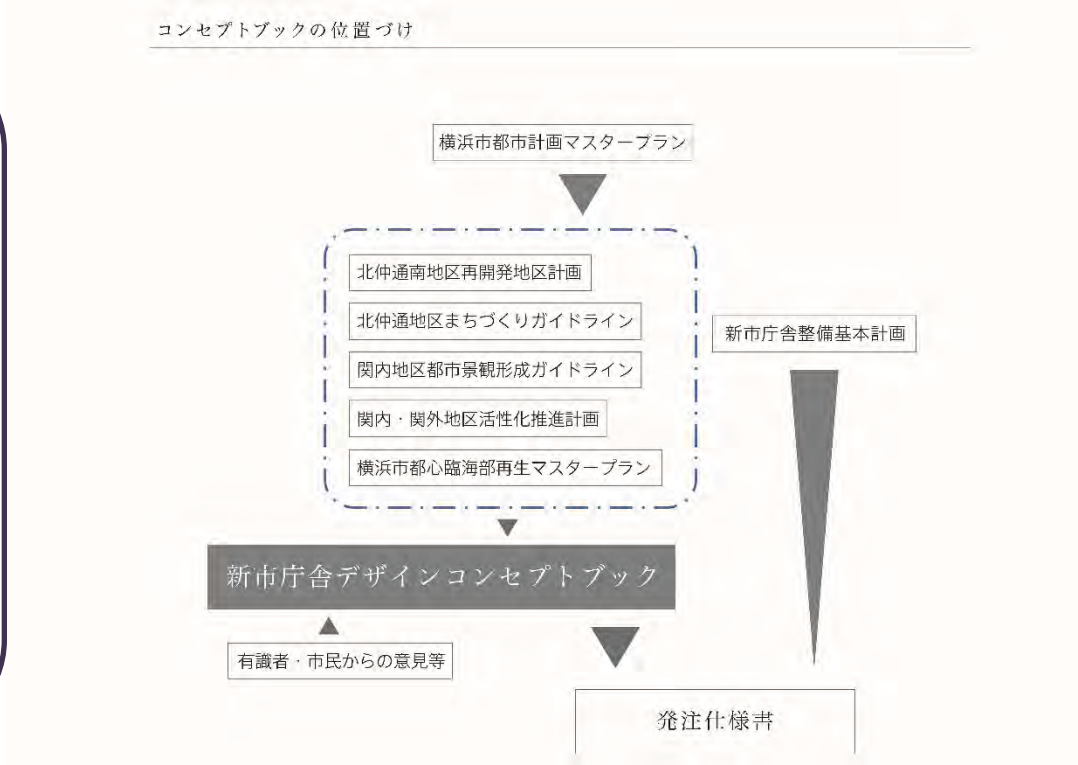
■ 横浜市新市庁舎コンセプトブックとは？（該当ページ：P.3）

横浜市は、基本設計を含んだ「デザインビルド方式」という新しい手法を取る新市庁舎プロジェクトにあたり、市民の方々と新市庁舎の方向性を共有するために、「横浜市新市庁舎デザインコンセプトブック」を作成・公開しました。新市庁舎を北仲通南地区に考えるに当たって、敷地特性の読込みや、市庁舎のあるべき姿、そのための重要な考え方や要素について、まとめたものです。

また、事業者募集を開始する前の時期のタイミングで公開したのは、応募を予定する事業者に、横浜市の考えを事前に伝え、それに沿った方向で検討してもらうことを意図しています。

目次

1. デザインコンセプトブックについて
2. ミッション
3. 地区特性と地区に建つ建築のあり方
3-1. 地区特性
3-2. 地区に建つ建築のあり方
4. 新市庁舎のあり方
4-1. 新市庁舎の構成
4-2. デザインのポイント
4-3. 環境
4-4. 緑化
5. その他
6. あとがき



■ 敷地＝北仲通南地区の特性（該当ページ：P.9～10）

- **北仲通地区全体、及び北仲通南地区は各エリアを結ぶまちの結節点です。**
- 地区に大切に残されてきた歴史的資産の活用が重要です。
- 横浜らしい、水辺に面した敷地であることを最大限に活かしていきます。

■ 敷地＝北仲通南地区の特性（該当ページ：P.9、11）

・北仲通地区全体、及び北仲通南地区は各エリアを結ぶまちの結節点です。

・**地区に大切に残されてきた歴史的資産の活用が重要です。**

・横浜らしい、水辺に面した敷地であることを最大限に活かしていきます。

■ 敷地＝北仲通南地区の特性（該当ページ：P.9、12）

・北仲通地区全体、及び北仲通南地区は各エリアを結ぶまちの結節点です。

・地区に大切に残されてきた歴史的資産の活用が重要です。

・横浜らしい、水辺に面した敷地であることを最大限に活かしていきます。

水辺の現況

上空からの眺め

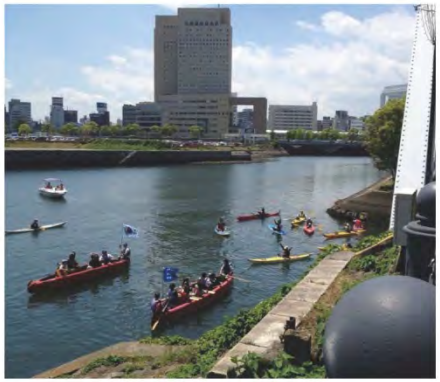
弁天町からＭＭ21を望む

大岡川水辺の活発な市民利用

水辺の活用

水辺からアプローチできるレストラン

運河パレード



水上イベント

■ 新市庁舎のミッション（該当ページ：P.7）

OPEN YOKOHAMA

～開港の街から持続可能で豊かな国際都市へ～

※ステートメント1

人、自然、街がつながる開かれた市庁舎を具現化し、

※ステートメント2

市民と共にOPEN YOKOHAMAを創出する。

※ステートメント3

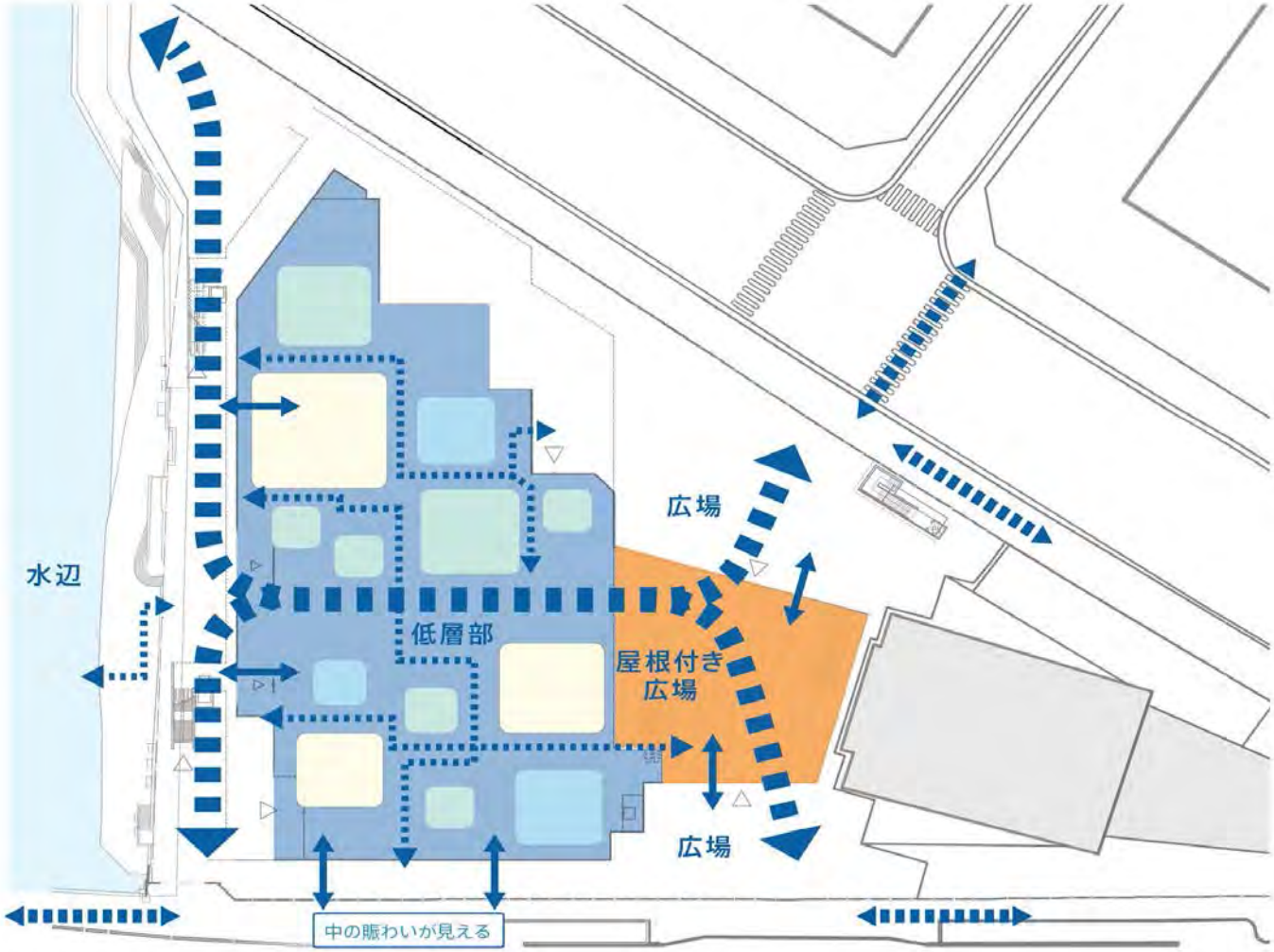
⇒横浜には開港から育まれてきた国際性や多様性、さらには自分の環境を自分たちで創り上げる市民のチカラがあります。

新しい市庁舎は人と人、水辺などの自然、そして街と街をつなぐ開かれた場となります。

新市庁舎における賑わいとは「豊かな市民生活」や「活動」があることです。市庁舎が新しい横浜のシンボルとなるとしたら、低層部の市民に開かれたスペースやそこでの活動によると考えており、そのためには市民参加が欠かせず、市庁舎はその空間やマネジメントによって市民活動を支えていきます。

■ 新市庁舎の低層部＝ “街のような” 市庁舎（該当ページ：P.17～18）

開かれた低層部に、様々なスケールや機能が混在することで、多様な活動を受け入れる。



低層部の構成：
様々なスケール、機能が混在する "街のような" スペース。オープンなつくりで様々な活動を受容する。

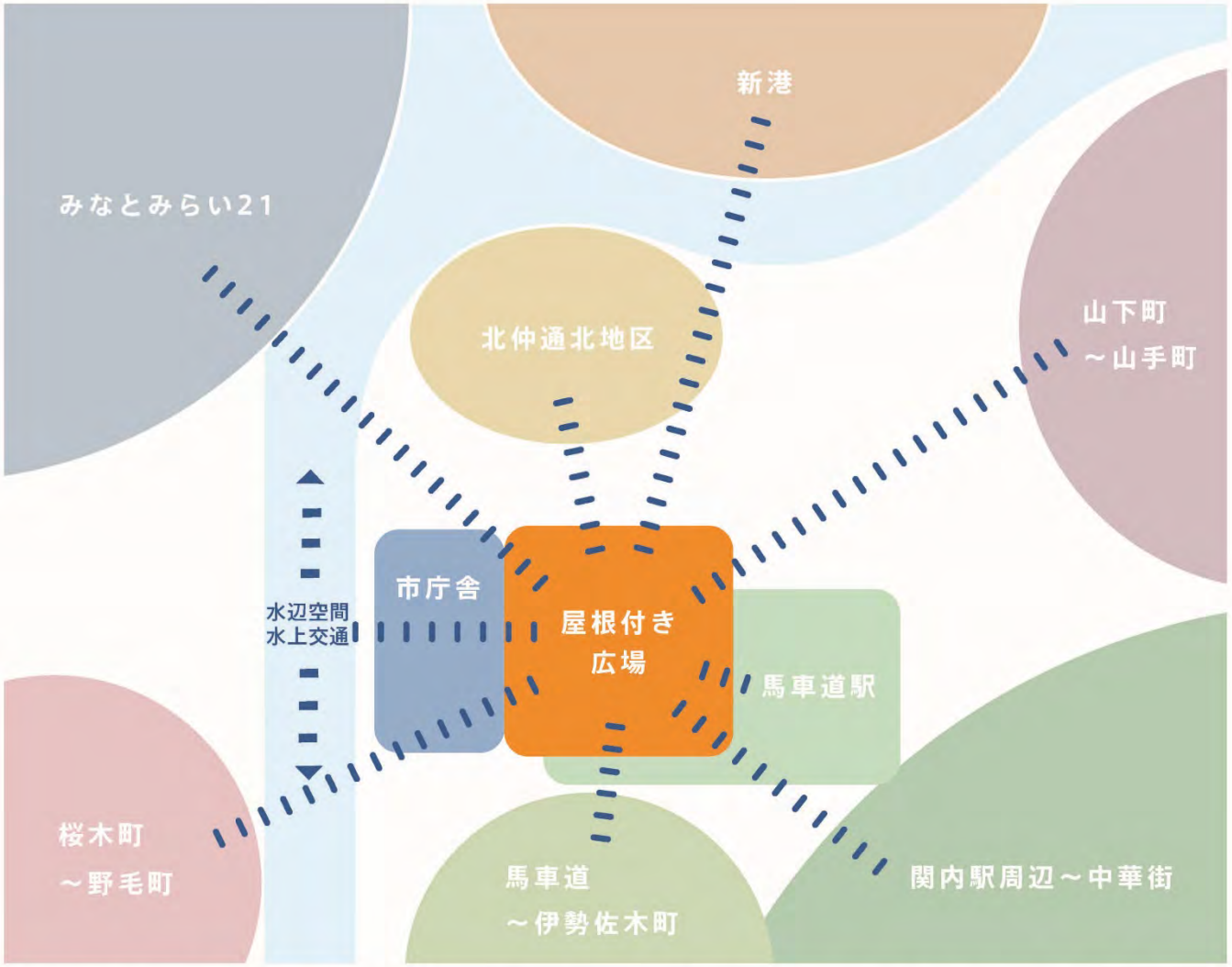
アオーレ長岡

シンガポールシティギャラリー

グランドプラザ（富山市）

■ 重要な要素である屋根付き広場（該当ページ：P.19～20）

屋根付き広場はまちの「結節点」の中心であり、市民活動やカフェのような「賑わい」の中心でもあります。



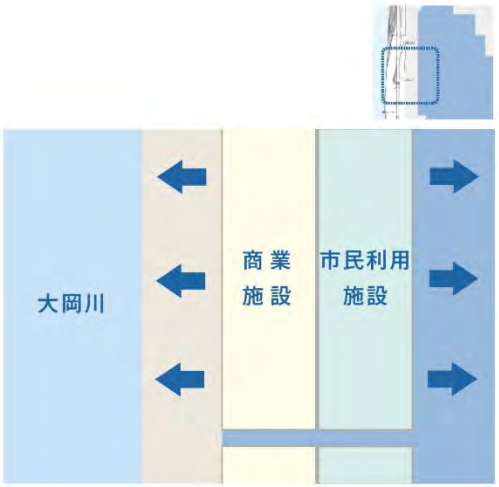
グランドプラザ（富山市）

丸ビル　マルキューブ

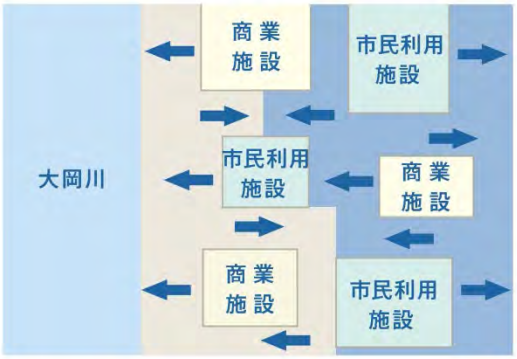
東京ミッドタウン プラザ

屋根付き広場は各エリアを結ぶ「まちのノード」の中でも中心となる場であり、市民活動やカフェの様な賑わいの主要な場でもあります。

■ 水辺「に」開くから、水辺「を」開くへ（該当ページ：P.25～26）



水辺に開く



水辺を開く

（まちが主体の相互方向の関係）

市庁舎と水辺の活動が双方向に関係し合うように配置することで、水辺「を」開くことを考えて、水辺や水上の活動をサポートします。
低層部には賑わいのために商業施設も配置されますが、ここでいう賑わいとは水辺の活動や様々な市民活動など、パブリックスペースでの活動全てを指しています。

水辺やそこでの活動と見る見られるの関係をつくる事も水辺を開く為に重要な工夫の１つです。

水辺に人が憩うよう促すような計画を行うことが賑わいの創出につながります。

大岡川では実際に水辺の市民利用が活発に行われています。

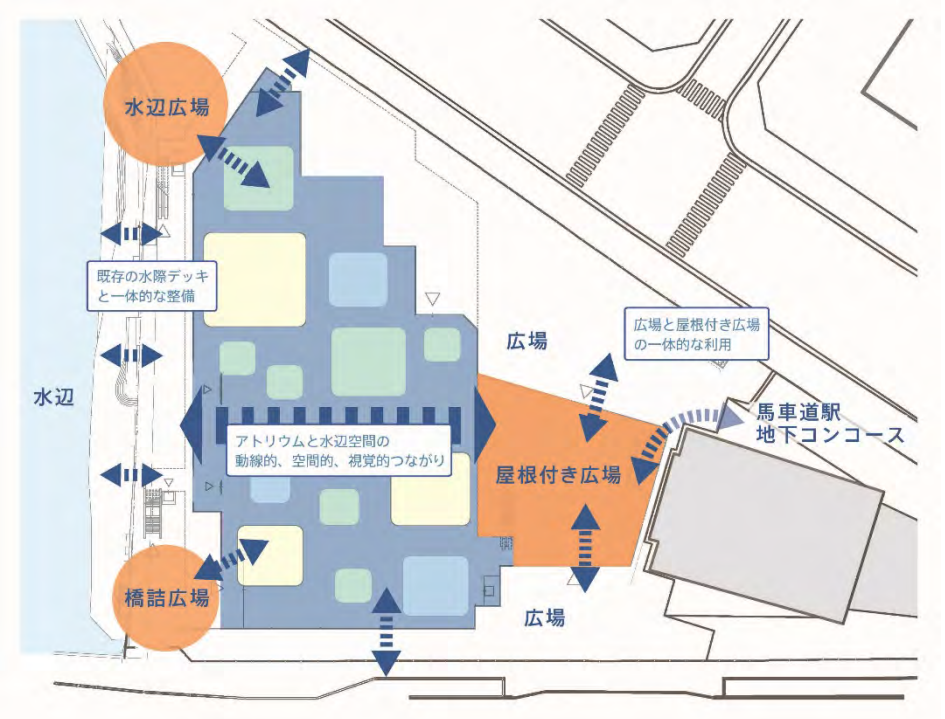
歩道としてだけでなく人々の活動を促す溜まり場をつくることも大切です。

水辺の活動をサポートするような店舗の事例

大岡川沿いの上流に整備されたプロムナードを意識することも重要です。

■ 水辺空間と低層部、屋根付き広場の関係性（P.23～24）

これまで見てきたように、水辺空間と開かれた低層部、結節点と市民活動の中心である屋根付き広場は単体としても重要な要素ですが、それぞれの関係性＝動線的、空間的、視覚的つながりのつくり方に留意する必要があります。

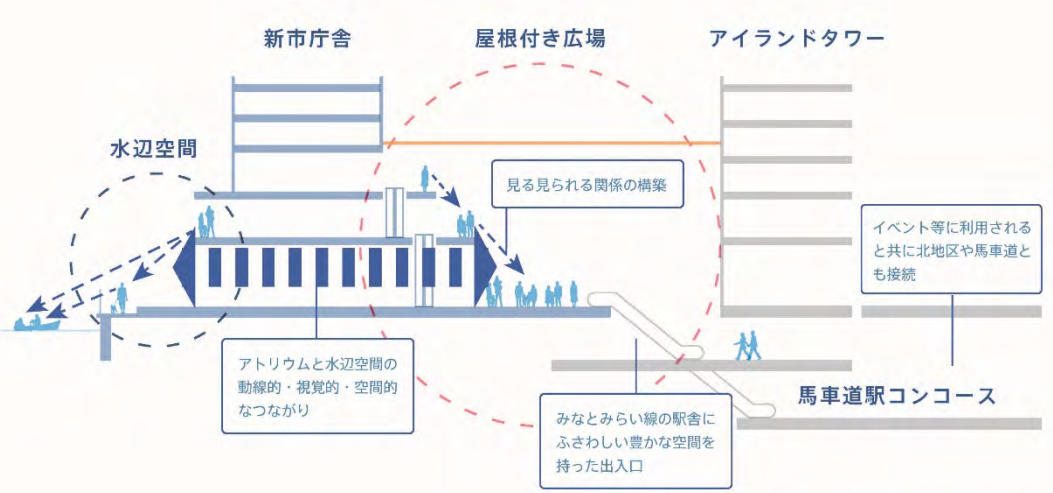


アイランドタワーから見た敷地

市民が活動する広場越しに水辺が見える事例

水辺に張り出したテラスの事例

横浜の水辺を見おろすテラスの事例



■ まとめ

「横浜市新市庁舎デザインコンセプトブック」

新市庁舎のミッション：

～開港の街から持続可能で豊かな国際都市へ～

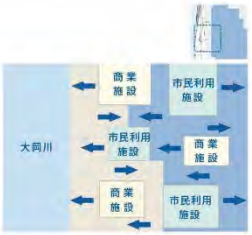
人、自然、街がつながる開かれた市庁舎を具現化し、
市民と共に OPEN YOKOHAMA を創出する。

⇒ 権威的な高層ではなく、低層部での市民活動や
賑わいこそがシンボルとなる開かれた市庁舎。

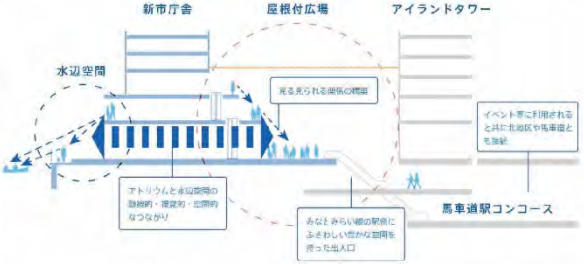
目次

1．デザインコンセプトブックについて
2．ミッション
3．地区特性と地区に建つ建築のあり方
　3-1．地区特性
　3-2．地区に建つ建築のあり方
4．新市庁舎のあり方
　4-1．新市庁舎の構成
　4-2．デザインのポイント
　4-3．環境
　4-4．緑化
5．その他
6．あとがき

地域を結ぶ結節点　＋　横浜らしい水辺　＋　尊重すべき歴史



水辺を開く
（まちが主体の相互方向の関係）



アトリウムと水辺空間のつながり

＋ 新市庁舎における賑わいとは
「豊かな市民生活」や「活動」があること

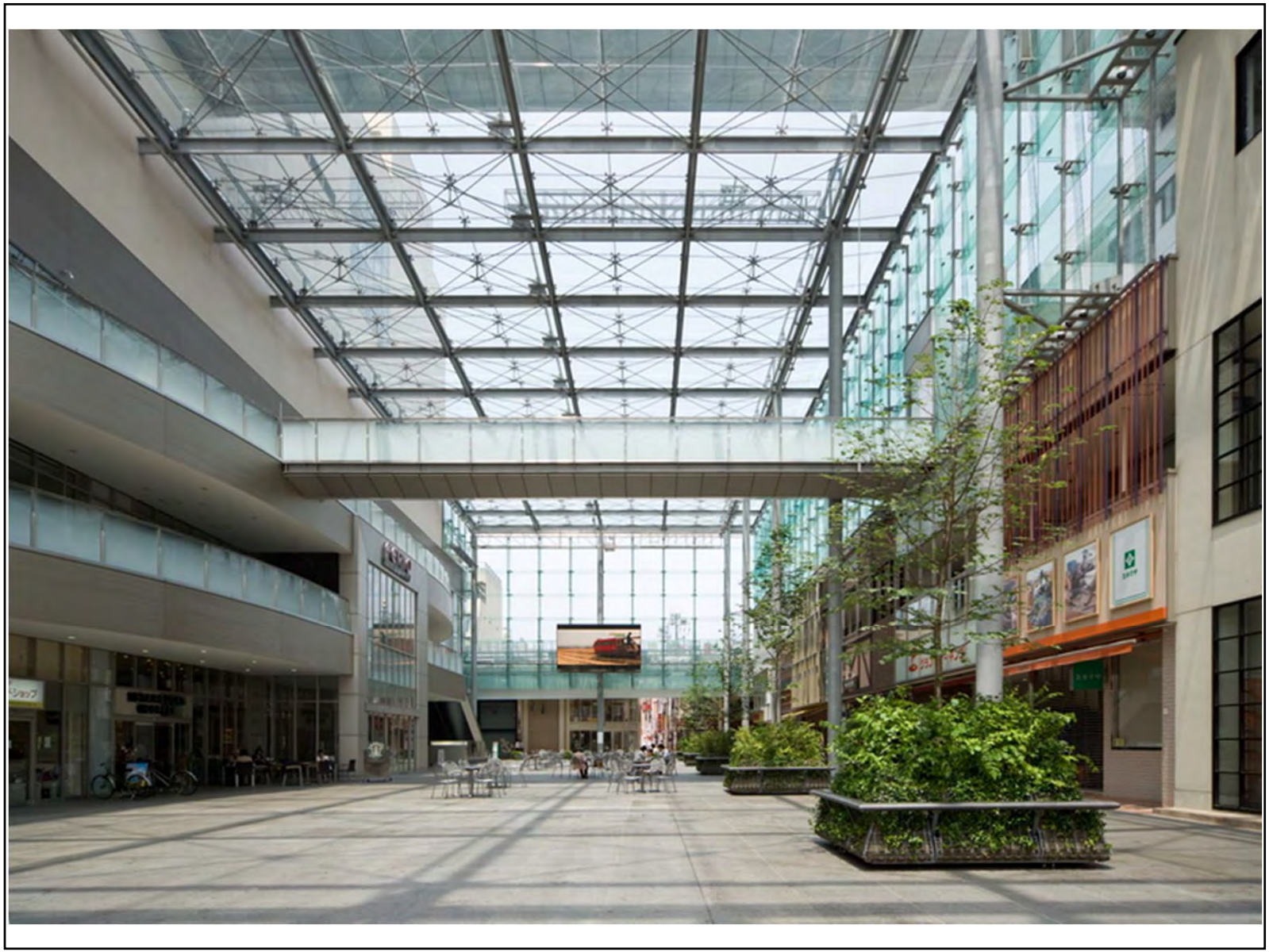
＋ そのための建築のあり方

⇒ 未来を志向した横浜らしさを新しい建築に表す

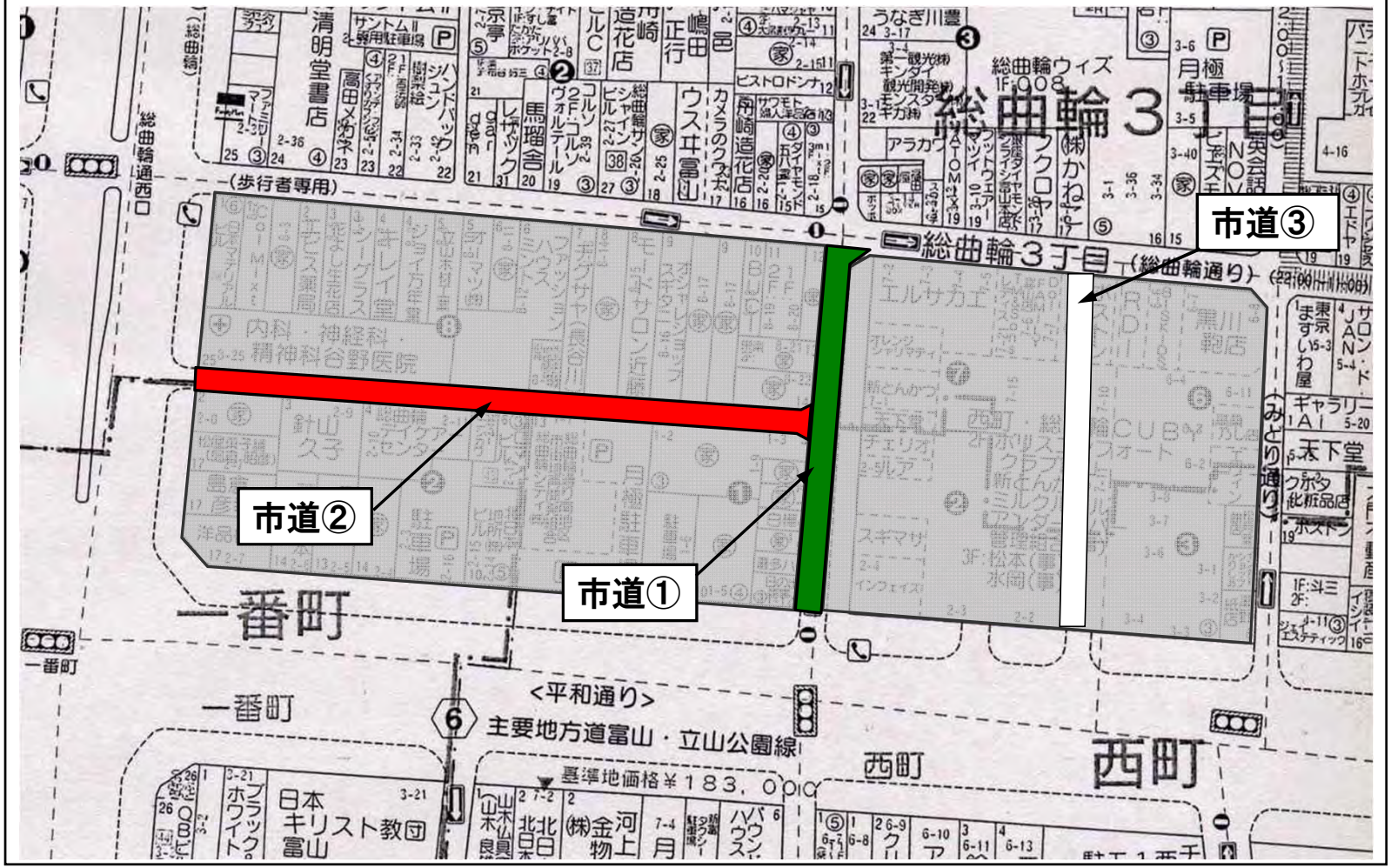
詳しくは本編をご覧ください！

賑わいと交流がうまれる「まちなか広場」

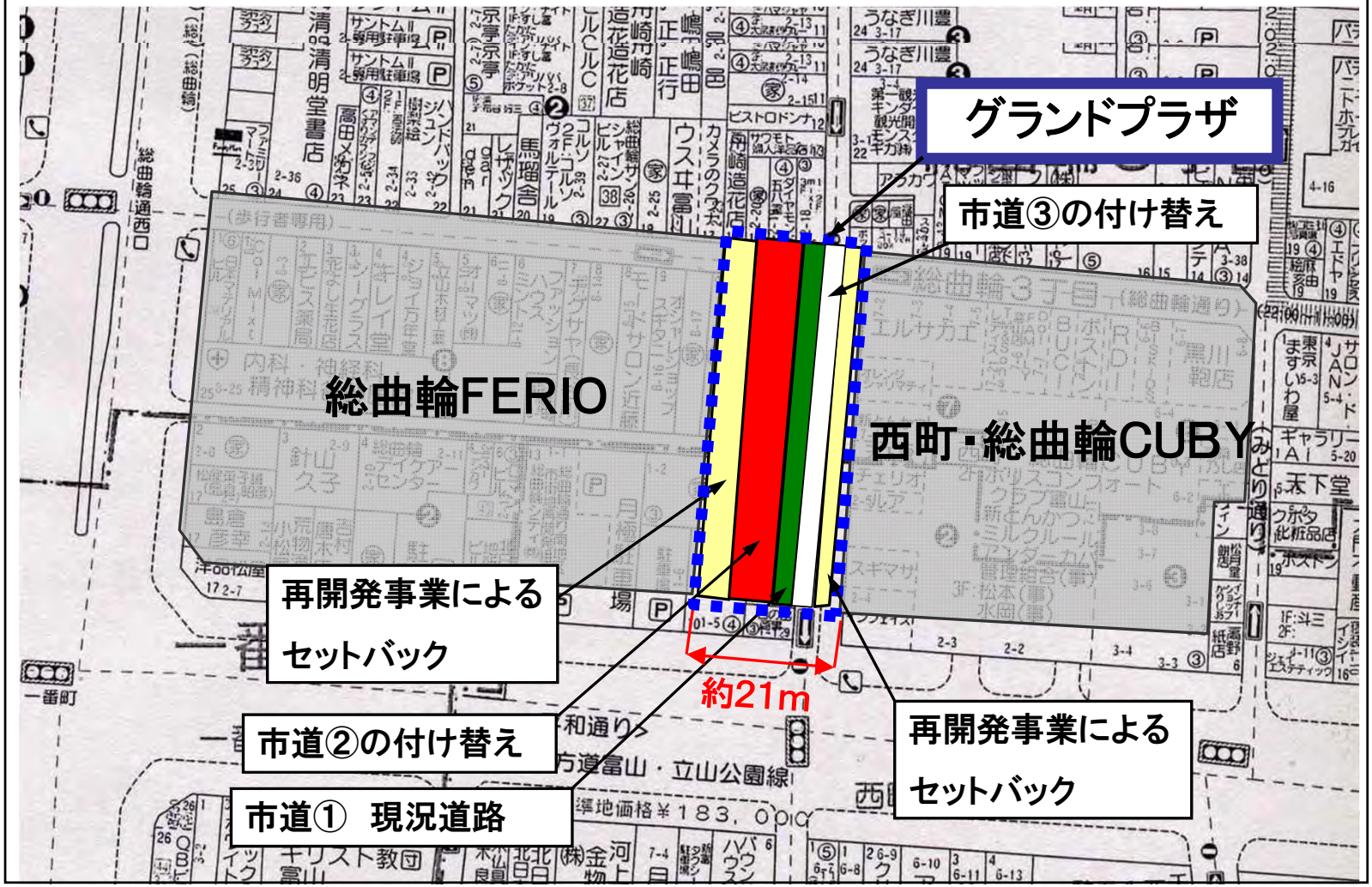
全国まちなか広場研究会／（株）ハイマート久留米／NPO法人GPネットワーク　山下裕子

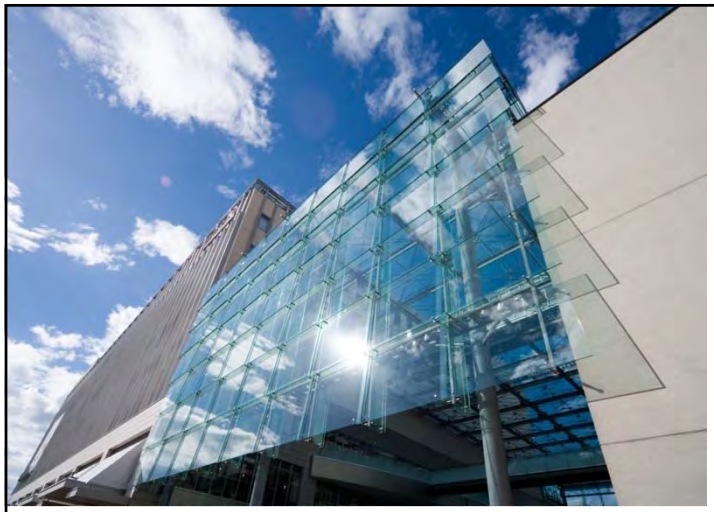


都市空地を「広場」に変える ～ 建設経緯 と 立地 ～



都市空地を「広場」に変える ～ 建設経緯 と 立地 ～





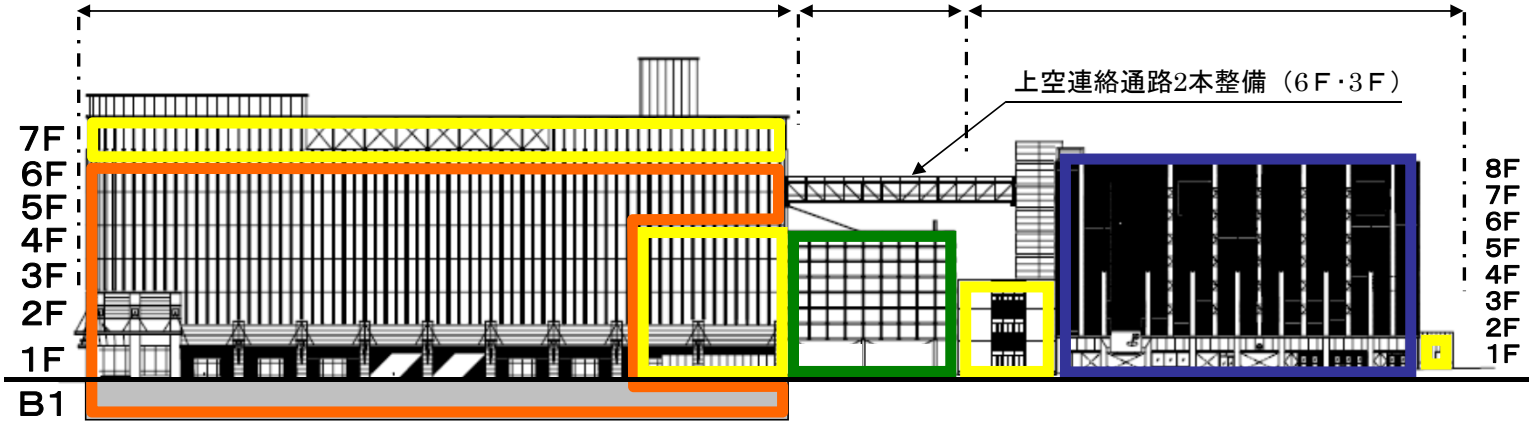
「都市空地」

↓

「広場」

2地区の再開発との位置関係

総曲輪通り南地区 市街地再開発事業	グランド プラザ	西町・総曲輪地区 市街地再開発事業



身の丈に合った，再開発事業
腹巻型／路面型

- 百貨店
- 専門店
- 屋根付き広場
- 駐車場

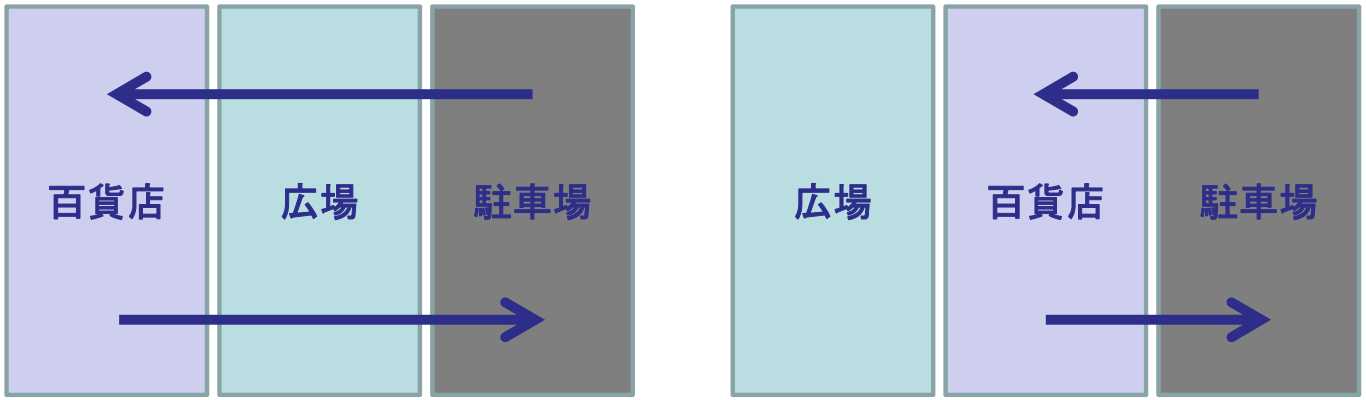
CENTRAL TOYAMA LIGHT RAIL TRANSIT SINCE 2009
9001A

地のりの　集客力！を活かす。

まず「通路」であり、「広場」である。

「広場」は、空っぽな「空間」。

広場自体に、「集客力」は、ナシ。



人間の基礎

対面×歩行

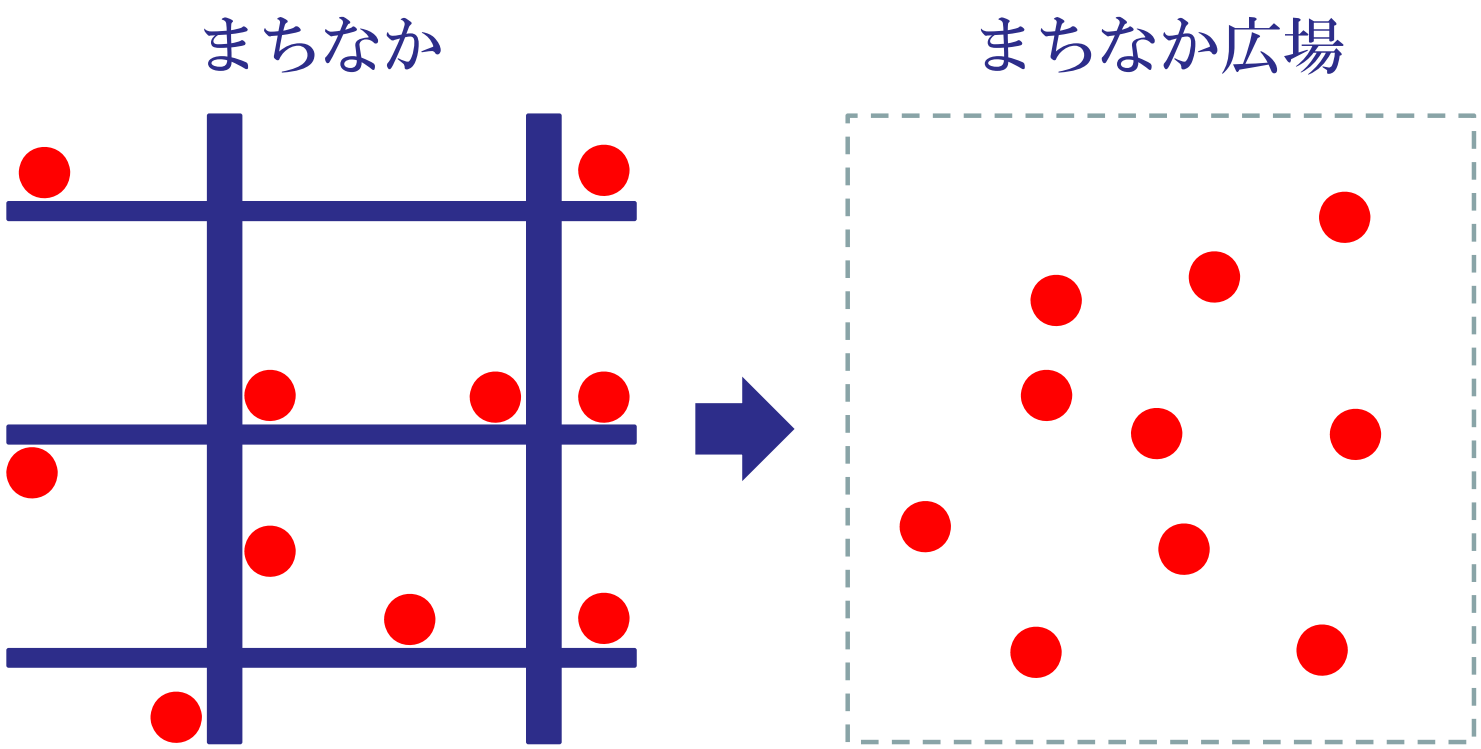
CENTRAL TOYAMA LIGHT RAIL TRANSIT SINCE 2009
9001A

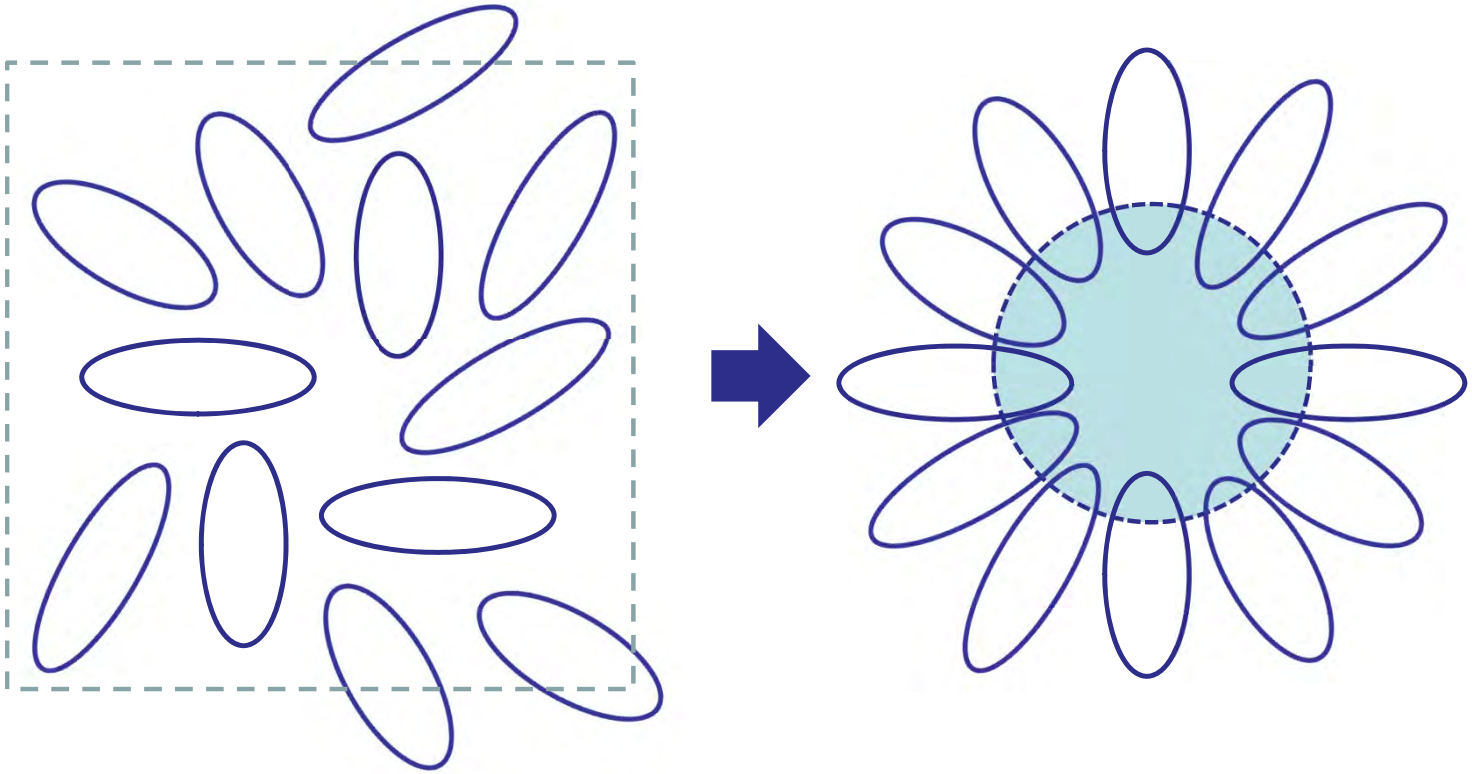
公共交通×公共広場

待ち合いの場所

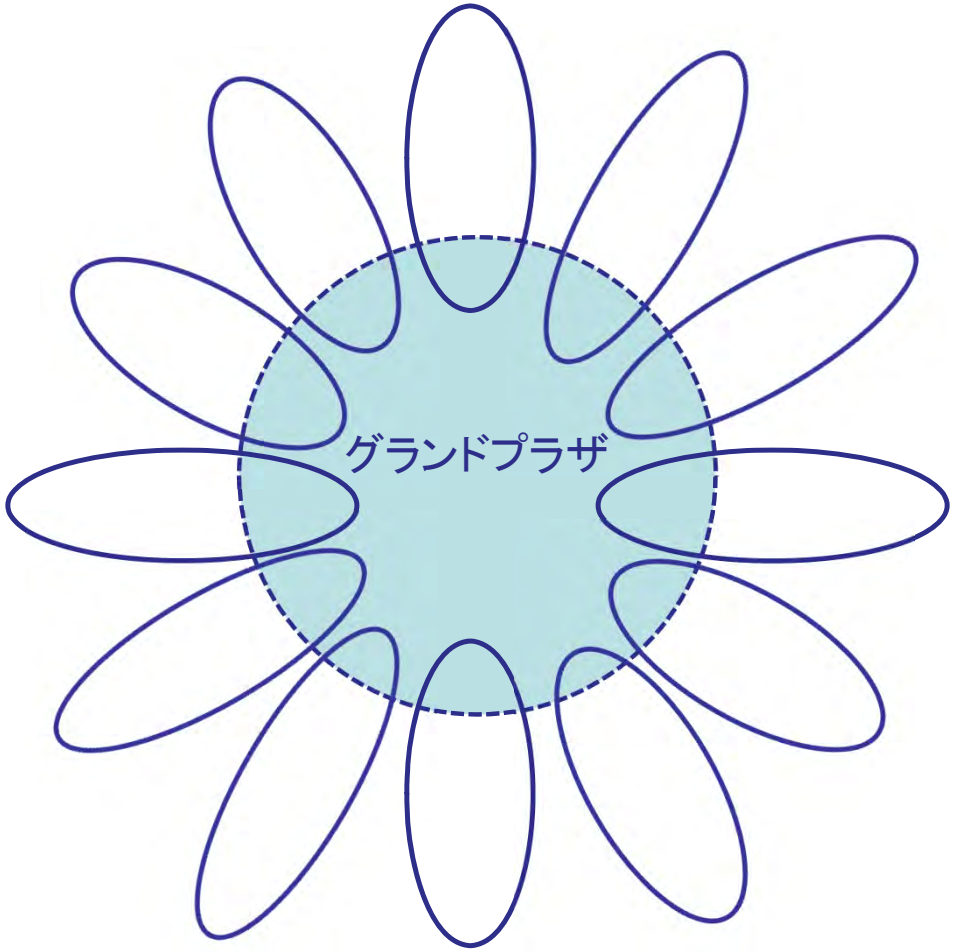
待ち合せの場所

FERIO

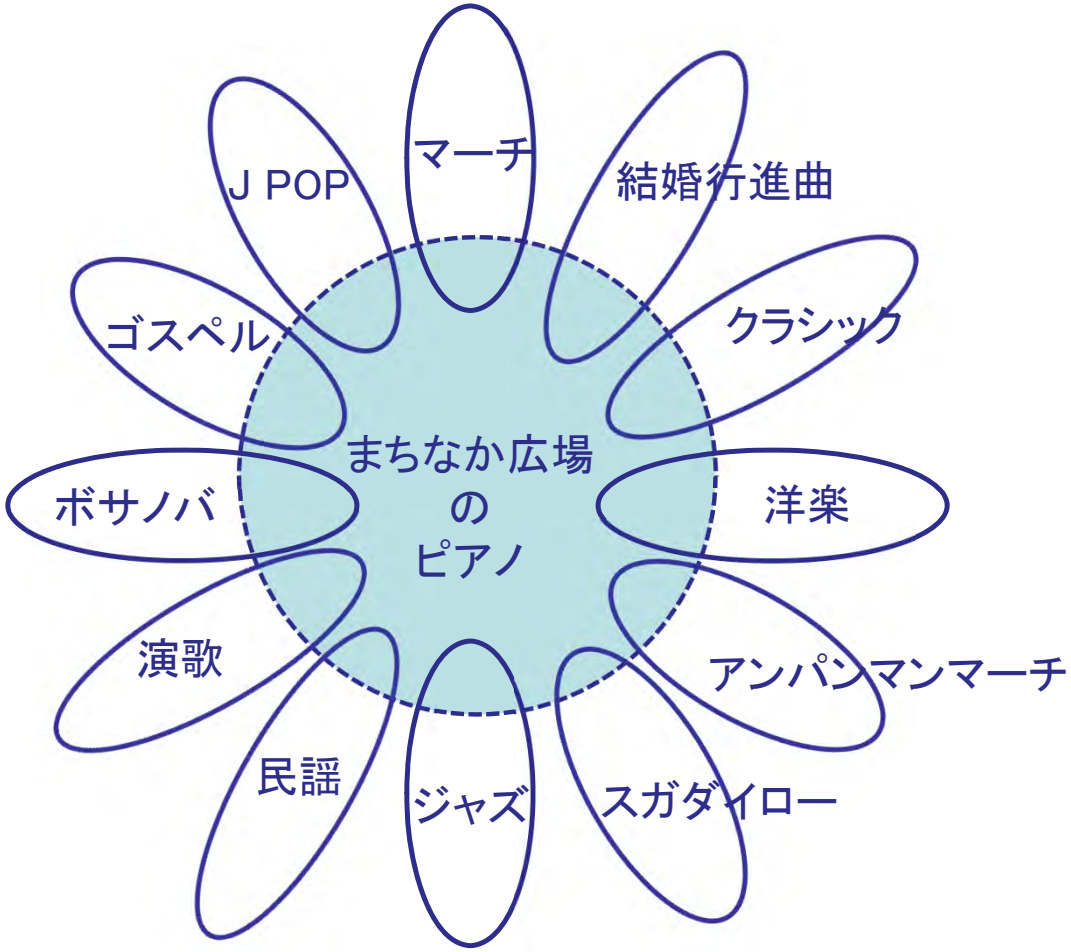

まちなか
まちなか広場



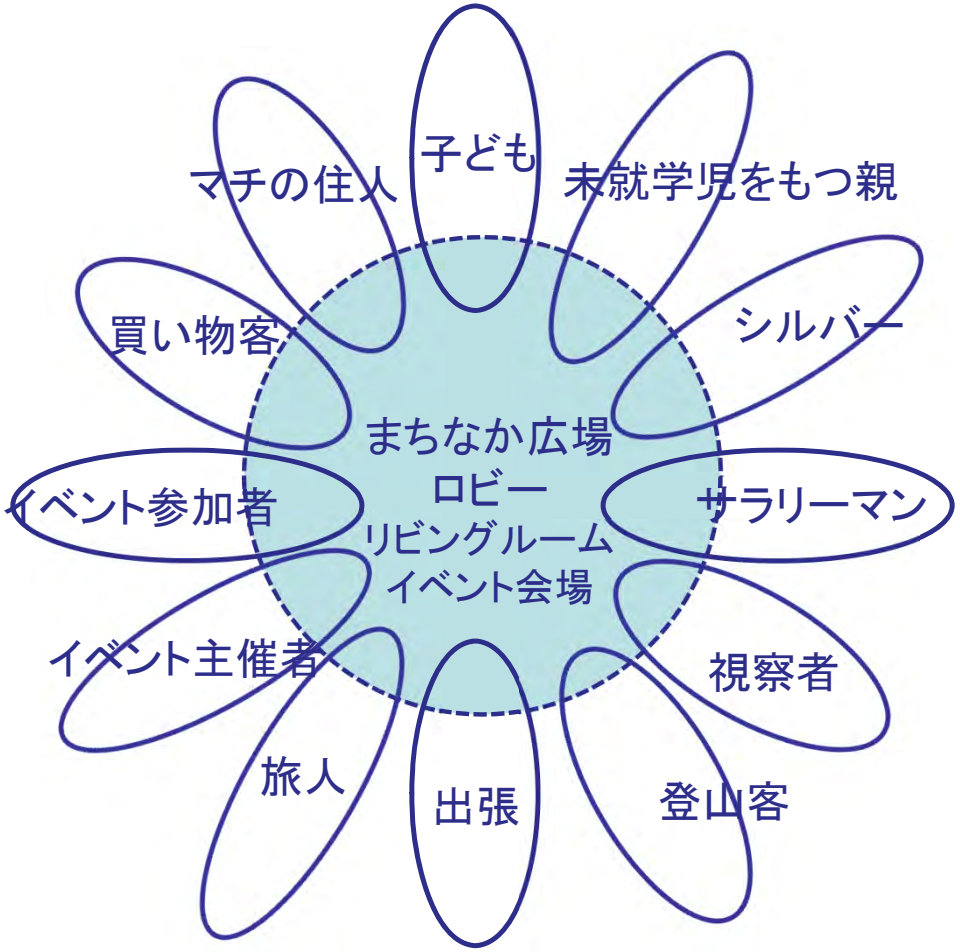
～　365枚の市民のハナが咲く　～



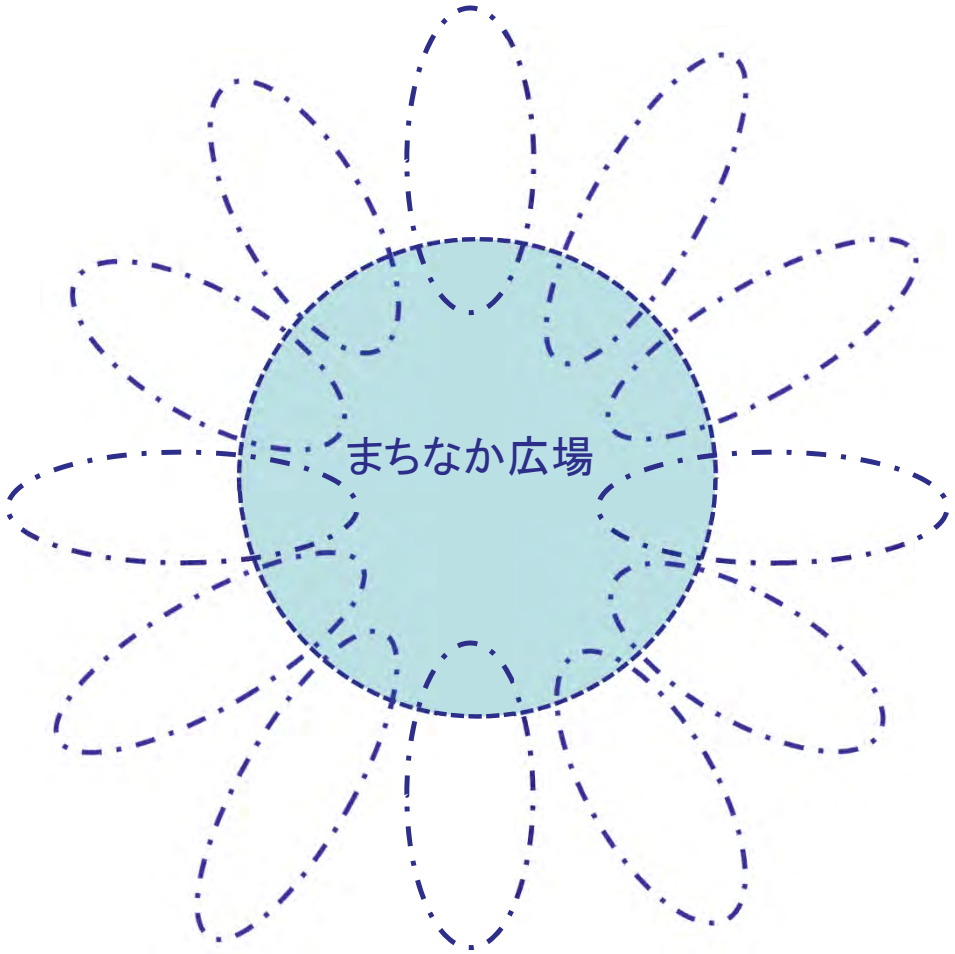
～　365枚のピアノのハナが咲く　～



～　365枚のヒトのハナが咲く　～



～　モヤモヤ　アイマイ　なまま集まり漂う　～



ひらかれた

空気・空間・間柄

「管理」ではなく「運営」、
さらに、「自由」へ

成功の秘訣！？　～　事務所スタッフの姿勢　～

× グランドプラザ管理事務所

○ グランドプラザ運営事務所として
「住民」にかかわる

◎ グランドプラザ等の運営事務所
まちづくり（中心市街地全体）に関わる

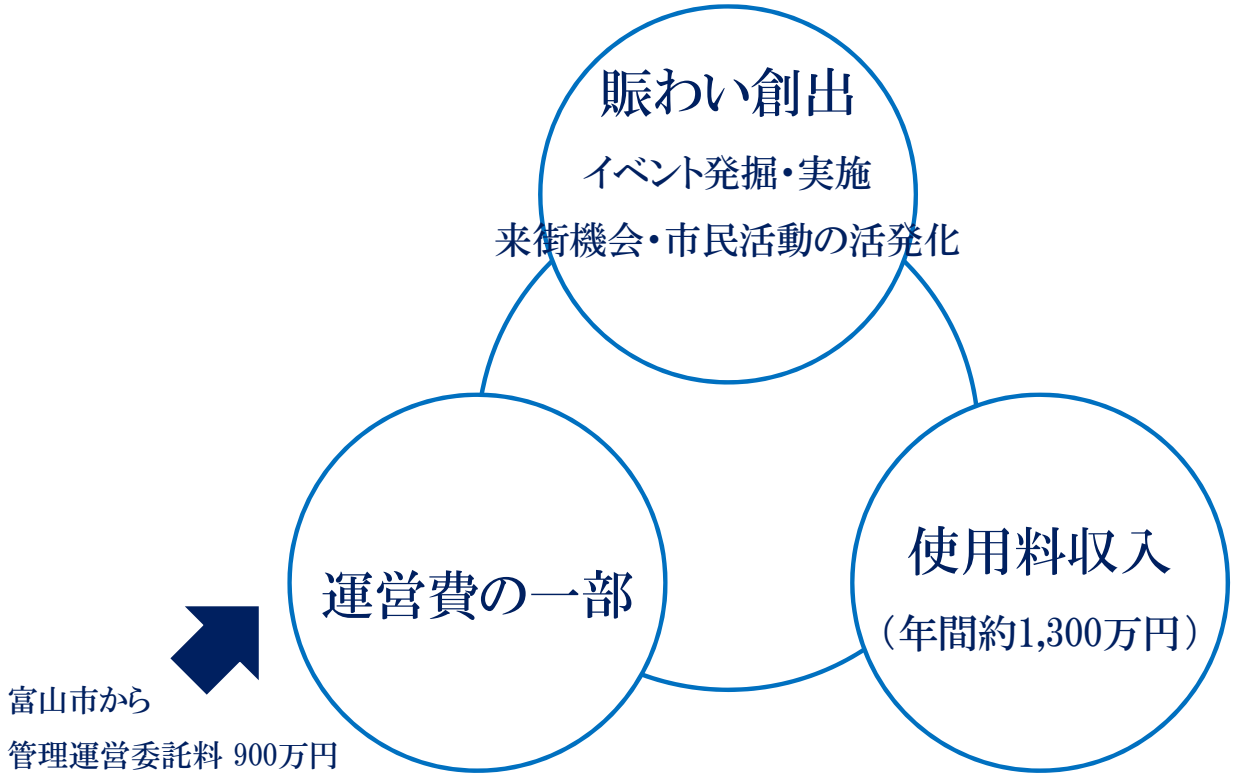
⬇

グランドプラザ等の見守り役へ
主体的に活動する住民への助言・サポート

オリジナル条例の制定

（富山市まちなか賑わい広場条例）

道路指定の解除＆使用料金の徴収



富山市から
管理運営委託料 900万円
管理運営補助金（人件費）2,100万円

公共事業として「広場」を整備・管理運営すれば

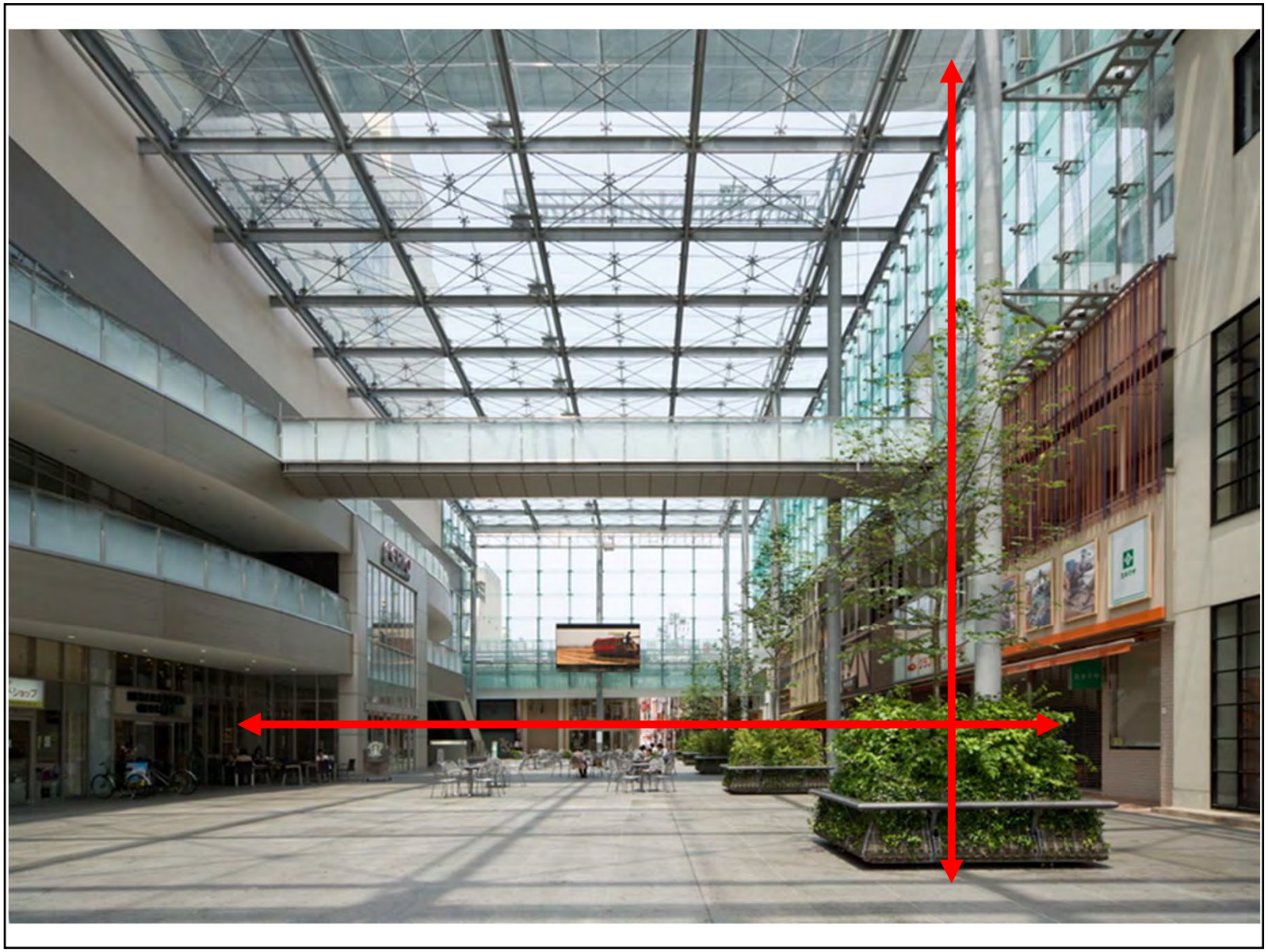
賑わいづくりを行政が「継続的」に支援できる。

うれしいヒトと出会う場所。

楽しいコトと出会う場所。

明快な！

マネジメントコンセプト



広場の必須アイテム

カフェテーブル椅子
&
くつろげる雰囲気
&
心地良い日陰

屋根が在る

風が吹く

広場　とは　中心市街地のなかで突然現れる

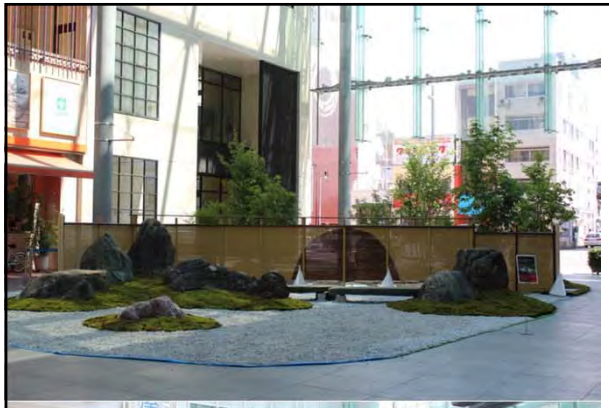
ぽっかりと空いた「大空間」

↓

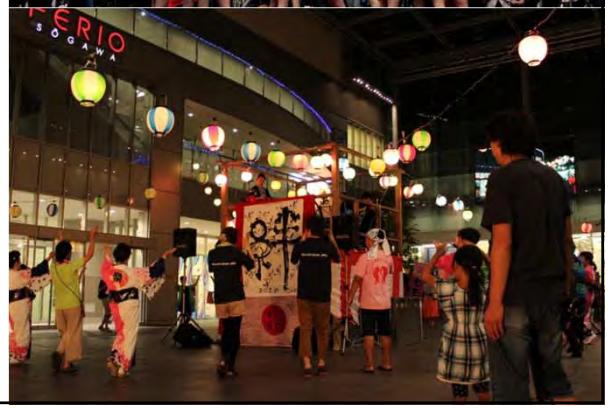
市民が日常的を過ごす場所が　広くなる

↓

思考　や　気持ち　も　広がる！



「自由」な「広場」



「自由」な「広場」

24時間OPEN

24時間様々なアクティビティ

24時間ヒトの目　→　安全

「空間」があるから

「時間」を、シェア

人と対面できる。一緒に居る。

※写真・資料　提供、富山市役所

横につながる場所，広場

サードプレイス

家族と仕事の領域を超えた個々の
定期的で自発的で、インフォーマルな
お楽しみの集いのために場を提供する
さまざまな公共の場所の総称

ネットワークでつくる

自分の居場所、拠り所

サードプレイス

※写真・資料　提供、笑店街ネットワーク

「平日」が「大切」

日常の重要性

すべての備品の稼動が可能

モノが動く　→　生き物になる

空気も、水も、血も、情報も、お金も　動かす。　動かし続ける。

↓

いつも新鮮な風を起こす、起こし続ける。

気分を大切にする、その日の風を大切にする。

座りやすく、居心地の良い → ヒトのいる景色

↓

ヒトを惹きつける → 賑わいのある景色

↑

成功の秘訣！？　～　まちなかに子どもの居場所をつくる　～

母親と子どもの行動範囲内に
まちなか広場がある

→　毎日、違う光景　→　楽しい場所

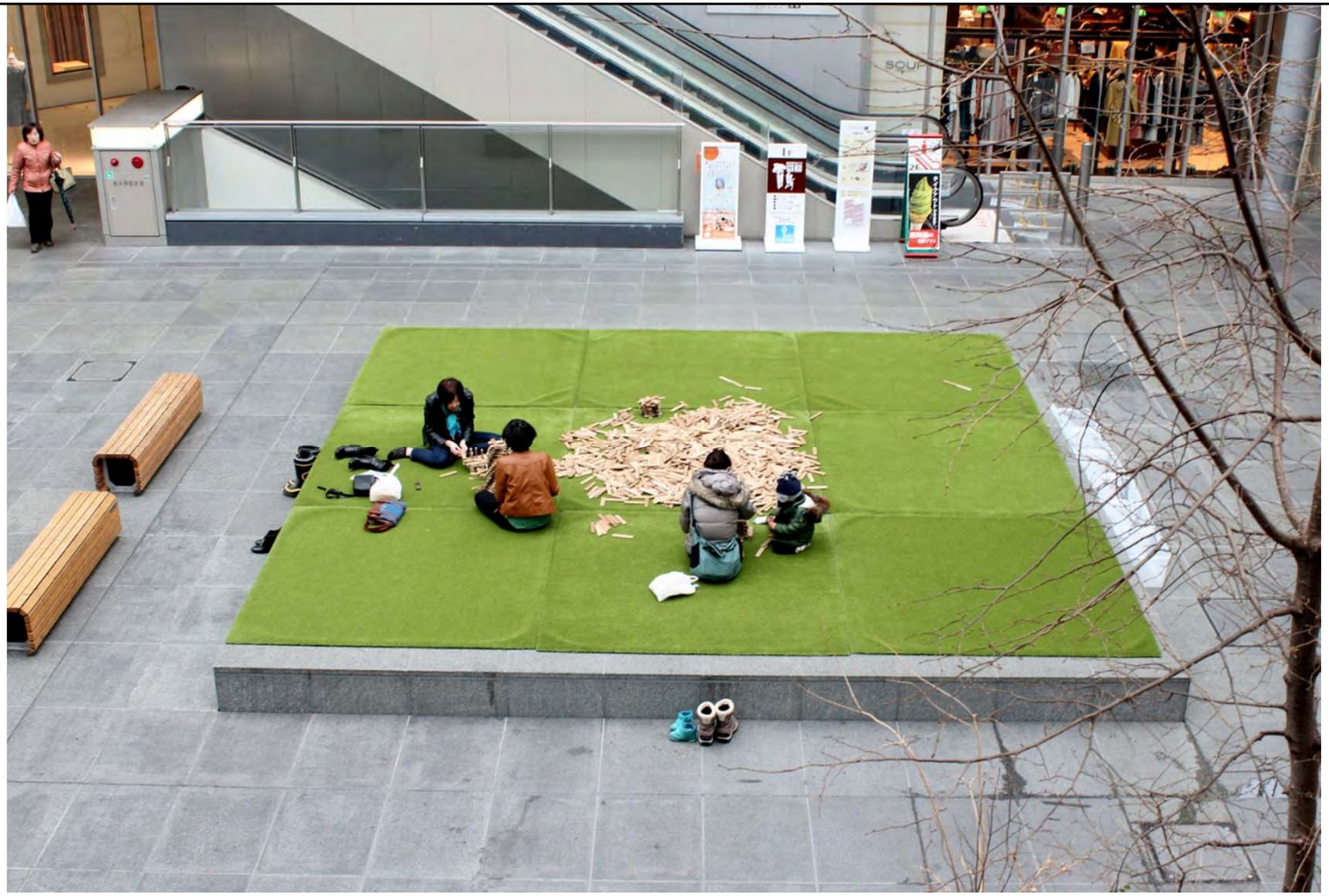
→　子どもが居る　→　シルバー世代が眺める

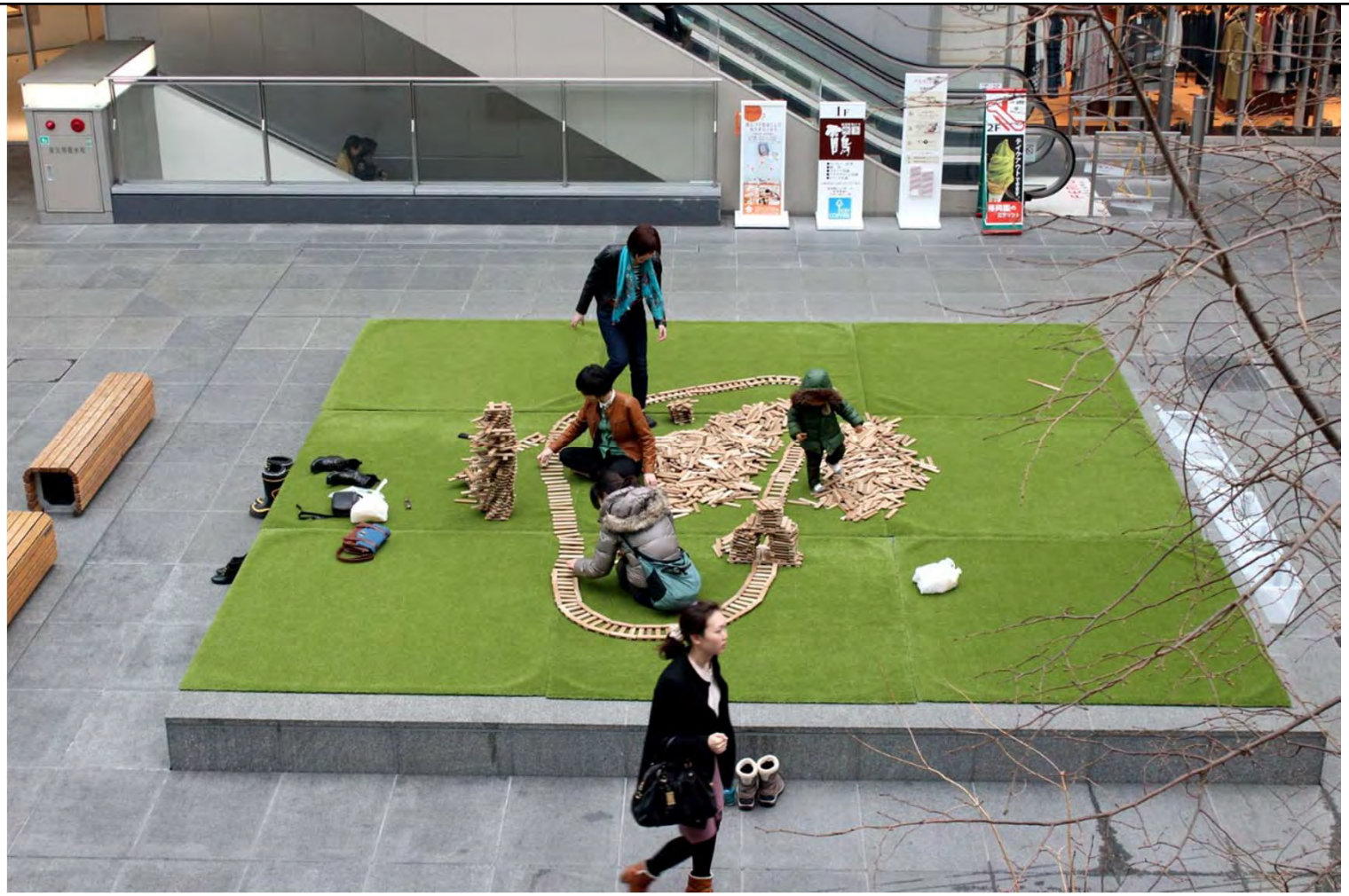
→　多世代の「でかける機会」を創出

都市とは、小さな子どもが歩いていくと、
将来一生をかけてやろうとするものを教えてくれる
何かに出会う、そんなところだ。

ルイス・カーン

本物を魅せる。本物に出会う。





エンジンは，住民

FERIO

自由はその字の如く
「自」が主になって居る。
抑制も牽制（けんせい）も何もない
「自ら」又は「自ずから」出て来るので
他から手の出しようがないとの義である。
自由には元来政治的意義は少しもない。
天地自然の原理そのものが
他から何等の指図もなく、制裁もなく
自から出るままの働き
これを自由と云うのである。

出典：『鈴木大拙の世界』より抜粋

成功の秘訣！？　～　まちなかの、ハレの場　～

発表したくなる、ハレの場

最年少利用者は高校生！最遠方利用者は石垣島！

おめかしして　でかけたくなる、ハレの場

成功の秘訣！？　～　1年前からの予約を定着化　～

1年前から、予約をして

1年前から、ワクワクしている人が

まちなかに、多数出現！

その地域の「いま」（現状）を

映し出す「鏡」（メディア）のような　場所

ＪＲ姫路駅
ＪＲ新駅ビル
（計画中）
大手前通り
フェスタビル南館
みゆき通り
Re-urbanization ～大阪再都市化～

loft
OAZPA
フェスタのバーゲン
6/27
7/4
FESTA
スタンプラリー
2014
6/30
7/27

2015.8.28　横浜

水辺から見る都市づくり

有限会社ハートビートプラン　　泉　英明

都市の魅力⇒風景

物理的空間＋人間の活動

植栽
物理的空間
＋
人間の活動
⇒風景
風
橋脚
パラソル
憩う
散歩する
楽しむ
ビル
遊ぶ
アート
語らう
水
照明
写真を撮る
飲む
自転車を押す
緑化
舗装
寝転がる

大阪都心部の水辺

歴史的資源
文化的資源
アミューズメント資源
大規模な公園
アーバンリゾートエリア
キタ
ミナミ
日本銀行
フェスティバルホール
国立国際美術館
大阪国際会議場
堂島川
大阪市立科学館
中之島図書館
中央公会堂
東洋陶磁美術館
適塾
大阪証券取引所
中之島公園
八軒家浜
南天満公園
大阪造幣局
大阪天満宮
泉布観
OAP
大川
藤田美術館
寝屋川
OBP
大阪城ホール
大阪城
西の丸庭園
大阪城公園
大阪歴史博物館
難波宮跡
土佐堀川
中央卸売市場
川口居留地跡
鞍公園
産業創造館
マイドーム大阪
なにわ筋
御堂筋
堺筋
中央大通
谷町筋
東横堀川
松島公園
木津川
南堀江
アメリカ村
道頓堀川
大阪ドーム
湊町リバープレイス
法善寺横丁
国立文楽劇場
OCAT
なんばパークス
大阪城・上町台地

大阪の地盤沈下、従前の水辺

行政のシンボル拠点整備

八軒家浜（2006年）

道頓堀川　とんぼりリバーウォーク（1998年頃）

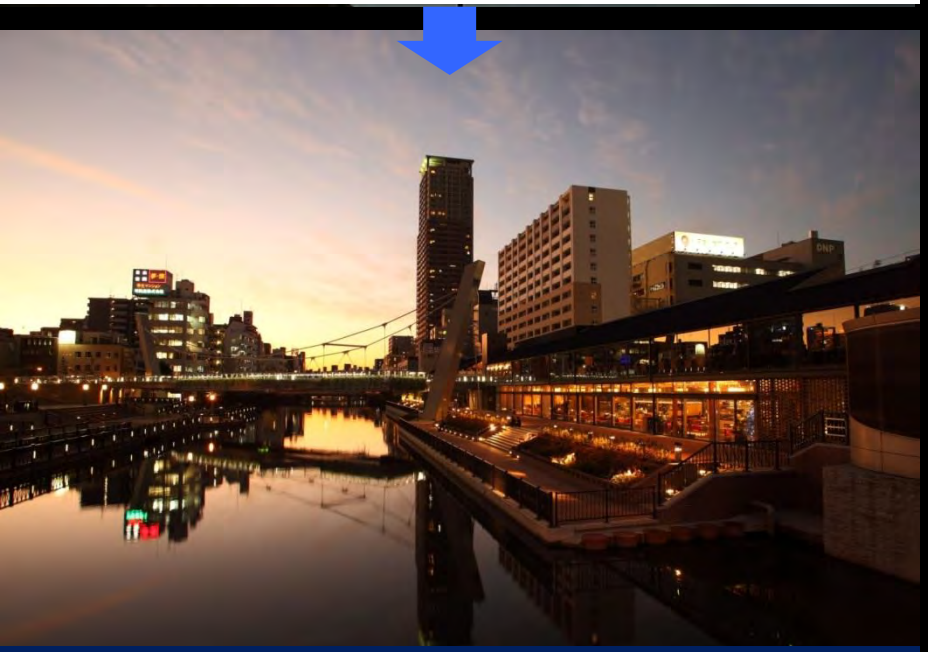
2008年以降

2005年以降

行政のシンボル拠点整備

道頓堀川　湊町リバープレイス（1998年）

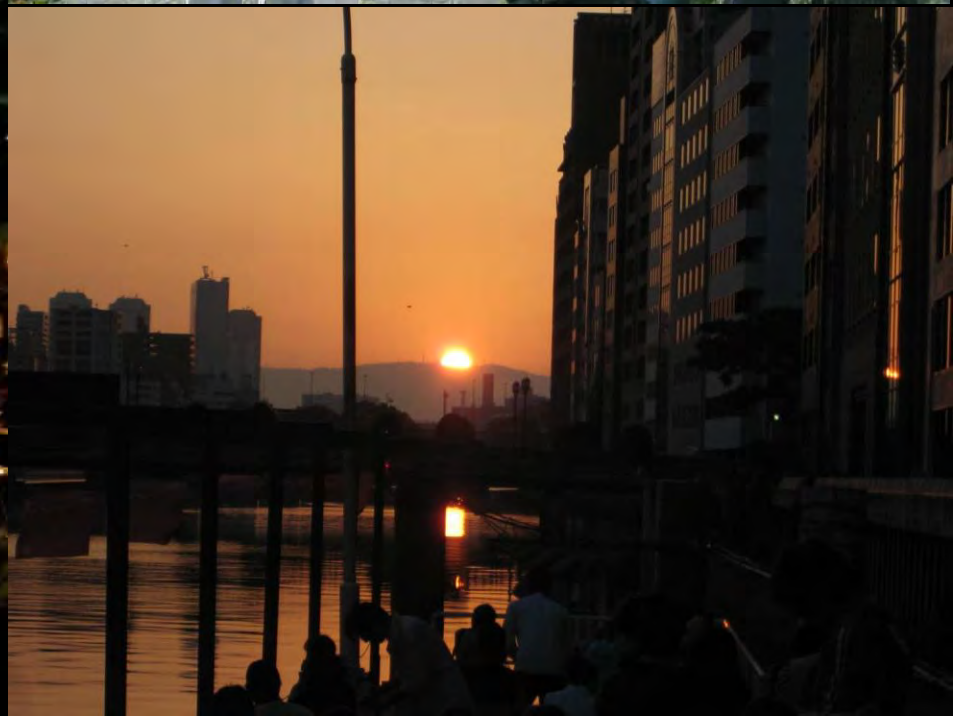
尻無川　大阪ドーム南公園の場所



道頓堀川　湊町リバープレイス（2009年）

尻無川　大阪ドーム南公園（2006年）

市民・民間サイドの活動



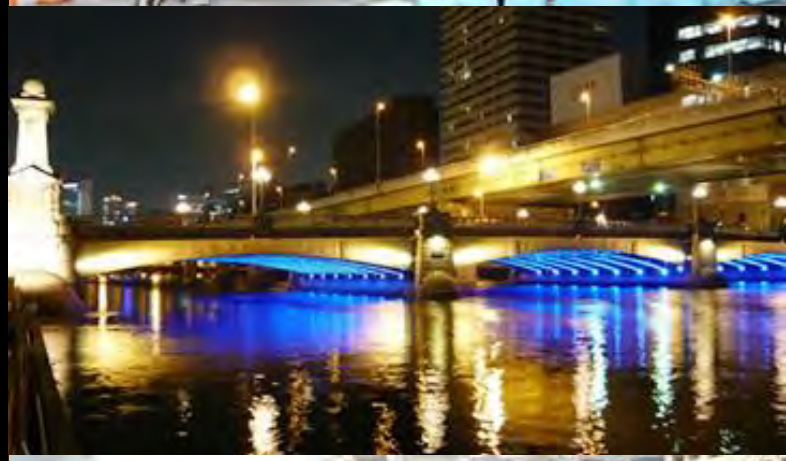
市民・民間サイドの活動

市民・護岸サイドの活動

水都大阪
AQUA METROPOLIS OSAKA

大阪の地盤沈下、従前の水辺

水都大阪2009



水辺のまちあそび

やってみたいを叶えよう！

会場やＷＳの様子（2011･2012）

水都大阪フェス

かんじるプログラム・めぐるプログラム

水都大阪フェス

たのしむプログラム

レポーター・サポーター育成

つなぐプログラム

水都大阪フェス 2011 レポーターズニュース No.010

そぞる ・ かんじる ・ ためしむ ・ つなぐ
プログラム

水都大阪フェス2011大盛況のうちに終了!!!

幸せな雰囲気に包まれた前夜祭

水都大阪フェス2011フォトライブラリー

フェスから日常へ

水辺の公共空間を使う担い手増（使っていいんだ！）
多様な使いこなしのアイディア・ノウハウ
イベント期間限定⇒普段使い・恒常的な利用へ
派遣年限担当者・単年度予算の限界

↓

常設民間主体による推進、水辺エリア全体の運営へ
市民参加に加え、民間投資誘導＆世界発信
許認可窓口や新たな仕組みのワンストップサービス化

府・市・経済界のオール大阪で進める水都大阪の推進体制（2013～）

水と光のまちづくり推進会議

決定機関　行政+民間

【Member】
大阪府知事、大阪市長、経済３団体のトップ、有識者

【Role】:意思決定機関
■パートナーズの運営者の選定、支援、評価

アドバイザリーボード（専門助言機関）
【構成】 経済人、学識経験者、専門家

方針提示
資金提供

規制緩和

水都大阪パートナーズ

公募

【Member】
プロ人材・民間企業出向者等で構成

【Role】：実行組織
■民の投資を呼び込む活動
・シンボル空間づくり、ビジネスモデルづくり、エリアマネジメント、情報発信

執行機関　民間

支援

水都大阪オーソリティ
（水と光のまちづくり支援本部）

【Member】
府・市の合同事務局（17名の府市職員で構成）

【Role】：行政の一元的窓口
■公民協同のコーディネート
・占用主体、行政手続き

支援機関　行政

水都大阪パートナーズ始動　2013～

①プロデュース

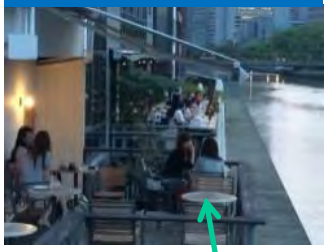
②ファシリテート

③プロモーション

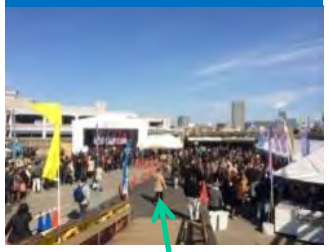
①プロデュース

アイディアやお金を持つ企業や市民

水辺建物オーナー



拠点事業者



舟運事業者

市民プログラム

活用

水都大阪パートナーズ

覚書

水都大阪オーソリティ

プロデュース

占用・規制緩和

使用

河川

港湾

公園

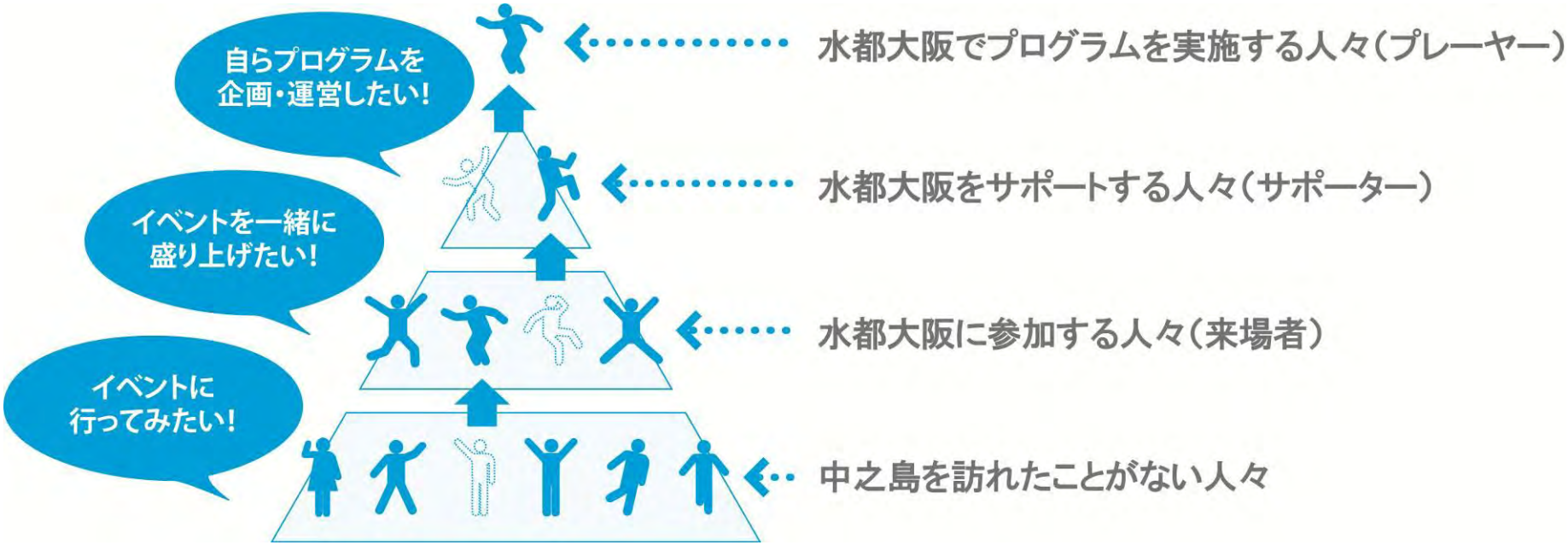
道路

民間土地建物

使われていない・川沿い・パブリックスペース

関心度に応じた参加の多様性を確保

水都大阪というイベントを通じて
自ら水辺を日常的に使いこなす
人々が生まれている



広報活動

・水辺拠点と連携したプロモーションの強化と魅力案内
　冊子、WEB、SNSを組合せたメディアミックスによる
　情報発信

フリーペーパー

サイトアクセス
　約82万セッション

観光強化・インバウンド集客

・大阪観光局との連携
・海外雑誌にアプローチ
・姉妹都市連携イベント・ＰＲ
・多言語WEBサイト、予約システム

コミュニケーション活動

他都市との交流・ビジネスマッチング・視察受入・提案受入

全国都市水辺関係者会議

視察・現地案内

水都大阪パートナーズ始動　2013～

The Japan Times

CULTURE

Giant duck to make its return

OSAKA

A giant rubber duck will make a triumphant return to Osaka after having survived serious hardships including drowning and being scalped during its global tour.

The 19-meter-high inflatable bird, designed by Dutch artist Florentijn Hofman, will be one of the main attractions at the Aqua Metropolis Osaka festival. The festival runs through most of the month, but most of the events will occur Friday along Higashi River and the city's waterfront.

Hofman's art project debuted in Japan at the festival in 2006 before continuing its tour around the world. It was reported that the duck was stabbed more than 40 times during a port call in Belgium the same year, while in Hong Kong it defined overnight to the shock of local bird watchers. But the tough duck will return to Osaka for a week-long encore tour beginning Friday.

If giant rubber ducks aren't your thing, you can duck out for a cold drink at the annual festival offers a selection of beers from around the world. Fresh Bub from the city's central cooler will be available at the Market Resort area, where Osaka's top-notch restaurants will open temporary stores.

Other attractions include picnic areas where toy making workshops will be held.

Aqua Metropolis Osaka 2013 Festival will take place mainly in Nakanoshima Park in Kita-ku between Oct. 11 and 14 from 10 a.m. till 9 p.m., and at the Nakanoshima Gate area between Oct. 11 and Oct 27 from 11 a.m. till 10 p.m. Starting times for programs vary depending on the day. No entrance fee is required. For more information, visit www.osaka-info.jp/en.

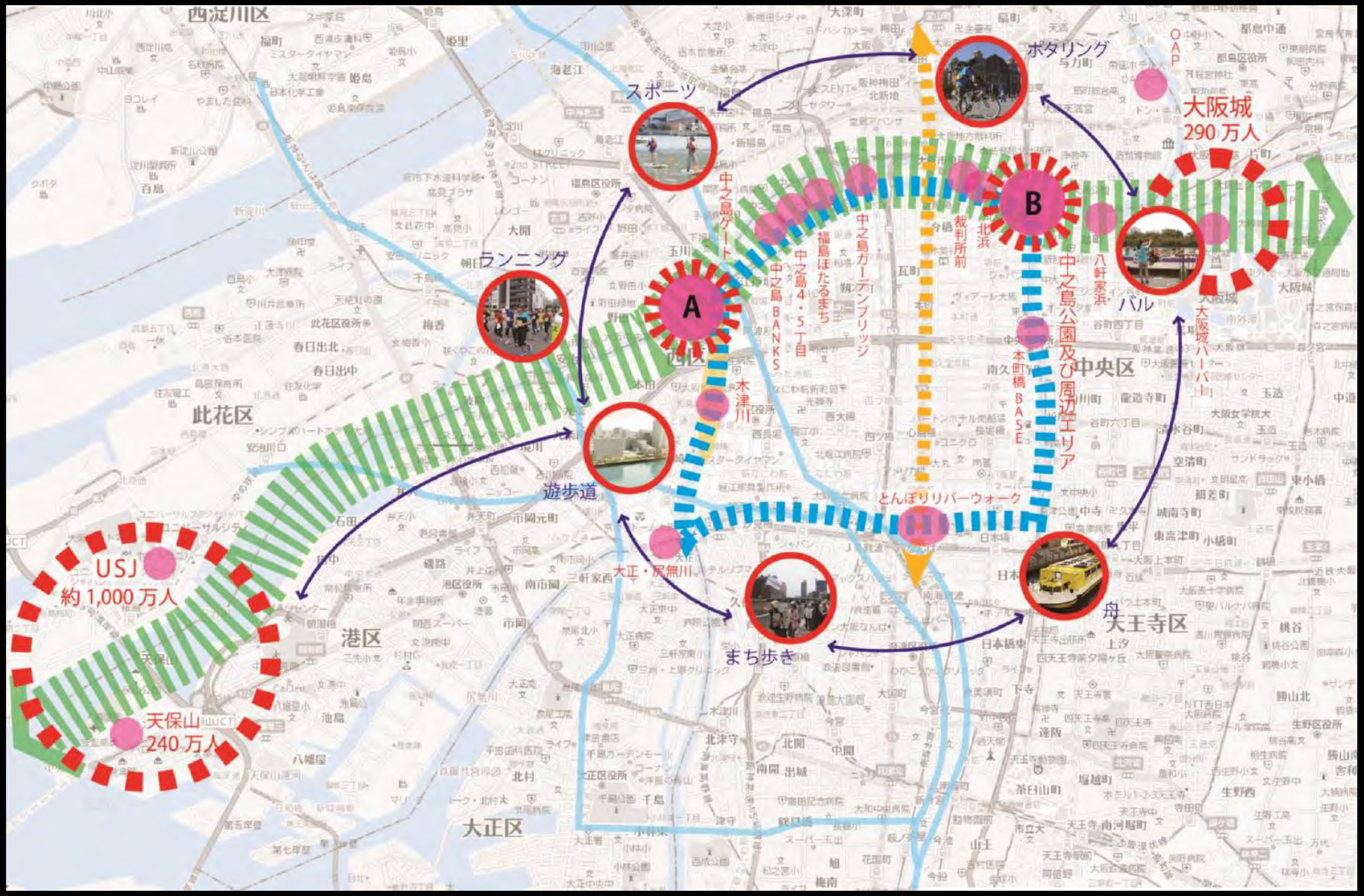
FM OSAKA

日常の風景へ

生活ヨガ研究所
River side YOGA
リバーサイドヨガ
River Side Yoga
「リバーサイドヨガ」
AM8:00～
毎週水曜日
毎週土曜日
(祝日除く)
PM14:00～
第2.4土曜日
参加料 500円
(小学生無料)
レンタルマット 200円

水辺１７拠点の川の駅化（水陸両用アクセス）

水都の川沿いの１７拠点の「個性ある川の駅」化



パートナーズ＆推進会議のメンバー　2014年度から増強！

中之島公園/オープンテラス

役所南 土佐堀川沿いの公園を活用したレストラン/グリーンマーケット

３か月⇒５か月へ

中之島GATE/中之島漁港

常設のフィッシャーマンズマーケット、海と川を結ぶ都心周縁のリゾート

中之島GATE（サウスピア）

社会実験　2012

社会実験　2013

中之島漁港　⇒常設へ

イベント→常設の段階的プロセス
インフラ投資・回収の事業モデル

中之島漁港
FISHING PORT

2015.2.18開港!!！

安全航行・水面活用の仕組み

大阪水上安全協会

各船着場利用予約状況
10ヶ所の公共船着場統括管理

NPO法人大阪水上安全協会
（航行安全、公共船着場統括管理）

船舶の事故防止対策などを推進し、河川運行の安全に寄与することを目的に設立。

◆設　立　　：平成16年8月5日
　　（昭和61年3月　大阪水上安全協会として発足）
◆会　長：久ノ坪　宏司　（大阪水上バス株式会社　取締役社長）
◆加盟数：46社・団体　（ 会員数54）
◆事　業：①河川における安全恩恵の普及に関すること
　　②河川における事故防止対策推進
　　③河川水上交通の振興に関すること
　　④前各事業を達成するために必要な調査研究等の事業

多様なクルーズの統合発信の仕組み

大阪シティクルーズ

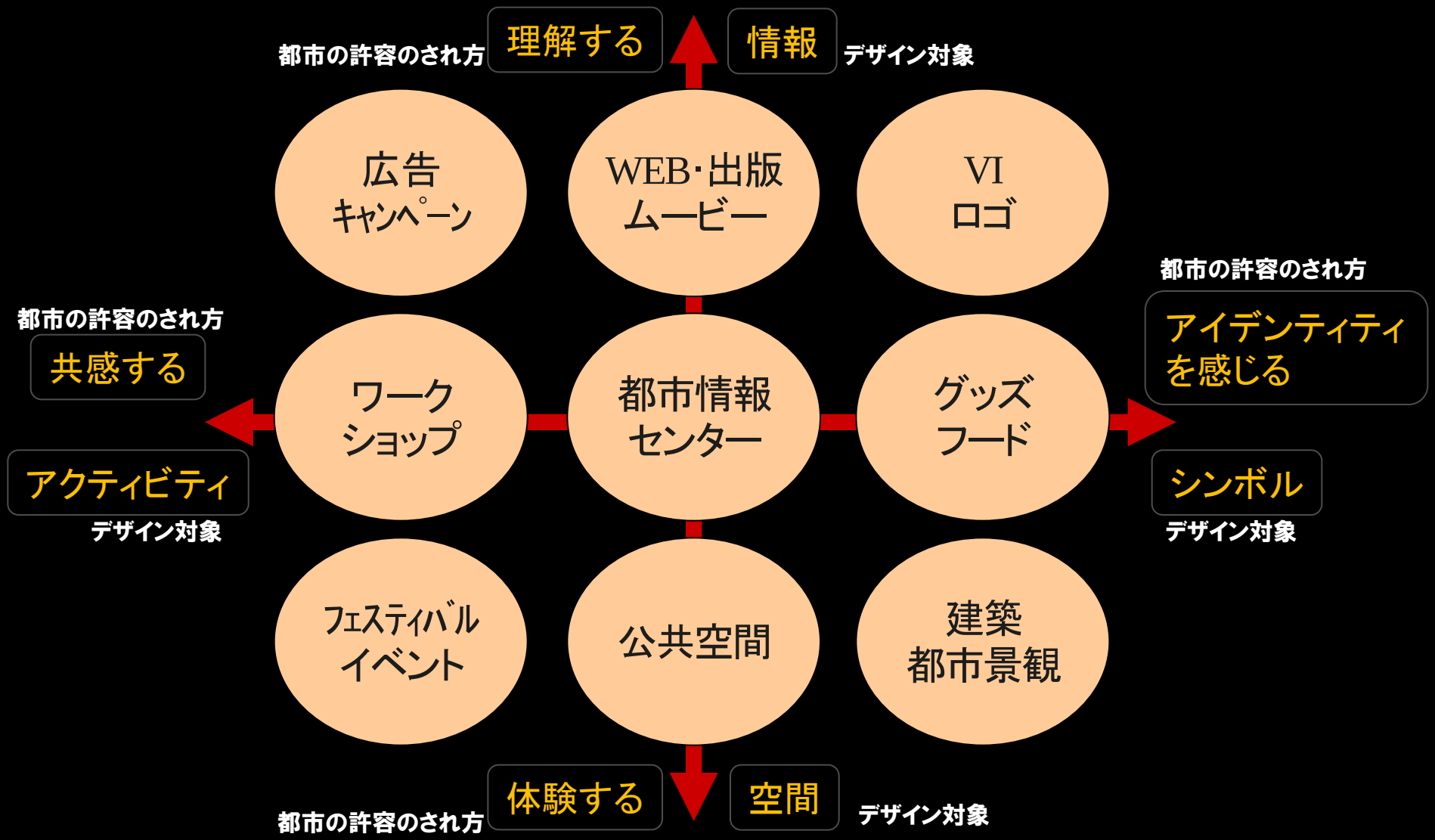
大阪シティクルーズ推進協議会（舟運・観光・メディア等）

大阪の魅力を発掘、再発見して、その価値を高めることを目的に大阪の舟運事業者だけでなく、水都大阪の再生を願う市民や企業、行政が手を携えて設立。

◆設　立：平成19年10月25日
◆会　長：久ノ坪　宏司（大阪水上バス株式会社　取締役社長）
◆会員数：50社（団体）
◆事　業：①水都大阪再生に資する資源の発掘、再発見等のまちづくり活動
②水都大阪再生に関する調査研究
③大阪シティクルーズの企画推進

クルーズ商品一覧マップ
加入する舟運事業者

都市が意思表示する／コミュニケーションポイント



シビックプライド研究会より

KD Panorama-Rundfahrten

期待されること

・日常アクティビティでシーンをつくり世界に発信

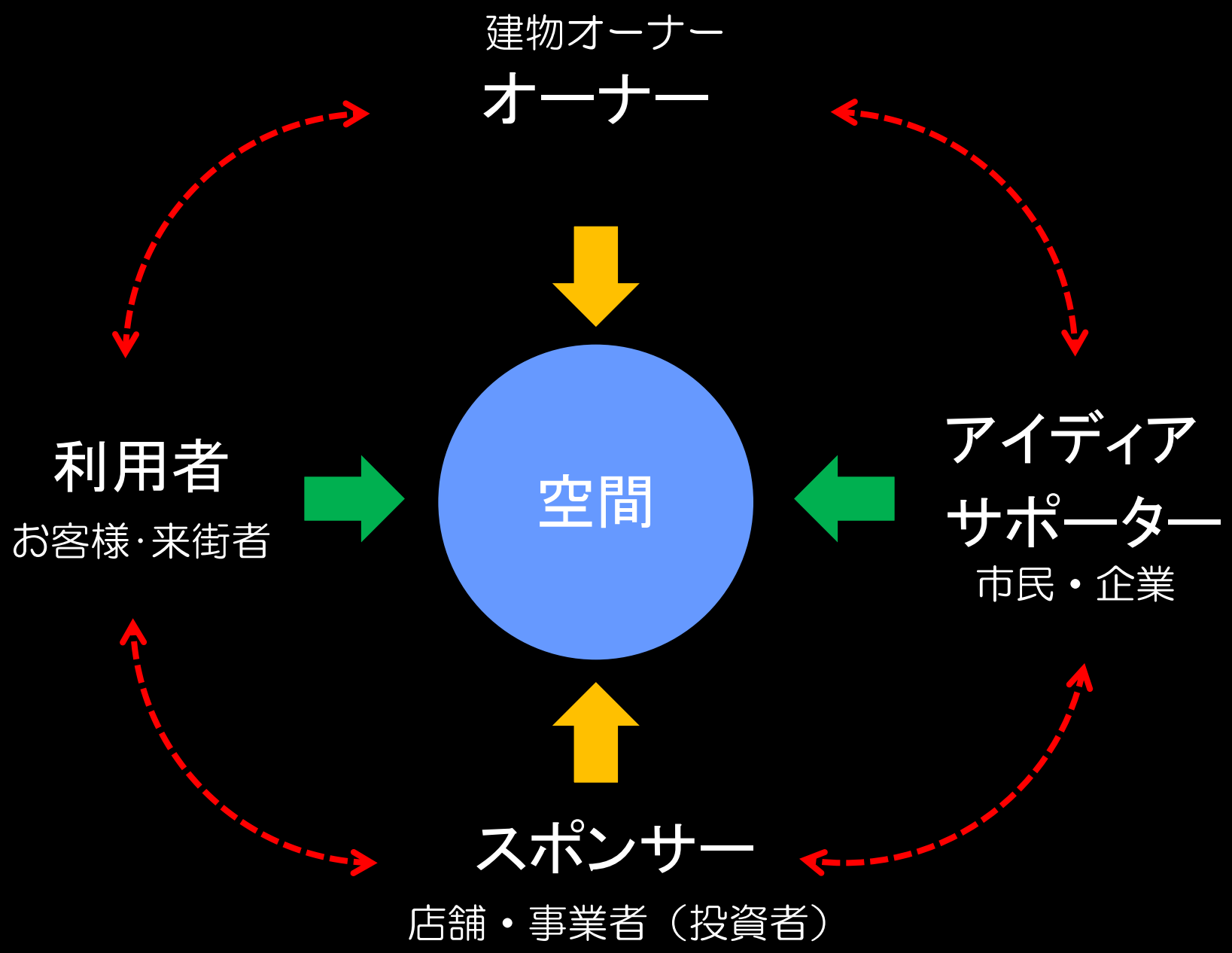
・都市横浜の意思表示

・市民・企業＆来街者、多様な関わり方

・海と川＆陸の結節点・周辺の個性エリア連結

・商業＆市民活動のバランスのとれたマネジメント

都市空間のつくり方



新市庁舎の【活用】を考えるシンポジウム

～横浜市新市庁舎は街を活性化できるか？～

（第 1 回シンポジウム）議事録

【日　　時】　平成 27 年 8 月 28 日（金）18:30～21:00

【場　　所】　横浜市開港記念会館 講堂

【主　　催】　横浜新市庁舎の活用を考えるシンポジウム実行委員会

趣旨説明（18:30-18:40）

○司会（加藤玲菜氏）

皆様、本日はお忙しい中ご来場いただきまして、誠にありがとうございます。これより、『新市庁舎の活用を考えるシンポジウム』を開始いたします。本日司会を務めさせていただきます、加藤玲菜です。どうぞよろしくお願いいたします。

それではまず、今回のシンポジウム開催の趣旨につきまして、ご説明させていただきます。横浜市の市庁舎は、現在の関内駅前から北仲通(きたなかどおり)地区に移転することが昨年秋に決定し、2020 年＝平成 32 年のオープンをめざして、設計と工事を一括して行う事業者の募集が 6 月から始まりました。事業者は 12 月頃に決まる予定で、来年早々から建物の設計がスタートします。新しい市庁舎には、「行政機関としての市役所」や「議会」のほかに、市民に親しまれ、訪れる人々が「横浜らしさ」を感じられる空間が整備されることになっています。

そのため、みなとみらい線馬車道駅コンコースと直結する位置に「祝祭性・おもてなし」の場となる「屋根付き広場」を設けられ、大岡川に面した部分には「水辺の憩い空間」が整備され、建物の足元部分には、これらとの関係性を考えながら、商業や市民利用施設などが配置される計画となっています。

これらの空間が活き活きと使われた時、新しい市庁舎は、「横浜のチャレンジ性」をお見せする場、国内外のお客様がいらっしゃる「ハレの舞台」そして、私たち横浜市民が「活動し、交流する場」となることが出来るでしょう。

新しい市庁舎の低層部が、そのような「横浜を象徴する場」「横浜にしかできない先進的な開かれた場」となるためには、今この時点で関心を持つ市民や様々な活動団体、企業などが、アイデアを出し合いながら、「真に街に開かれた空間」の様々な活用やマネジメントについて、横浜市と一緒に議論を始めるべきと考えます。

本日のシンポジウムは、そういう思いをもった　まちづくり団体、商店街、市民活動団体、経済団体と横浜市が企画したものです。このシンポジウムを、新しい横浜市庁舎の「活用」や、関内地区など周辺地区の「活性化」について、官と民とが手を携えて考える場づくりの第一歩にしたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

新市庁舎の現状と今後の進め方（18:40-19:00）

○新市庁舎の現状と今後の進め方（横浜市新市庁舎整備担当部長　中川理夫氏）

○新市庁舎デザインコンセプトブック（横浜市都市デザイン室　桂有生氏）

ゲストによる公共空間、水辺空間の賑わいづくりの事例紹介（18:40-19:00）

○富山グランドプラザ（NPO 法人 GP ネットワーク理事　山下裕子氏）

まず、この会場が横浜らしくて素晴らしい。私は横浜が大好きで、何度も訪れている街。現在は、紹介にあったとおり、福岡の久留米に活動の拠点を移して活動していますが、以前勤めていた富山市のグランドプラザという広場について、今日は事例紹介をさせていただきます。

今日私がお呼びたていただいたのは、このコンセプトブックの冒頭に書いてあります、「人・自然・まちがつながる、開かれた」という言葉についてですが、広場という場所によって、街と人と自然とがつながるという経験をしましたので、少しでもお役に立てればと思います。こちらが富山のグランドプラザという広場です。屋根がかかっていますが、扉はなく屋外空間です。ですので、風が良く通ります。

特徴としては、北陸富山は雪や雨が非常に多い土地なので、屋根がかかっているというのが非常に大事でした。もともとは、大きな再開発事業でできておりまして、グレーの敷地の中に富山市道が３本通っていました。その３本の市道を、グランドプラザの左側にある百貨店と右側の駐車場を建て替える際に、道路である必要がなくなるため、市道を真ん中に集めて、百貨店のバックヤードとして整備する予定でした。せっかくこんないい場所に 1,400 ㎡の都市空地

ができるのに、バックヤードではもったいないということで、広場を作る計画になりました。図面を見ていただくと、真ん中の緑色の部分が広場で左側のオレンジの部分が百貨店、黄色い部分が百貨店以外のテナント、右側の青い部分が駐車場です。富山は非常に車社会で、コンパクトシティ、公共交通で有名な街なのですが、よく富山市役所が、できていないからこそチャレンンジしていくということで、公共交通に力を入れているという説明をされています。本当に車を家族の大人の人数＋１台持っているような街で、プラス１台というのは軽トラックです。富山は兼業農家が多い街でして、街に来られる際も、ほとんどの方が最初は車で来ているような状況でした。ですので、車で来られた際に、最初に通りかかる場所が広場になるようにしています。

こちらが外観です。広場整備後の３年後に、LRT も整備されまして、「グランドプラザ前駅」という電停ができました。ですから、公共交通から徒歩１５歩くらいで広場に入れるという環境を整備しています。印象的なのが、この「グランドプラザ前駅」という電停名なのですけど、通常であれば、名前を売っちゃって百貨店の名前をつけるということも考えられたと思うのですけど、富山市役所がすばらしいのは、ネーミングライツをせずに広場の名前の電停名を付けたことで、グランドプラザの知名度が一気に上がったと記憶しています。

広場を作ろうとしている都市は非常に多いのですが、私は決して広場空間が

賑わいを生むとは思っていません。ですが、人が良く通る場所を、誰にでも開かれた広場として、そこが活用されると賑わいが生まれると思っています。今の富山のグランドプラザは、左側の百貨店と右側の駐車場の間を広場にしていますが、これが成功のもとだと思っています。私はもともと建築の出身なのですけど、もし、建築的に駐車場ビルと百貨店ビルを一体的に整備して、百貨店の奥座敷のようなところを広場にするプランであったなら、私は、今日ここに呼ばれていないと思います。やはり広場を目的とするのは、非常にハードルが高いと思っています。駐車場に車を置いた方の一番大きな目的が百貨店に行くことですので、そこに行く際に通りかかる場所を広場化して、その広場を常に楽しげのある空間にしたことで、少し帰りに寄ってみようかとか、今日は予定がないから広場に行ってみようという市民が増えた結果が今なんじゃないかと思っています。広場という場所では、歩くということと人と対面するという機会が非常に多く生まれます。今日の桂さんの説明の中で非常に印象的だったのが、街の結節点という言葉が出てきましたが、この街の結節点という言葉が自然に出てくる横浜というのは、非常にみなさん、歩いて暮らしていらっしゃって、街の中にすでに人間関係がある街なのだなという印象を受けました。結節点という言葉を聞いた際に、富山ではたぶん交通結節点なのですよね。公共交通の乗換えということを意味づけてしまうのですけれども、そんな車社会の富

山で、歩いて通りがかる場所ができたということが、広場を作ってよかったと思っています。公共交通と公共広場のセットが非常に大事だと思っていまして、そういう意味では今回のプロジェクトは、最寄りに駅があるということで、素晴らしい計画だなと思っています。これから増える交通弱者の皆さまが行きやすい場所を、行きたくなる広場にするというのが非常に重要ではないかと思います。その時に、グランドプラザが一番使われている用途というのは、LRT をはじめ、バスなどの公共交通機関が一番多く通っているエリアに広場があるので、待合場所みたいになっています。公共交通を待つ間に広場があって、そこで過ごされる。その時に、バスが仮に行ってしまっても、まあいいかと思えるように過ごしていて、居心地のいい空間があるというのが、富山の今の豊かさなんじゃないかと思います。

　また、待ち合わせというのも非常に多い場所で、富山で営業を考えてらっしゃる方がいましたら、ぜひ、グランドプラザに座っているのが一番だと思います。非常に多くの方が通りかかって、いろいろな人に会える場所になっています。これは平日の朝 9 時半の光景です。特に大きなイベントはないのですが、10 時に百貨店が開店するのを待っていらっしゃる方がそれぞれ、居心地よさそうに過ごしているのが印象的です。いま、グランドプラザという場所を評価していただく際に、よく日常の賑わいというのを非常に評価していただくのです

が、こうやって相変わらず人がグランドプラザにいるのがいいなと思います。

富山市はたった 30 万人都市ですが、30 万都市でもこれだけの人がいる空間を作ることができなのが良かったのかなと思います。ここからは概念的な話になりますが、広場ができて何が街の中で起きたのかを考えてみますと、街の中なので、当然様々なアクティビティがすでにあったわけですが、通りを介していたり、お互い建物の中で行ったりしていると、誰がどこで何をしているのかはわからない訳ですけれども、同じ面積を広場化すると、直接的に知りあいでなかったり、直接会話をしなかったとしても、誰がどんなことをしているのかというのがぱっと一目で見える状態を作るのが広場だと思います。街の中に様々なアクティビティがあるのですが、広場という場所をメインに使ったり、待ち合わせの場所に使ったりということで、広場という場所を核として人々が活用することで、緩やかな横のつながりができている気がします。グランドプラザは年中無休で 365 日運営しておりますので、毎日毎日たくさんのアクティビティが起こる状況を目指しています。

これは実際に起きたピアノの活用なのですが、グランドピアノを運び出してライブを何回もやっています。やはりクラシックやジャズは、空間が音楽を選んでしまう部分もあると思うのですが、広場という場所は非常にニュートラルな場所だと思っておりまして、特にグランドプラザはガラスと石畳でグレーを

特徴とした、非常にニュートラルな空間に徹することができたので、どんな音楽でもそれなりに様になるというのが非常に良かったのかなと思っております。

　また、たくさんの人に来ていただける状況で、出張やビジネスで来られるかたもいらっしゃいますし、イベントの主催者がイベント時だけではなく、打ち合わせなどにも来られていて、いろいろな方がいろいろなことをする場所になっています。

　非常に良かったと思うのが、人が何かをし始める時というのは、最初から決まっているわけではなくて、何か思いやアイデアを持っていて、あいまいな状態なまま、会議などではなく、広場という開かれたニュートラルな場所でたまたま出会った人に話したり、たまたま話していくうちに形になったりしていく、フレームづくりになっていくような場所でもあるのかなと思っています。そうした流れというかムードを作っているのが、今日のキーワードにもなっている開かれた場所であるおかげなのかなと思っています。

　屋外空間なので、本当に２４時間空いているのですけれども、朝から、明け方までたくさんの人々がいて、朝、散歩をしている人から、バイトの面接をしている人がいた時は、開かれたオープンな場所で面接をされている人がいて、なかなかおもしろいなと思ってみていました。いろいろなアクティビティが生まれていまして、そういった中で自然と間柄が生まれる場所なのかなと思いま

す。

　グランドプラザは今年で８年目なのですけど、最初は特に意識をして、管理ではなく、運営をしていこうということを心掛けていました。この運営というのは、グランドプラザという敷地のエリアの中だけを考えるのではなく、街が楽しくなるようなことには何でも首を突っ込むようなスタンスで、他の施設のイベント情報をお伝えしたり、街のおいしいランチ情報を広場のホームページで紹介したりするなど、とにかく街の楽しみが増えていくような努力をしていたように思います。そういった活動ができる、もともと道路を集めた場所が広場になったというのは、条例を作ったことが大きいと思っています。条例を作ることで、本来道路であれば、警察の許認可等が必要な場所でも、一回も警察のお世話になることなく、許認可も必要なく、グランドプラザの運営の３分の１を賄っている使用料がとれるという状況を作れました。条例を作れるのが、市役所という行政セクションになりますが、私は、行政が力強く広場づくりに関わることの重要性をお伝えしています。

　いま、３分の１を使用料収入で賄っているというお話をしましたが、グランドプラザの運営に全体で約４千万円かかっています。富山市が広場を作るときに、なぜ広場を作ったのかという質問に対して、賑わいを作りたいと思った際に、イベントを企画実施する予算付けということをよくすると思いますが、富

山市はイベントをしたくなる場所を整備して、イベントをしやすい状況を環境として継続して作っていると答えていました。おかげさまで、年間１３０件のイベントが実施されていますし、最初の頃は人がいないために移動販売車の出店もあまりありませんでしたが、今では１日１店舗以上は出店していただける状況になりました。こちらはキャッチコピーとして考えた言葉ですが、こういったキャッチコピーを作る際に、お金を使って代理店に頼むということではなくて、関係者一同が輪になって４時間くらい考えました。この４時間くらい語り合えた時間が良かったのではないかと思っています。広場という場所を運営し始めると、年間１３０件くらい使われるようになる訳ですから、とたんに外部の人と接する機会が圧倒的に多くなるわけですけれども、その時にいちいちジャッジしていく際に、それぞれがまちまちの判断をしていると非常にぶれた運営になってしまうのですけど、この場所をどうしていこうかということをしっかりと共有できていたことが良かったと思います。明確なコンセプトを最初から持っていたことで、非常に走り続けることができて、賑わいづくりができそうな気がします。

　空間サイズとしては、１対１が良いと思います。テーブルや椅子が置いてあって、光が大事だと思います。風が吹き抜けることが非常に良くて、自然と出会うということで、都会の中で出会える自然というのが大切です。広い空間が、

みなさんがのんびりできて、市民のみなさまの視野が広がったと思います。２４時間オープンなのですが、２４時間人の目があることで、おかげさまで安全に運営ができています。最高は、２，０００人でワールドカップのパブリックビューイングを行いました。

○水都大阪（一般社団法人水都大阪パートナーズプロデューサー　泉英明氏）

水都大阪というところの理事をしながら、市民の立場の NPO でいろいろな活動をしています。いろいろな街に行くときに魅力的だなと思う空間というのは、たくさんあると思うのですが、物理的な空間というのはもちろんそうですが、いろいろなアクティビティがされているか、また、それが公共空間でされているのかというのが、僕の中では大切だと思っています。例えば、これは中之島公園なのですが、ここでいろいろな人たちのアクティビティがあって、空間もある。おそらく、人が全くいなかった空間で、みんながこういう使い方をしていいのだとか、こういう使い方をしたいという雰囲気を作ることが大事だと思っています。

もともと大阪城が一番右にあって、そこから湿地だったところに堀を掘って、淀川があるのですが、大阪はこんな感じで発展してきた街です。多くの水都があったのですが、ほとんど埋め立てられてしまって、いまはここだけになって

しまいました。一周水の回廊で回れるようになっています。この川を左側に行くと海があったり、USJ があったり、京セラドームがあります。相当な地盤沈下をしていまして、もともと本社をどんどん東京に移していったりしました。公園もないし、川はあるのですけど、川の周りは殆どがブルーテントという状況でした。数年前までこういう状況で、私でも歩くのが怖い状況で、女性一人では歩けない状況でした。市役所の前でもそんな感じでした。中之島公園も一番いいところが、入れない状況ですとか、道頓堀もあまりにも臭いため空気を入れるためにこういう噴水を作っています。完全に建物が水辺に背を向けているという状況です。

これではまずいということで、２００１年に大阪の苦しい経済界の方々が大阪のアイデンティティは何かということを考えたときに、水辺の街をもう一回再生しようということになりました。水辺から再生していこうということで水都大阪が始まりました。大阪の一番シンボル的な川の拠点を再整備したりしつつ、横浜でもそうだと思うのですが、市民の活動がゲリラ的にされてきました。水辺ランチといって月に１回集まってお昼を食べる企画などを行っています。

また、合法的に川の上に浮くフローティングレストランというものを作っています。また、この写真は、造船所の空いたところにオーナーさんが３０年間アーティストに無償で貸し出していて、アートの拠点にしようということで今、

非常におもしろい場所になっています。下の写真は、２階建ての船になっていて、フローティングということで、１階はバー、２階はライブハウスになっているなどいろいろな活動がされています。これは北浜テラスというのですが、大阪の中心部の北浜というところにありまして、堤防で分断されていたところにテラスを作って水辺をつなげていこうという取組です。

テラスを作る部分は公共空間なので、行政と民間できっちり覚書をして使っています。そういういろいろな活動を官民でやっていますが、喧々諤々やっていまして、官はきっちりとハードを整備して、民間はゲリラ的におもしろい使い方を提案していく。それに官が協力してくださってできている部分もありました。そういうところを一緒にしてひとつの大きなまちづくりイベントになったのが水都大阪２００９というイベントです。中之島公園というシンボリックな公園で、一切イベント会社に外注せずに、市民の皆さん手作りで作っていこうということで実行委員会が立ち上がって、企業からも行政からも出向の方が来られて、全く人が来なかった空間を市民が使える空間だということを都市として魅せていこうということでやっていました。市民同士がこれに関わることでネットワークができるなど、非常に大きな成果がありました。

それからも続けていきまして、使われていない状況があったので、市民団体や企業が、こういう風に使いたいというのを公募して使っていただきました。

使っていくといろいろトラブルや問題が出てきますので、どう運営していけばいいのかということを、その場その場で考えてながらやっていました。市民の方が毎年、１０００人単位で企画やボランティアで参加してくれて、市民が市民をもてなすとうい状況ができてきていて、水都大阪２００９の時はなかなかぴんと来てなかった部分もあったのですが、徐々に口コミなどで広がっていきまして、水都大阪が今ではアクティビティとして定着してきています。

　で、それを徐々に広げていこうという動きがでてきまして、市民活動だけではなく、それを恒常的な活動にしていくためには、企業の参画、民間投資をしっかりと入れていく必要があるのではないかとか、アイデアとかノウハウを引き続き継続的にできる主体や組織がいるのではないかということになりました。

　許認可も大変ですし、仕組みを作っていく必要があるので、行政との統一窓口がいるのではないかという話になってきて、新しい民間運営主体が公募されました。そこに仲間と応募して、運営を請け負って４年になります。いろいろな水辺の使い方をマネジメントしています。いろいろと使われていない川辺などのスペースがあります。このスペースを使うアイデアやお金がある人を探してきて、こういう条件で使ってもらうというプロデュースする仕事です。こういうパブリックスペースを使いたいのだけれどもなかなか使えない人たちの間に、我々が入ることによってマッチングするというビジネスです。ボランティ

アスタッフやプログラムを募集していて、関心具合によっていろいろな方々に参加してもらいます。

　イベントにボランティアで参加しているうちにビジネスに結びつくこともあります。これは１７拠点のＡとＢといわれるところですけど、Ｂが中之島公園で、Ａが中央市場になっていて、今、市役所の前の中之島公園を３か月行政からお借りして、去年我々が事業者を公募して、事業者が３か月運営する中で利用料をいただいて、再投資して空間を演出するということをしました。

　今年は、その運営期間が５か月になりました。中之島 GATE という所は、いろいろな規制があってなにも使われていない空間なのですが、イベントをすることで市民や事業者にこういった使い方ができるとか、ここで儲けることができるかもしれないということを共有することで、事業者を公募して、手を挙げていただくことができ、中之島漁港という常設の取組が始まりました。

　もう一つ、大阪水上安全協会という民間の組織なのですけど、観光船以外の船が結構ありまして、いろいろな既得権などの問題が出てきてそれを解決するために、この協会ができました。民間でそういった運行安全調整を行くことになりました。水上タクシーなども入っていて、航行安全ルールを自ら作っていくとか、船着き場管理するなどをしています。この協会ができたことによって、水上を使うビジネスや市民活動がやりやすくなりました。

水都大阪は水辺だけではなく、大阪全体をどういうふうに魅せていくかということが求められていまして、いろいろなコミュニケーションポイントがあって、それを組み合わせることで、いろいろなことができないかということでやっています。今まで空間には必ずオーナーがいて、オーナーが空間の使い方を作っていたと思いますが、例えば、一つの建物だったら建物オーナーがいて、スポンサーは店舗。もう少し大きな話だと、オーナーさんは地主で、スポンサーはデベロッパーという形で空間を作ってきたということで、今回の市庁舎もそうだと思いますが、水都大阪もそうです。アイデアを持った人が、その空間をどういう風に使いたいかということを提案されて、実際に使う。利用者や来街者も空間の使い方を変えてみるだとか、新しい使い方をするということで空間のイメージやポテンシャルが変わって見えます。そこで、いままでの空間にはなかった投資が生まれたり、オーナーさんが考え方を変えたりすることが出てきます。昔はオーナーが強かったが、今は利用者や市民が強くなっています。

休憩（19:40-19:50）

パネルディスカッション・クロージング（19:50-21:00）

【横浜市新市庁舎は街を活性化できるか？】

登壇者：山下裕子氏（NPO 法人 GP ネットワーク理事）、泉英明氏（一般社団法人水都大阪パートナーズプロデューサー）、本多初穂氏（馬車道商店街）、宮島真希子氏（NPO 法人横浜コミュニティデザインラボ）

モデレーター：国吉直行氏（横浜市立大学）

○国吉氏

今日は横浜の新市庁舎の活用を考えるシンポジウムの為にはるばるお忙しい中、ご参加いただきましてありがとうございます。この二人のプレゼンテーションについてたくさん質問したいのですが、それは後においておきまして、本日は、新市庁舎の低層部を中心にどういうふうな活用ができるのか、まだまだ、使われ方等決まっていない部分がありますので、コメントをいただいて、横浜ではどんなことができるのかをお聞きしたいと思います。それぞれにお話しをいただいたうえで、山下さん、泉さんに加わっていただきまして、どういった可能性があるのか等を議論していきたいと思います。１時間という短い時間ではありますので、どうぞ、よろしくお願いいたします。

それでは、本多さんからよろしくお願いいたします。

○本多氏

私自身は、市庁舎は市民の税金で作られるものなので、百年も二百年ももつしっかりとしたものを作っていただいて、質実剛健に作っていただくのが、一番だと思っています。ですので、１階に市民が利用できる機能を作るというのは、私自身はあまりいいとは思っていません。仮に、市民のために何かを考えていただくのであれば、小学校や中学校や保育園などの教室にしておけば、使わなくなっても市民利用で活用できるのではないかと思います。といいますのも、みなとみらいに暫定的な小学校をお金かけて作るのですけども、そういうのを考えますと、市庁舎の１階に作ってしまえばいいのではないかというのが私の気持ちです。百貨店とかショッピングセンターならいいのですけど、市庁舎なので、私はそういうものは必要ないと思います。

あえて、何かが必要ということであれば、通りがかった人がお手洗いを借りられるとか、涼めるといった今の市庁舎とか合同庁舎のような感じでいいと思います。いろいろな考え方があると思いますけど、まず、私は市役所に行きません。用事がないですし。現庁舎の１階は入ってはいけないような雰囲気ではないので、まあ、入れるのかなとも思いますけど。私は、皆さんが働いて納めた大切な税金を使うので、本当にそういう風に思っています。

ただ、本当に何にもなくて言いかというと、いろんな議論があると思いますし、こういうふうに何か集まれるようなことをしたいと思っているのであれば、

子育て支援であるとか、観光都市を目指しているのであれば、観光案内所が充実しているとか、携帯の充電できるとか、そういった方向がいいのではないかと思います。

○国吉氏

いかに今までの市役所が市民から遠かったかというのがわかりました。また、最低限のものを作ってほしいという内容だったと思いますけど、今後の街を考えたときに、観光とか子育て支援、そういう面からの可能性みたいなものを考えるべきではないかということだったと思います。ありがとうございました。

○宮島氏

私は、NPO 法人横浜コミュニティデザインラボというところで、情報を主軸とした市民の活動支援をしています。以前は新聞記者をしておりまして、その時代も含めると 25、6 年、この関内で働いて関わっている人間です。その前提でコメントしますと、本多さんがおっしゃったように、この建物は市民の税金で作られるものです。今日のために記録を確認しましたら、当初 616 億円という金額でしたが、それがオリンピックに間に合わせるということで、いきなり 51 億円増えて６６７億円に増えて、最終的に今年、749 億円になると、当初

の計画より１３３億円アップするということになっています。まず私が申し上げたいのは、先ほど桂さんがおっしゃっていたオープン横浜というのが最上位にある建物ならば、これからのプロセスですね、一部の市議会議員によると、インフレスライド条項などもあって、これからもどんどん上がっていく可能性があるとのことですが、ぜひ、値上げをするのであれば、その根拠やプロセスをオープンにしてもらいたいと思います。

市民は、その中でできることを、私たちが議論する前提として、低層部の議論をするのですが、すべてできるとは思っていませんし、制限の中でできることを考えていきます。コストがアップするのであれば、別の提案をするなど、オープンな予算の議論の中でできることを考えたいと思います。作るプロセスからニュースになっていくような、別の市民から指を差されることのないようなプロセスデザインをしてもらいたいというのが一つです。その上で、隠すことで対立が生まれるので、データをオープンにすること前提に、提案しあうようなコミュニケーションのプラットフォームをお互いに作っていけるようにしていきたいと思っています。

とはいえ、計画は決まってしまっていることなので、どのように良くしていくかということなのですが、俯瞰してみると、都市の居住人口といのは非常に集中していて、これからもどんどん集中していって、人口も世界的には爆発し

ていく中で日本は減っていく。横浜もどちらかというと 20 世紀型の世界観や経済の中でトップを走ってきた都市ですが、そこが、脱工業化になって、ソフト的なものが重視される社会になった時に、どこでも仕事ができる環境が生まれたりすると、私が昨年度から思っていることは、横浜は 20 世紀を巨大な船で来て、日本が縮小傾向に走って行ったときに、大都市がゆえに一番遅れてしまう都市になってしまうのではないかと思っています。

　そういった中で、大量のごみを出したり、大量のエネルギーを使ったり、そういう課題が地方の過疎の都市になるのではなくて、横浜は課題先進都市ではないかというのが私の問題意識としてあります。その中で、チャレンジするということであれば、私たちはその投資に見合うリターンを得なければならないと思っています。それは、どういうことかというと、課題解決をインストールしてやるような建物であってほしいと思います。例えば、食品のロスが多いとか、排熱が多いとか、巨大都市として食糧の自給率が低いとか、子育てが厳しいとか、そういうものを解決できるようなエンジンを持った建物であってほしいと思います。そういった時に何があるべきなのかということを考えています。

　いま、本多さんは小学校をインストールするのがいいとおしゃっていましたが、私は例えば、皆さんのアイデアを創発する一つの事例として作ったほうがいいなと思うのが、農園です。シティファーマーという白水社から出ている本

があるのですが、横浜の姉妹都市であるバンクーバーでは、かなりの都市農園が勃興していて、そこで得られるコミュニケーションというのがあります。例えば、ホームレスなどの社会的弱者の雇用の場になるとか、食品ロスが肥料になるとか、横浜がかつて都市化して失われた機能を再発見できるような機能を入れていってほしいと思います。それはコンテンツも一つですけど、そこの上に様々外国人や社会的弱者などそこに全然いかないと言っていた人たちが行くようなコミュニケーションのスペースが生まれて、富山が広場、大阪が水であれば、横浜は農ならどうだろうという単純な発想なのですが、そこに来たらなにか作業があって、コミュニケーションが生まれる場を設けるなど、課題解決をインストールした建物を作ってもらいたいというのと、作るプロセスからブランドになっていくような形でここができていくといいなと思っています。

○国吉氏

　ありがとうございます。実は、本多さんは到着が遅れまして、山下さんと泉さんのプレゼンは見てらっしゃらないのですね。また、前段で市の方がプレゼンテーションしたのですが、低層部をできるだけ地域の中で価値のあるものにしていこうという前提でコンセプトを作っています。それに、参考になるような２つの都市の事例を紹介いただきましたが、それに対する感想というのはお

話しづらいですかね？

○本多氏

事前にいただいた資料は拝見しております。私は、横浜は横浜だと思っていて、よその都市での成功事例が横浜で成功するとは思っていません。先ほど、予算の話の中で、どんどん予算が増えてしまって、こどもとか孫の時代までその借金を負うようなことになるので、私はそれが嫌なのです。もともとそう思っています。見て、いいな、すばらしいなとは思いますが、私は１円たりとも無駄に税金は使いたくないし、もし使うのであれば、本当にこれからを担う子供のために使いたいと思っています。例えば、神田の駅前に保育園・幼稚園・図書室・プールが一つになっていて、小学校・中学校が一つになっているビルがあるのですが、私はそれがすごくいいなと思っていて、狭い都会の中で、いかに有効に土地を使うことができたかという事例だと思っています。私はちょっと前まで、すぐ近くに住んでいたのですが、子供が学校に通うのに２０分かかります。小学校１年生だと歩いて 40 分もかかります。それは異常だと思います。せっかく市がなにかをやるのであれば、本当に市民には何が必要かということを考えてもらいたいです。

もともとこの辺は、昔はいろいろな人が住んでいて、商業地域になって人が

いなくなって、最近マンションができてきて、こどもが増えて、本当に小学校も教室が足りないし、中学校も２校が１校になったのできつきつです。そういう市の課題を同時に解決できるのであれば、そちらの方がより有効な税金の使い方だと思っています。

楽しいということも確かに必要だし、せっかくいい場所に作るのであれば、市民の方から集めた税金を有効に使うということを考えるのであれば、まず、こどもとか、車いすを使っている方の為に使うことの方が大切なのではないかなと思います。決して、よくないと思っているのではありませんが、本当に必要なのかなと思っているというのが一つの考えです。

○国吉氏

今のお話を市役所の庁舎の中ですべて解決するというのは難しいのではと思いますが、真摯な御意見として伺っておきたいと思います。宮島さんは先ほどのプレゼンテーションについていかがですか？

○宮島氏

両方ともに共通しているのが、人と人との接点を増やす仕掛けになっていると感じました。ただ広場を作るのではなくて、そこには作りとかデザインもあ

るとは思うのですが、人と人との接点を増やす仕掛けがあって、そこに今までの市役所ではない団体が入って、規制緩和をしているのですね。いままでの使い方とは違う使い方を OK にしている。そういうコミュニケーションを増やすために、お役所的なことではなくて、民間を挟むことによってゆるくコミュニケーションが生まれて、この街がいいなとか好きだなという状況が生まれていると感じました。

○国吉氏

私がお二人の話を聞いて感じたのが、富山にしても大阪にしても、この街がどういう状態かということに対してお二人が仕掛けてこられた前に、地域としてもこの街をこういうふうに変えていきたいという危機感があったと思うのですが、そういうものが成り立った前提というものをお聞かせいただけますか。

○泉氏

大阪全体の話とそれぞれのエリアの話の両方があるのですが、大阪全体としては、そもそも都市の環境や良質な都市空間が殆どなくて、公園が少ないという中で、あとはもちろん経済活動もどんどん地盤沈下している中で、どういうふうに街を元気にしていくかということを行政だけではなくて、企業の方も考

えていて、これしかないという藁にもすがる思いでした。頑張っていこうというよりは、これしかないという話でした。

　各エリアでもいろいろな問題が顕在化していて、川があることで逆マイナスの効果しかないところや空間をどういうふうにうまく使っていくかという時に、新しいアイデアが入って地域の方の応援がある所は活用が進んでいます。応援がないところは活用が進んでいなくて、差はあります。それぞれ課題があります。

　大阪はそこそこの都市なのですが、大きな田舎みたいなところで、「俺が、俺が」という人が多いのでなかなか横に繋がっていきません。市民団体同士が繋がらないし、企業は企業で市民団体とは別の動きをしているというのがあります。水辺で都市を再生していこうという時に、そこをみんなで活動を考えていければ、全然違う福祉の活動や教育の活動などと繋がるのですね。そういうことを街全体でやっていこうというふうになって、繋がっていったということなのかなと思います。

○国吉氏

　大阪の課題を解決する糸口として、水辺に着目して、いくつか解決し始めて、それが繋がっていって、地域のつながりができたということですね。山下さん

から、富山のお話をお願いします。

○山下氏

富山は今、すごく成功都市のように紹介されているのですけれども、実はそうではなく、西武百貨店が撤退したあと、その建物を撤収することもなく、すぐ近くに残っていますし、ロッテリアやマクドナルドも撤退したままになっています。グランドプラザができる前は、人が歩いていない状態でした。

今は、広場ができて非常に多世代の人が出かけてくるようになりました。地方都市の百貨店というのは、働いている方もお客さんも一緒に高齢化しているというのがあるのですが、富山は広場ができたことによってスタッフもお客さんも若返りました。印象的だったのは、百貨店の店長さんが久しぶりにベビーカーを見たよとおっしゃっていたことです。

また、開業当時は、富山の中心地にあるグランドプラザにジャージとスリッパで来る人が多かったのですが、今は、非常にみなさんが人に見られることを意識して、おしゃれをしてくる場所になったのかなと思っています。先ほどの質実剛健という言葉が非常に印象的だったのですが、皆さんの大切な税金を使って建てる時に、質実剛健であることは非常に大事だと思うのですが、富山のグランドプラザも 16 億円使っている広場なのですが、今では作ってよかった

と言っていただいています。

　大阪の紹介で「俺が、俺が」という言葉が印象的だったのですが、富山は逆に非常に働き者で下を見てばかりと言われている街で、ほとんどアクティビティがない街だったのですね。そこで、広場という空間を使って、誰もが使える場所という認識を深めていただいたおかげで、今では一番若い方だと高校生がお金を払って使っています。

　なかなか定量化できない話なのですが、街に関心を持つ方が増えたように思います。月に１度も来ていなかった方が、広場という場所ができて、そこで、いろいろな方がいろいろなことをするおかげで、横のつながりでまず行ってみようという機会が増えて、街という場所は地方都市においては商店主のものという意識があるのですが、街という場所は我がことなのだという意識を持つ方が増えたように思います。

　それを一番表しているなと思うのがごみの量なのですが、グランドプラザができた当時は、みなさん、食べたものをそのまま置いていかれる状況というのがあったのですけど、今では、清掃の方が拾うゴミがないと言われるくらい、自分の家のリビングルーム的に使っています。私は弱者にこそ広場はあるべきだと思っていて、１円もお金を持っていなくても居つづけられる場所であり、居心地がいい場所であることによっていられるわけですけれども、日常的に広

場に出かける人が増えると、緩やかなつながりが生まれます。そういったことで、これからの社会においては、出かける場所があるということが非常に大事だと思っています。広場という場所があったらいいなという想いでいます。

○国吉氏

私も富山のグランドプラザには何回も行ったことがあるのですが、富山市自体がお年寄り向けに、元気を保つために街へ出ていく、で、おじいちゃんとお孫さんが一緒に電車に乗って街に買い物にくると、健康と街の賑わいの象徴がグランドプラザで、街に出てくる機会をつくるという市長の戦略だと思います。

広場という空間は、街に出ることを誘発する効果があったと思います。駅周辺だけではなくて、街中まで出かけてくる仕掛け。市庁舎に作る広場的な空間が、作り方によっては地域の方々を結びつけるといった役割を担う可能性もあります。

一方で、大阪も昔から見ていますが、立派な中之島界隈がありながら、なかなかゆったりと街を楽しむということができませんでした。船で散策するというのは昔からありましたが。その資産をうまく使うということで、それを提案した地域・市民の方とハードルを下げた行政の方の苦労のお話が聞けて、すごい展開をしていったのだなと感じました。その中でお聞きしたかったのが、パ

ートナーズとオーソリティの２つの組み合わせをお聞かせいただけますか。

○泉氏

10 年以上前ですけど、パートナーズオーソリティというのは、いろいろな活動の経験を踏まえて、課題が出てきて、こういう組織が必要なのではないかということで生まれた 2013 年からの組織です。

もともと、河川にも不法係留があったり、既得権があったりで、使いたいと思わないし、使いたいと思っても使えないということがあって、そこを市民団体のゲリラ活動でこういうことをやったらいいのではないかという中で、地域も行政も応援してくれたということがあります。責任を持ってやるということで、公共空間なのでどんな使い方もできるわけではなかったのですが、わきまえてやる主体に対しては、行政は非常に協力的でした。

そういうことで、ひとつひとつ既成事実を作っていきました。プランの内容よりは、行う団体を見て、信頼できるところかどうかということを判断しつつ、徐々に許可をしていって、爆発的に使う人が増えていきました。使う人が増えるとトラブルが増えますし、許認可の仕分けのこととかを行政が全てやるのはふさわしくないということで、民間の中で作法を作っていくのが大事です。

行政はルールを作らないとコントロール出来ないので、ルールを決めてしま

うと、いい使い方ができません。本当はそういうものをどんどん呼び込んでいかないといけないのです。行政がルールを作ると面白くなくなるので、民間がある程度責任をもって面白い使い方をして、行政がそれを支援するとう方法が一番いいのではないかなということに落ち着きました。というわけでパートナーズとオーソリティという関係が生まれました。

○国吉氏

　そうしますと、オーソリティというのは、管理局が集合して、それでパートナーズが考えたコンセプトに沿ってできるだけ対応していこうという組織ですか？

○泉氏

　実は、オーソリティというのは管理組織ではありません。大阪府の都市魅力創造局と大阪市の経済戦略局という観光担当でその２者がオーソリティです。オーソリティはどちらかというと、おもしろいことやらなかったら怒られるという行政部局です。管理してしまうと使われなくなってしまうので、使われないと怒られる部局を作ろうということでできたのがオーソリティです。オーソリティは管理者と喧嘩するのです。

○国吉氏

ということは、管理者は別にいるということですね？

○泉氏

はい。オーソリティとは別に管理者がいます。

○国吉氏

スタートしてオーソリティの組み合わせができるまで４年位かかっているのですか？

○泉氏

そうですね。４年位です。

○国吉氏

４年で信頼を勝ち取るためにどういった取組をしたのでしょうか？

○泉氏

我々も喧嘩しました。行政の方、経済界の方、学識経験者の方々がこういう組織がいるということを活動の中で思ってくださっていたことが大きいと思います。

○国吉氏

中之島公園の界隈の管理が３か月から６か月になったということですけども、そういう状態になっていることがすごく活気的だなと思います。

○泉氏

あれも、最初は１年貸してくださいと言ったのですけど、どんでもないと言われました。あそこは、３か月借りるために６か月協議しまして、なにをやっているのだという感じなのですけど。一事業者が３か月間も公共空間を占領していいのかという議論もありました。あそこの公園は、市長反対というデモもあそこから始まるような公園で、みんなに愛されている公園なので、みなさん、自分のものという意識があるのです。一気に解決するのは難しいので、徐々にやっていきました。

○国吉氏

では、その管理期間が過ぎると、従来の管理になるのですか。パートナーズのプロデュースから外れていくのですか。

○泉氏

そうです。

○国吉氏

市庁舎の低層部について、何かこんなことをやってはどうかというご提案はありますか。

○山下氏

今、思い出したのですが、グランドプラザを建てる 18 年くらい前に、富山市は市役所を建て直しているのですね。その時のコンセプトが、街全体を見渡せる展望塔とみんなで話ができる広場的空間が庁舎のど真ん中にありまして、その周りを囲んで執務室があって議会棟がある。ヨーロッパの街の役場というのは、街全体を見渡せる展望塔とみんなで話ができる広場的空間があるということで、そのコンセプトで作られたそうです。そういう意識を持って作られたことによって、広場という場所ができる流れができたのだと思います。

今日私は、横浜市役所のこの事業に対する皆さんのお気持ちを踏まえることなく、やってきているわけですけども、こういった様々な気持ちがあるようでしたら、こういう壇上の高い場所から話すのではなく、フラットな場所で、リアルな今を表すのが広場なので、ぜひ、フラットなところでフラットな話をするところから始まったらいいなと思います。

○国吉氏

富山市は設計者が市役所の設計ですよね。もともと広場の中で進んでいたということでした。広場が出来て、気候もあって屋根の下に人が集まるですね。泉さんからもお願いします。

○泉氏

いきなり決まってしまって、できたものに対してどうだと言われても言いようがないというのがあります。横浜は、ぼくら都市計画をやっている人間からすると先生みたいな街だと聞いていますし、市民の力で街を作ってきているということで、こういう素晴らしい場所で、観光客も来るし、ビジネスマンも来る場所だと思います。非常に横浜のシーンとして重要な場所に市庁舎ができて、１階が使える可能性があるというのは非常にいいことだと思っています。

そこをどういう風に横浜として、こんな街だぜというのを表明していくのか、アクティビティで示せるような、いい市民の活動がそこにあるとか、そういうものをできる前に皆さん方、来られている方々で、どういうシーンで、どういうアクティビティなのかとかを議論し、国内外に表明して、課題解決になるのかとかを、皆さんが持っている団体の知恵とか力で作り込んで行って、それにふさわしい空間や運営スタイルを決めていくプロセスができれば、プロセスそのものが横浜らしいと思います。そういう動きができたら面白いと思います。

○国吉氏

横浜の街づくりは１９７０年位から始めているのですけど、そういう時にも、単にこうビルをたくさん建てるのではなく、横浜の港とかの資産を取り入れたことをやってほしいと思います。横浜には歴史があるので、私のような東京で学んだ人間が提案をする、それが東京では実現されていなくて、横浜では実現されているということで、恥をかいたこともあったし、反省もしています。そういうことで期待を込めて、学びながらやっていきたいと思います。

水辺などほかのキーワードもあるのですけど、それをうまく取り入れながらやっていこうということになると思います。本多さんがおっしゃったように、横浜なりの市庁舎を整備していく検討に、いろんなプロセスの中に生かしてい

ければいいと思います。また、それをどういう形で運営していくかを、ご提案いただければと思います。それを次のステップとして、新たな都市の豊かさを作っていくということになるのかなと思っています。

○本多氏

　実は古い建物が大好きで、ここも県庁も横浜市民の財産だと思っています。なので、古い建物がひとつひとつ壊される度に、本当に悲しい思いをしています。今度建つ市庁舎も本当に、ひ孫・玄孫までが本当にいい建物だよねと思えるように、横浜市民が自慢できるような建物になってほしいです。先ほど税金は無駄に使ってほしくないと言いましたけれども、お金をかけるとことにはかけて、横浜市民が自慢できるようなすばらしいデザインだったり、他の高層の建物に影響をあたえたりするようなものが建ってほしいです。新しく建てるのであれば、100 年後の人たちからも素晴らしいと思われるものが欲しいと思います。

○国吉氏

　横浜らしさみたいなものについてはいかがですか。

○本多氏

　やはりここがあるからこの風景なのか、あの風景だからこの建物なのかはちょっとわかりませんが、今後は川辺に建ちますし、文明開化のにおいがあるとか、帝蚕倉庫も近所にあるので、そういったデザインを考えてほしいと思います。横浜という煉瓦ですし、私は煉瓦がすごく好きなので、全部とはいかないと思いますが、文明開化を感じさせるけれども現代的であるという方が、私は好きですね。

○国吉氏

　整備予定地は、馬車道の近くにありますし、帝蚕倉庫も近くにあります。関内地区という歴史のある地区とみなとみらい地区、野毛地区、伊勢佐木町地区などの結節点になる地区になります。また、北仲北地区の開発も行われるので、どうやってつながりや回遊性を持たせるかが難しいところだと思います。そういう中で、市民活動を築いていきたいということで、宮島さん、いかがでしょうか。

○宮島氏

　そうですね、大阪の話では、かなり行政と市民が腹を割って信頼関係を築い

て、非効率的なのだけれどもとことんやっている感があって、真剣にどうしようもないことをどうしようかとやっていて、目標は一緒なので、コミュニケーションをちゃんとしようということがあるのかなと思いました。そこを、設計にかかってくる部分で、コミットしてくれる業者を入れてほしいし、市役所にもそういった体制を取ってもらいたいと思います。対立ではなく提案しあうような準備が市民側にも必要だと感じました。

富山の事例からすると、厳しい場所だと思います。自由であることを市民は求めますし、いい活動を対話しながら作っていく必要があると思います。対話しながらそれができるような運営団体・運営体制を整えていく必要があります。広場は公園のマネジメントに似ていると思うのですけど、作るプロセスから使いたい団体にどんどん声をかけて、ワークショップの参加者は募集じゃなくて、来てほしい人にこちらからちゃんと声をかけて１本釣りするとか、そこでちゃんとお話して作っていくというプロセスをどこがやるのかということですよね。そこにちゃんと予算をつけてやるということ。

あと、ここで紹介をしておきたいことがあるのですが、国吉先生もご存じだと思いますが、岩崎駿介さんが Bank ART に来られて、新しい横浜の都市の７か条をお話になっていて、とても印象的だったので共有しておきたいと思います。岩崎さんは国吉さんと一緒に横浜の都市デザインを作った方のおひとりで

すけれども、その後、アジアの居住に関する様々な調査をする国連のお仕事で、南北問題だとかを世界的な視点から都市を見られていて、その反省を含めた新しい７か条を贈るということを昨年度フォーラムでおしゃっていました。「歩行者の安全を確保する」。「人の出会いを促進するデザインであること」。あと先ほどの私の提案をこれに非常に影響を受けているのですが、「農地へのアクセスを確保する」ということで、自分の食べるものがどう作られているのかということを忘れてしまう人は病んでしまうことが有るそうです。「あらゆるエネルギー確保手段を持っている」、「再水の地熱循環？」ということで、自分で始末をつける都市になれということだと思います。そういうことを、市庁舎を建てるときにここを魅せていく、そのための再投資だということにしないともったいないと思います。

　あと、最後の二つですが、「空間的・時間的に遠いものを近くに感じさせる装置を作る」ということで、禅問答のようなのですけど、私の解釈ですと、自然の素材とかが横浜の建物にはなかったり、壊されちゃった建物がいっぱいあったりする分、再現まではいかなくても、その技術の継承になるような部分を、横浜の建物にはこういう建物の都市デザインの記憶があったということや、こういう素材を使っていたということを示せるといいと思います。私も、内装の更新で地元の木を使うとかで、循環をきっちりやってもらいたいと思います。

東京湾をフィジカルに体験するという意味で、見る海じゃなくて使う海だったり遊ぶ海にしたりすると、子供たちやお年寄りも体験することができると思います。そうすることで、海岸線から遠い横浜の海を取り戻すということになるのではないかと思います。そういうことがアクティビティになって、活動していく装置を作ってもらいたいなと思います。

○国吉氏

横浜は街づくりを頑張ってきたとはいいながら、先ほどお話があった大阪や富山が新しい都市空間づくりにチャレンジしているわけですけども、次は横浜がチャレンジして、せっかく市庁舎を作るので、低層部の空間でチャレンジをしていけるといいと思います。

先週、韓国にいましてソウルという街にいたのですけど、ある通りを見てきたのですけど鉄道が下にあって、不便な通りを３年位前から公園化するということで事業を行っています。で、現在、事業者の設計施工の会社が選ばれる段階です。現在の朴市長がちょっとブレーキを掛けました。あまり作りすぎず、ベーシックに作っておいてくれというオーダーがあったそうです。それで、地域や市民の人の意見を反映するのを待って、最終的な整備を行うそうです。ですので、全部決めてしまわないで、少しずつ市民が提案してくるのを待ってか

ら行うという仕掛けでやっているそうで、すごい時代だなと関心いたしました。

本日はですね、富山とか大阪の新たなチャレンジされているということを聞いて、新しい都市の在り方というのが勉強になりました。横浜なりのものをどうやって作っていくのかということが、我々に与えられた課題だと思います。市庁舎が作られるプロセスの中で、いろいろと市民と理論をして、低層部の在り方がもうちょっと鮮明にアイデアが出てくるというプロセスを取れればなと思います。

最後に、山下さん、泉さんから一言ずつ御願いいたします。

○山下氏

最後にふさわしいかはわかりませんが、いまちょっと思い出した話があるのですが、富山の広場では農業が大事だということで、JA の青年部の方たちが小学生とバケツ稲を 2000 鉢育てて、鉢をわざわざ運んで迷路をつくって、そこでみんなで遊んで農業について考える機会を作りました。非常に印象的で、脳幹ににおいが残っています。たんぼに勉強しに行くことも大切だと思うのですけれども、都市という無機質な空間で、私たちが忘れかけているものを持ち込んで見せると、非常に響くものがあるのだなということを学ぶことができました。街の真ん中にニュートラルで、ある程度広くて、いろいろな人がいろいろ

な風な使い方ができる場所を作ると、皆さんがもっている強い気持ちや想いを再現する場所になると思います。今日のような空間では、限られた人が、金曜日の夜にこれだけしっかりとした姿勢で話を聞きに来る人がいるということが、横浜の価値だと思います。広場では、不特定多数の無関心な人でも、通りかかった際にそれを知る機会を得られる場所なのですね。ですので、皆さんの強い気持ちをわざわざ広場を作らなくても横浜には広場的空間がたくさんありますので、そこでまず表現されて、みなさんで感じあってこれからの横浜を憧れの街にしていってほしいと思います。

○泉氏

　先ほどの韓国の話がおもしろいなと思ったのですけど、まず作りすぎたら駄目というのはその通りだと思います。もう一つは、今までの計画というのは、まずビジョンがあって、プランニングして、設計して、ものを作って管理しましょうというふうになって、全部ぶつ切りで、ビジョンがあって、設計も基本設計と実施設計が別で、施工も管理も全部別の人がやるという状態で、最後には何のためにやっているのかわからない状態になることがあります。今後の街の作り方は、最初のビジョンと最後の管理・マネジメントをする人がセットでないとだめだと思います。セットで作って、それに対して何を作ればいいのか

というのは、運営しながら実際にやっていって、中や作るものを決めていくという発想が必要だと思います。今回も、今後、市民の方々が集まって話されるということであれば、どこかの段階で運営する団体を決めてしまって、そのチームがいろいろな工程を経つつ、何が必要かということを、できてから任せるのではなく、マネジメントする技術なども学びながらやっていくのがいいのではないかと思いました。

○国吉氏

　ありがとうございます。今日のシンポジウムは、新市庁舎ができる一方で、市民の声を聴くということでとにかく一回スタートしてみようということ、また、低層部の作り方が漠然としている部分がありますので、質を高めるためにはどういう可能性があるのかということを確認したいということで、開催いたしました。今回のシンポジウムを支えていただいた商工会議所や各団体がたくさんいます。今後、どのような可能性があるかということが見えてくると思いますが、今日はとりあえず、新しい公共の場づくりにチャレンジされているお二人をお招きしてお話を聞かせてもらいました。今後、ぜひいろいろな活動団体や地域の方々も入ってどのような可能性があるのか議論ができればいいなと思います。

市庁舎低層部の在り方については、まだまだ、次へ繋がるような可能性や取り組んでいる事例を念頭におきながら次のステップに進んでいければと思います。つたない進行ではありましたが、これで本日のシンポジウムを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

新市庁舎の【活用】を考えるシンポジウム（第１回）アンケート集計表

新市庁舎低層部（１階～３階部分）について必要だと思うもの、低層部を活用してどのような活動を行いたいか、どのような活動が行われることを期待するか、等、新市庁舎の低層部の活用方法について、御意見がございましたらご記入ください。
よくあるような自治体庁舎建築にならないように期待しています。 特に市民活動は自発的なものが中心にならないと面白い空間にはならないので。
青葉区の隅にお住まいの方でも来ようと思える施設またはアクティビティがあること。 もしくは環境、エネルギー、福祉などの先進性があること。
やはりポイントは「日常利用」だと思います。地区の結節点ということや馬車道駅から近いことなど動線としてポテンシャルは高いと思います。 しかし、それに甘えるのではなく、広場を使わせるしかけが必要だと考えます。 それが周辺道路の一体整備や機能のつながり等があると思います。
市民から自発的に行われるような活動 ←おしつけや強制ではない、予め使い方が決められていない自由度の余白を残す。
市民ふれあいの場、憩いの場として活用 ・デザインコンセプトで大岡川側のウォーターフロントは感心しない。隅田川沿いの晴海トリトンスクエア、築地聖路加ガーデンがウォーターフロントとして良い景観 ・北側からのランドマーク中心の借景を活用すべき
デュッセルドルフの市庁舎前のような市民が気軽に立ち寄れる空間が整備されると良いと思います。
行政のサービスと商業が融合したような空間になれば良いと思う。 本多さんは庁舎に用がないからほとんど行ったことがないと言っていたが、そういうような人たちが日常的に訪れるような場所になったら良い。
他の人に言いたくて連れていきたい開かれた観光スポット 市庁舎＝地味だし、用がないというイメージを払しょくできる。 文化の発信拠点としてにぎわいがある活動が行われるべきだと思う。
シビックプライドの発信地 ヨコハマの今とこれからを紹介するスペース
・全市的市民大会かノーベル賞（横浜型）表彰式会場のような全市的に注目するイベントやセレモニー（横浜のシンボルとしての活用） ・観光案内総合センターとして、まず来街者が立ち寄る情報センター
私の行政へのイメージは「お手本」である。そのお手本は横浜という街に正しいものを映し出してもらえる事を期待する。 そんな反面、新たなものにチャレンジ出来る場であってほしい。その場は空間として余白がある（新たな設計が可能な）場であると良い。
政令市や友好交流都市のアンテナショップや観光ＰＲブースを優先的に作る。 現地の人に横浜に住んでもらい、地元へも発信してもらう。 横浜が災害になった時に横浜を支援してもらえる関係をつくる。
開港に伴う歴史的資産（開港資料館、中央図書館、みなと博物館所蔵）がしっかり評価し、市民をはじめ国民に拡く公開する場と考え、他の期間は六本木の新国立博物館と同様に使用すべき。 ＭＩＣＥ施設として機能する。
市民の税金が使われるなら市民にとってリターンとなるような活用のされ方が望ましい。且つ、どこの都市でもしてないような新たな挑戦をするような活用法になれば市民も誇りに思うだろう。 具体的には、宮島さんが仰っていたような食の問題を解決する為の農スペース等。
農園
・屋根つき広場の位置は動かせないのか。水辺側に思いきって開いた方が良い。 ・いままでの決め方があまりにクローズドでいきなり市民との協働をうたうのはおかしい。

新市庁舎の【活用】を考えるシンポジウム(第１回)アンケート集計表

新市庁舎低層部（１階～３階部分）について必要だと思うもの、低層部を活用してどのような活動を行いたいか、どのような活動が行われることを期待するか、等、新市庁舎の低層部の活用方法について、御意見がございましたらご記入ください。
大岡川沿いの親水空間
低層部平面のプランから水辺への連続的なプランを展開し、水辺でのオープンカフェ等の活動があると良いと思います。
水辺の市民活動を補完する利用が望ましいと思います。
大阪と富山の事例が発表されたけど、街の活性化と横浜市庁舎のベクトルが違う。税金の無駄遣いは極力避けて欲しい。 新庁舎の低層部外観は赤レンガを使用することは？
泉さんにぜひ教えてほしい。北浜も中ノ島も基本的には行政エリア。なぜ、人を呼び込めたのか？ 新市庁舎の低層部も本質には同じ問題を抱えている。
自然（風や水辺）が感じられる、気楽に利用できる居心地の良い場所。コーヒーやお酒を楽しめるテラスがあっても良い。 質が高い世界に誇れるような場所にしたい。
だれでも入りやすいスペースを作り、この地が開港前後にどのような所であったか！そしてどのように変遷して来たか！展示してもらいたい。
アート、商い、自由な活動が行われることを期待しています。 横浜野菜を使った料理が食べられるフードワゴンが出店できたり、民間、行政、多様なアイディアを受け止める場であって欲しいです。
１、２代の市庁舎の建物を復元すればと思ってます。 ＴＶやＣＭなどの撮影場として新たな場を作ってほしいです（県庁に負けずに）
低層部ではベタな市民活動や必要のないコマーシャル的なイベント等が格好よくできるようにし、居心地のいいくつろげる場を設けるべきだと思います。
提示されている構想は従来の公共施設から脱却していない。 大人だけのビジネス的機能だけでなく、子どもから高齢者までの声や姿がみえる市の中心らしい生活感あるつくり、かん点が欲しい。
行政側より、まちづくり団体やクリエーター、イベント団体、デザイナーなどに任せた方が有効でセンス・アイディアあふれたプランが出てくると思う。 そもそも「ここでなければ」というのはエリアの特性や環境であって市庁舎と抱き合わせて考える必要はあるのか疑問である。
民と官の距離を近くするための場 民…行政の事業、発信を知る　官…民間の声を聞く
自分の住まう街（市民）のリビングルーム、学びの場、来訪者の心地良い場所 高齢者を活かせる（健康、余力、経験）老若男女に向けて… もっと近い立場どう志のWSスタイルの意見交換したい
保育所など子育て支援に活用
世代や国籍を問わず、誰でも自由に共有でき、だれとでもひとりでもすごせるオープンな空間。 利用規定も緩やかに、従来の施設管理・運営の視点をもたない、柔軟な発想力のあるスタッフに運営に関わってほしいです。

新市庁舎の【活用】を考えるシンポジウム(第１回)アンケート集計表

新市庁舎低層部（１階～３階部分）について必要だと思うもの、低層部を活用してどのような活動を行いたいか、どのような活動が行われることを期待するか、等、新市庁舎の低層部の活用方法について、御意見がございましたらご記入ください。
市民活動で使える開港記念かんみたいな貸室が圧倒的に少ない、そういうのは絶対必要。 場だけでなく、コーディネートする人材も絶対必要、むしろその人が大事。 だいたいこの質問を市民に対して100字以内でこたえろというのも失礼！ それは時間をかけてじっくり話し合うべきもののはず、それが気に入らないです。
・オリンピックに向けた最先端と古き良き横浜の共存 ・人々が大人数集っていても安心、安全な場を作るための対策
防災拠点、休日も想定 災害時の観光客や市民、ビジネスマンを守る避難場所、救急医療の場
イベント+災害時帰宅困難者向けに活用。ゲリラ大雨（豪雨、大雪、急な鉄道事故等、２７．８．４（火）花火大会時JR事故の様な事等、突発事故に依る場合、etc、震災時の住民避難所になる）
エクスペリエンス（教育、娯楽、設入、美）を経験できる場で且つエコシステムがまわせるシステムが重要と考えます。 ex)ＭＢＡの誘致など
周辺の中小ビル低層部と連動を持たせるような適度な携み分けができた商業を組み込むべき。 エネルギーetc社会問題の解決に寄与する活動も欲しい。
市庁舎からまち全体につながると良いと思う。シティガイド協会の方々のようにまちにつながるガイドのような要素が入ると良いのではないか。
新庁舎低層部の活用方法について、普通の市役所の機能を作ればいいと思う。市役所はあくまで市役所であって、市役所以外の機能は必要ないと思う。
活用するならば、横浜市の整備費・維持費・運営費に財政負担がいらなくなるような貸スペースの広さや付加価値の検討、 使用料の設定などをすべきと思います。(それができないならば、市によってあの場所で、市民負担でにぎわい創出目的などで低層部を整備する意義がよく分かりません。)
「新庁舎に低層棟があり、様々な活用方法が考えられる」ということ自体市民に知られていない。 活用方法について多様なユニークなアイディアが必要だと思うが、そのために新市庁舎に低層部ができることを広く周知すべき。
ゆっくりと完成する場でよいのかもしれません。 市民が参加するプロセスが大切！完成図ではなく、そのプロセスを〝売り〟にしたらどうでしょうか。
プロセスが横浜らしく、運営の仕組みづくりに関心があり参加しました。次回の集まりにそのあたりを期待します。
今はまだイメージできません。

新市庁舎の【活用】を考えるシンポジウム（第１回）アンケート集計表

９月27日（日）の18時30分より２回目のシンポジウムの開催を予定しています。 ２回目のシンポジウムでは、屋根付き広場の活用、水辺空間の活用、市民利用施設・商業スペースのアイディア、等のテーマを計画していますが、上記のテーマもしくは、それ以外のテーマでも結構ですので、御意見やアイディアがございましたらご記入ください。
デザインコンセプトで「緑地空間の整備」が記せされているが、基本的なところで ・アトリウムには樹木を置かない。外構での電柱のような樹木の配置はしない。樹木も生きものであることを忘れないように（露を浴びて日光に当たり光合成を行う）。 ・樹木は鳥が来て楽しむ（実を食べる）ような種類の配置を考える。 ・山下公園から新庁舎、野毛地区へ鳥が移動するように樹木を配置する。
様々なイベント空間となる広場
新庁舎だけでなく、屋根付き広場でつながる創造都市センターの利用も含めた議論があっても良いように思う。
今のコンセプトブックのプランだと屋根付広場が重点的で開かれた空間だと認識しています。 どちらかというと水辺の方へオープンにスペースをとり、さらにその水辺でアクティビティが発生することを望みます。
・水辺空間の利用は賛成なのですが、前提として、大岡川の臭気、汚さをまず改善しないと魅力にならないと思います。 ・みなとみらいを訪れる人の起点となる機能を組み込むと良いと思います。都心部だけでなく、郊外部の魅力を発信する工夫も。
水辺と隣接している立地条件の水辺空間利活用について、現状はかなり限られた市民活動や船舶事業者のみ利用されているが、全ての民が水辺へ導かれる事例を創って様々なライフスタイルの場面に利活用する。 遊ぶ、学ぶ、働く、旅する、食べる、備える、 現在の大岡川河川管理の神奈川県の意見も聞きたい。 水辺school⇔里山school 横浜市民交換留学、都心部⇔郊外部の良さを活かした場を新庁舎に取り込んで欲しい
「水辺空間の活用」について、実際に水辺利用を実践している団体からの意見・提案の機会になればと思います。
裏路地に展開される飲食店なども絡めて賑いをつくる複合的な施設にできたらいいと思います。 フェア的なイベントがあちこちでできるような、性格の異なる広場や緑地を作っていただきたい。
市民の考える力（市民力）を育てるような教育の場 すぐに市民力というけれど、その市民力はどうやって作られるというのでしょう？
中区での小・中学校の充実が必要。他には図書館やイベントスペースなどの利用が良いのではないか。商業スペースは不要。
東京のチェーン店ではなく、チャレンジしたい企業に期間を決めて出店してもらう。 土日にも活力ある建物になるように人の流れを作る。 東京にマネできないことが大事ではないか。 駅からの導線が誰にでも歩きたくなるような工夫をしてほしい。
商業スペースより市民が利用する施設、公共施設がメインの方がよい。 PFIを利用して民間団体が建物全体をマネジメント・管理運営したりテナントを誘致してもよいのでは。
シビックプライドの発信地 ヨコハマの今とこれからを紹介するスペース
人に言いたくなる、自慢したくなる、行きたくなる市役所とは？ せっかく税金をつかうのであれば、他とは違うもの、区役所にはないもの満足してもらえるものを作ってほしい。
民間の活力を生かした画期的なスペースにしてもらいたい。
行政主導でなければ、いいプランが出てくると思う。民間にまかせた方がいい。 誰のため、何のための空間、施設なのか、具体性のある話を期待します。 市庁舎とは関係なく、横浜特有の景観、個性、地域性（臨海部など）を活かすプランは多々あるので、すくい上げていってほしいです。

新市庁舎の【活用】を考えるシンポジウム（第１回）アンケート集計表

９月27日（日）の18時30分より２回目のシンポジウムの開催を予定しています。 ２回目のシンポジウムでは、屋根付き広場の活用、水辺空間の活用、市民利用施設・商業スペースのアイディア、等のテーマを計画していますが、上記のテーマもしくは、それ以外のテーマでも結構ですので、御意見やアイディアがございましたらご記入ください。
370万都市、国際都市では空間活用の中で安全面などマネジメントも平行して考えていく必要があると思います。
公共空間を使って、いかに収益をあげ、それを公共に再投資していくか。その事業性をどう成立させるか。そんな議論を聞いてみたい。
お金があっても、なくても居心地の良い空間、人が集まることが当たりまえの風景になるような仕組みづくり等を「官民一体でつくるためには？」をテーマにしてみてはいかがですか？
今回、話題に出たパブリックビューイングはオリンピック含め、大事で集客力のある企画だと感じました。そのような企画をするための物理的アイディアをテーマにしても良いのではと感じました。
民間と行政が一体となった事業、事案を勉強したい。
旧市庁舎の活用は？新市庁舎と周辺のかかわりあい
新庁舎と周辺地区の関係性や効果等をもう少し深くしたもの
大岡川沿いになぜ商業スペースが必要か？市会棟の面積の広さの根拠は？現市役所の再活用も含め、保育、小、中、高校、図書館など、関内、ＭＭ、新港地域に都市的配置計画を立てる 低層棟内部、屋上部含めて生活用利用を積極的に加える 都市部で住み、学び、育てることを希望する新しい街づくりと庁舎のあり方
区役所と本庁舎は使い方としてどう違うの？という市民のギモンにこたえる。
防災拠点としての機能
質問に書かれているようにテーマについて、様々な情報提供、意見交換の場にしてほしいと思います。
３回目は広場でやってほしい。大通公園とか。
シンポジウムよりワークショップ、ワールドカフェの方がおもしろいのでは？
シンポジウムとセットで公開のマーケットサウンディングを実施しては。 又は、先行してマーケットサウンディングを実施し、その結果をシンポジウムで示しては。（活用コストをだれが負担するのか（市民負担はいかほどか）のイメージを見える化）
デザインビルドには反対だが、選定プロセスを100%オープンにすれば良い また決定後も市民との対話を持ってほしい
今回のシンポジウムでは、山下さんや泉さんの様に街づくりの成功者のアイディアを伺えたのは本当に有意義でした。 横浜市は大きな都市なので、意見をまとめるのは難しいだろうと思いますが、常に前向きに議論が進められたら素晴らしいと思います。
市民から遠い存在である市庁舎をいかに市民に近いものにしていけるか、段階的な戦略が必要になると思いました。 その戦略の部分を先行事例も含めて伺えたらと思います。

新市庁舎の【活用】を考えるシンポジウム（第１回）アンケート集計表

９月27日（日）の18時30分より２回目のシンポジウムの開催を予定しています。 ２回目のシンポジウムでは、屋根付き広場の活用、水辺空間の活用、市民利用施設・商業スペースのアイディア、等のテーマを計画していますが、上記のテーマもしくは、それ以外のテーマでも結構ですので、御意見やアイディアがございましたらご記入ください。
だから、100字以内っておかしいって！！ 農、バケツたんぼからの市民感情の変化の話はおもしろいと思います。 都市農園という考え方はとても共感しました。まちらいぶらりいもすてきだと思います。
２にも書いたが、普通の市役所を作ればいいと思う。
富山市の空間、利用の様にハマのどぜうは出来るとは思いますが（とれる？居る）利用の後先のクリーニングはどうなんでしょうか？
他市町村に限らず、海外にもユニークな公共施設の活用事例がありましたらお聞きしたいです。 大人と子どもが一緒に思いきり体を動かせる空間作りのヒントなどがあると面白いです。
豊島区のクヤクション担当者の話を聞いてみたい。
今はまだ特に思い浮かびません。